戦車道の世界に魔王降臨

そばもんMK―Ⅱ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黄昏の中に消えた「魔王」甘粕正彦。しかし、彼の物語はそこで終わることは無く――？

※続きません。

※続きました（白目）

目次

黒森峰女学園
プロローグ ―― 1
第1話「始動」 ―― 12
第2話「胡蝶の夢」 ―― 21
第3話「仁義八行」 ―― 33
第4話「比翼」 ―― 48
第5話「想いの勝利」 ―― 63
第6話「臨界」 ―― 77
第7話「悪夢の始まり」 ―― 87
第8話「忠」 ―― 102
第9話「憧憬」 ―― 115
第10話「仲間」 ―― 132
第11話「魔王」 ―― 164
第12話「不朽の夢」 ―― 176
第13話（終）「私の戦車道」 191
プラウダ高校
один〝雨宿り〟 ―― 202
два〝礼儀作法〟 ―― 213
три〝再出発〟 ―― 226
継続高校
Yksi〝逃避〟 ―― 235
Kaksi〝不名誉な栄光〟 246
Kolme〝傷跡〟 ―― 257

黒森峰女学園
プロローグ

「理解しろ甘粕――現実にない宝（ユメ）を持ち帰らなければ大義を成せないと思っていた時点でおまえは弱い！」

「世の行く末を憂うなら、自分の力でどうにかしてみろォオッ！」

裂帛の喝破とともに放たれた一撃をまともに受けながら、しかし男の胸中に湧き上がるのは静かな感激だった。

なぜならこれこそが前人未踏。

至極単純な二つの道理の上に成り立ったそれは、しかし男が終生見たことのない勇気の表れだった。

一つ目の理由は、彼がコレはしょせん夢であるという見切りをつけたこと。

他ならぬ彼がそう断じているのだ。その境地に達する葛藤が、決断が、恐怖が、男には……否、男だからこそ理解できるのだ。

ゆえに二つ目。男は、そんな決断に憧れてしまった。

そんなことが出来るのか、否。いや、しかしもしも本当に出来るのならばどうか見せ

てくれと、焦がれるように希った。ならばこそ、男――甘粕正彦は野望（ユメ）の完成すらをも放り投げて。

そうして、真の勇気を見た。

「おまえの存在こそが俺の楽園（ばらいぞ）。そう確信した瞬間に、もはや決着はついていたのだ。おまえならば、たとえどのような黄昏だろうと踏破する。何よりそう信じたがっているのは俺なのだからな」

ならばこそ信じさせてくれ、おまえの勇気を。

「夢ではない。そうなのだろう。柊四四八。大義を成すのは現実の意志……夢から持ち帰るのが許されるのは、そのための誇りだけ。俺の理解に、間違いはないのだな……？」

恐怖も、忌避感も、総じて不要。理不尽が、試練が、超常の力がなくとも、人は希望を、そして勇気を抱いて立ち上がることが出来るのだと。

そんな真の勇気の体現者が、今目の前にいる。

「ああ……ようやく理解したか劣等生。おまえほど理解の悪い奴が、今後は現れないことを祈ってるよ」

なるほど、己は弱者であったか。ああそういえば、この戦いが始まって以来、柊四四八にそんなことを指摘されたな。耳が痛い。

では、潔く去るとしよう。なぜなら――

「ならばよし。悔いもなし！認めよう、俺の負けだ！」
己は敗けたのだ。しかし不思議と――いや、当然。
悔しさ、無念さ。そんな感情は一切ない。むしろ、嬉しくて嬉しくて仕方がない。
「俺の宝と、未来をどうか守ってくれ。おまえにならすべてを託せる。万歳、万歳、おおおぉぉォッ、万歳ァィ！」
俺の愛したものは、この天下に確と存在すると証明された。これ以上の祝福は存在しないだろう。
そうして――
豪笑とともに、甘粕正彦は黄昏の中へと消えてゆく。魂すら粉砕する神威の嵐も、彼とともに消えてゆく。
消えてゆく、消えてゆく。なぜなら、全てはユメなのだから。

ゆえに、これは夢の続き。主演は勿論、かつて魔王と呼ばれたこの男――ではない。
「ふふふふ、はははははははははははははは――――！
ああ、なんと素晴らしい。なんと眩しいのだろう。素晴らしいものを見せてもらった！」
戦車道全国高校生大会、決勝戦。その様子を会場に設営された一室から眺めていた長

髪の男ーー甘粕正彦が呵々大笑しながらそう叫ぶ。
だがそんな甘粕の様子とは異なり、部屋は極度の緊張と不安に満ちていた。
「少し静かになさい、貴方」
その原因こそが部屋の最前列に座り、今しがたなおも大笑している甘粕に氷のような視線と言葉を投げかけたこの女性にあることは、この場の誰もが理解していた。
西住しほ。
高校戦車道連盟の理事長にして、戦車道の世界においてその名を轟かす西住流の師範を務める女性。
そんな彼女が明らかに尋常ではない様子でいるのだから、それも仕方がないことなのかもしれない。だが、甘粕はそれでもなおその表情から笑みを消すことをしなかった。
「ああすまないな西住殿。なるほど確かに、先の俺の行動はこの場には相応しくない。騒ぐならば応援席ですべきだったかな、これは失敬。いやはや全く、自罰してはいるのだがな、それでも時折〝つい〟やってしまうのだ。だがそれほどまでに彼女の――西住みほの決断は素晴らしかった」
「……副隊長がフラッグ車を捨て、試合を放棄した。あの子の行いは西住流として、またチームを預かる副隊長という立場であることも鑑みれば、叱責されてしかるべきものです」

「……」

しほの冷徹な言葉にも甘粕は動じない。表情から笑みは消えず、その双眸がまっすぐしほを射抜いていた。しほはそれがなぜか、とても恐ろしいものに思えて仕方がない。

「……っ。皆さまも、今回はお恥ずかしいものを見せてしまい申し訳ありません。ではこれで――」

「何を謝罪する必要がある。先も言っただろう、今回の彼女の決断は素晴らしいものであったと」

またしても口を挟む甘粕に、ついにしほも我慢の限界を迎えてしまう。

「ですからっ、あの子の行動は西住流として――」

「撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し。鉄の掟、鋼の心。勝利をこそ渇望し、一切の妥協は許さない。ああ確かに、その教えから考えれば彼女の行いは紛れもなく邪道だろう。そうでなくとも、彼女の立場上搭乗車両を放棄することは事実上の白旗だ。それは戦車乗りとしてしてはならぬ行為であり、ゆえに間違っている、という西住師範の言葉は紛れもなく真実だろうさ。選択としては救助隊に一任するというものもあったわけであるしな」

「だが、俺が言っているのはそう言った正誤の問題ではない。そうではないのだよ西住師範。そんなことは問題ではない。そもそも先ほど貴女が話していた心構えなど、彼女

が知らぬわけはない」
「……貴方、何が言いたいの」
「つまるところ俺が素晴らしいと言っているのは彼女の行動そのものではない。正誤の判断など価値観や状況によっていくらでもその結果が二転三転する程度のものでしかない」
　例えば、仮に今回の出来事が全国大会の決勝ではなく同部隊内の紅白戦程度のものであったならば？
　例えば、救助隊を待つ猶予すら彼女らにはなかったとしたら？
　同じ行動をしたとしても、訪れる結果はおそらく異なってくるだろう。甘粕が着目しているのはそこではない。
「先ほどから言っているだろう。彼女の〝決断〟は素晴らしいと」
　言葉に熱が、魂が宿る。決して大きくはない甘粕の声は、しかし確かに部屋中に響いていた。
「自らが所属する集団が掲げる理念。背負っている期待と責任。それら全てを理解したうえで、彼女は、西住みほはなお仲間を一刻も早く救うことを選んだ」
　その葛藤を、苦悩を、そして恐怖を。全て承知したうえで為された決断。
「ともすれば、いやおそらくは、彼女にそこまでの考えはあの瞬間にはなかったろうさ。

だからこそ彼女の行動は半ば反射的なもので――」

深く考えた結果ではないだろう。そもそもそんな時間すら、あの瞬間の彼女には無かっただろうから。

「水没した車両の安全は絶対ではない。そして、水の中に閉じ込められた乗員が抱くであろう恐怖と絶望。仲間をそんな状況に放置するなど、考えもつかなかったのだろうさ。彼女が何より大切にしているのは勝利ではない。共に戦い、共に笑いあえる仲間だ。ならばそれが全てであり、俺はその決断と意志をこそ尊敬する」

ふと、甘粕の脳裏にかつて目にした勇気ある若者らの姿が思い浮かぶ。

誰一人欠けることなく、朝へ帰ることを目指した彼らは、各々素晴らしい勇気（ヒカリ）を見せてくれた。

見せつけられた、魅せられた。あれとは方向性はまた異なるが、それでも思わず想起した。

「つまりは勇気、覚悟だよ。それがたとえ何であれ、願う真（マコト）があるならばそれを誇り、その道をひたすらに進むこと。躓き、倒れ、泥にまみれようと何度でも立ち上がること」

本当に肝要なのは意志の方向性ではなくその絶対値。己が信ずる真（マコト）を貫き通すこと。各々が為したい理想（ユメ）を、絶えず胸に抱くこと。

それこそが甘粕正彦の愛する勇気。

「何故なら誰でも、諦めなければ夢は必ず叶うと信じているから」

「ならばこそ、俺は彼女に確と胸を張ってほしいと願う。そして無論、西住師範――否、西住しほ。おまえにもだ」

しほに対する呼び方が変わる。無礼だなどと騒ぎ立てる者はこの場にいない。誰もが甘粕の言葉に呑まれ、そしてただ聴き入っていた。

そしてまた、しほはその意味を理解していた。ああ、つまり――

「……私の言葉に嘘がある。つまりこう言いたいのでしょう」

「否。だがそれに近いな。西住しほよ、おまえの言葉に嘘はない。西住流師範として、あれらは紛れもなく本心であろう」

だが、と甘粕は指を立てる。その先を聞けば、おそらく自分は苦悩することになるだろうと理解しながら、しかししほは甘粕の言葉を待った。

「――だがそれは、西住しほ自身の言葉ではない」

「……」

「社会的組織や集団の中において、そしてまた社会的な立場を得ることによって、人はどうしても己を見失い、また己を殺してしまう。我とは組織の崩壊につながる要素の一つだからな。おまえもまた、己自身どうすればよいか分からぬのだろう」

「だがそれで構わんのだよ。悩み、悩み、悩んだ末に人は答えを出すのだ。本当に自分が為したい道とは何なのか、本当にこれでよいのか、何か過ちを犯していないか、とな」
その逡巡こそが人なのだ。だからおまえは何も間違っていない、と。
そう、だから――
「好きにするがいい。どのような選択であれ、それが真実おまえの信ずる真（マコト）なれば、その果てに何があろうと踏破できる」
そこで初めて、甘粕は深く息を吐き、そして深く頭を下げた。
「非礼を詫びよう、西住師範。差し出がましい真似をした。では、失礼する」
顔を上げた甘粕が部屋から出ていっても、しばらく動けなかった。

「甘粕、正彦――」
戦車道とは無縁の家に生まれながら、若くして日本戦車道連盟のナンバー2にまで上りつめた男。ここまで長く、また密度の濃い会話をしたのは初めてだった。
「少し、疲れたわねーー」
ふと自分が何時の間にか立ち上がっていたことに気付いた。席に座りなおすと、周囲にいた他の役員たちが色々と話しかけてきたが、一切合切聞こえない。
（――私が本当にしたいことは、何？）

視線の先、表彰式を控えて整列しようとしている黒森峰のメンバーーーいや、みほに話しかけている甘粕の姿を見ながら、しほは深く椅子に体を預けた。

そう、主演は甘粕正彦ではない。戦車道とは乙女の嗜み。あくまでもこれは彼女たちの物語だ。

だが――そう、だが。

甘粕正彦の存在は、きっと大なり小なり様々な波紋を齎すだろう。

「見守ることもまた、勇気。そうなのだろう、柊四四八」

それがどんなものか、甘粕ですら想像することは出来ない。

「ならば俺は見守ろう。彼女らの夢を、その道のりを」

それでも、柊四四八が示したように。

人は希望を、誇りを、理想を抱いて立ち上がることが出来るのだと信じているから。

不安などない。彼女たちは必ずや、素晴らしい勇気を見せてくれると確信しているのだ。

「俺はいつもおまえたちの傍に在るのだ。胸を張れい、少女たちよ」

おまえたちの未来にどうか幸あれ。

俺はそれを、心から願っているぞ。

第1話　「始動」

「失礼。ここの隊長殿と副隊長殿はおられるかな？」

私がその人に出会ったのは、忘れもしない、あの決勝戦の直後。表彰式の準備のためにみんなが動き始めたころだったと思う。

あの時。頭の中は真っ白で、自分でも何をしているのかすらよくわからなかった。

ただ、無線越しに聞こえる仲間の悲鳴が、私を突き動かした。

助けなきゃ、助けなきゃ、助けなきゃ！

――だから、陸に上がったとき。自分の乗っていたフラッグ車が破壊されて敗けてしまったことを。チームの十連覇を台無しにしてしまったことを。

みんなの期待を裏切ってしまったことを理解してしまって。

「あ――」

浴びせられる嘲笑、侮蔑、失望、その他さまざまな悪感情の数々。そこから逃げたくて、でもそれは不可能で。

「――っ」

ふと、みんなに指示を出しているお姉ちゃんの姿が目に入った。――私になんの言葉

も、目を合わせることさえせず、ただ黙々と務めを果たしているお姉ちゃんの姿が。
その時私は、何を言おうとしたのか。
それはあきれ返るほど単純で、だけど言えなかった。
――私に、味方はいない。
そう理解してしまったから。
今度こそ、私の頭は真っ白に――否、真っ黒になってしまったのだ。
それは言葉にするなら混沌。正も負も、ありとあらゆる感情を滅茶苦茶に混ぜ合わせたような、底なしの黒。
視界が回る。
かけられている言葉が、雑音混じりの不快なものにしか聞こえない。
そんな闇の中に、その人は舞い降りた。
その人を見たとき、まず感じたのは恐怖。
怖い。怖い。怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い――。
目の前にいるこの人が、なぜか途轍もなく恐ろしい。
理屈ではなく本能が、そんな絶叫を上げた。
恐怖に射すくめられた私を尻目に、その人は手近な子に最初の問いを投げー―
「――――」

カツ、と靴音を鳴らしながら、隅っこのほうで小さくなっていた私の前に立った。
そこで初めて、私はその人をよりはっきりと認識した。
男性にしては長めの髪。スーツに隠れてはいるが、何かしらの武道か、あるいはスポーツをやっているのか鍛え上げられているのが分かる堂々たる体躯。
そして、喜悦一色に染まった表情。
「――ああ、少し怖がらせてしまったかな。これは失敬」
視線を右往左往させている私を見て、その人は苦笑しながらそう言った。その瞬間、ふっ、と体が楽になった。先ほどまでの覇気は幾分落ち着き、こちらが平気な程度にまで抑えられている。
「ここに来るまでの途中に、少々気に入らん者らを見てな。そういう者らを抑えるために少し肩に力が入っていたようだ。本来はその場で咎めるべきなのだろうが、それよりも俺はおまえに一目でも良いから会ってみたかった」
「わた、しに――？」
一体なぜ？まさか、まさかとは思うがお母さんたちの関係者？ああそういえば、最初に言っていたではないか。
――隊長殿（お姉ちゃん）と副隊長殿（わたし）はおられるか。
ならば、ならばならば私は私はどうすれば嫌だ嫌だ怖い怖い怖逃げたいやめて来

ないで助けーー

「落ち着け、西住みほ」

ぽん、と頭に手を置かれた。大きくて、ごつごつしたその手は、しかし不思議と嫌なものではなかった。

「俺はおまえたちの家の関係者ではない。仕事上付き合いはあるが、その程度に過ぎん」

こちらの考えを見透かしたかのように、男性は言葉を放つ。そこで、少し小走りでお姉ちゃんがやってきた。どうやら隊の誰かに事のあらましを伝えられ、急いでやってきたのだろう。

男性もお姉ちゃんに目をやると、おいていた手を離し、そしてそのまま私にその手を差し出してきた。

「甘粕正彦。日本戦車道連盟副理事を務める者だ。此度の貴殿の勇気ある決断と行動に賛辞を贈らせてもらおうと思い立ってな、こうして足を運んだというわけだ」

「……」

そこから先のことは、よく覚えていない。何かを話していたような、またはお姉ちゃんが何か話しているのを聞いていたような気がするが、それらのほとんどは彼方へと消えていってしまった。

ただ、一つ確実なのは。

私はこの時、私を認めてくれる人がいることを知ったということだった。

「――ああ」

全国大会決勝から数日。自らの執務室の椅子に腰かけながら、甘粕は回想する。

――みほは私の大切な妹です。

――私は、ただみんなを助けたくて。

――責任は全て私にあります。……全て、私の責任です。

思い返すのはあの日、消えるような小さな声で漏らされた言葉の数々。そのどれもが、恐怖と不安に慄きながら精一杯振り絞った勇気の結晶だ。

素晴らしい。なんと美しいことだろうか。

出来ることならば、その輝きを永遠に見守り、愛していたい。

「だが」

そう――だが。

「そんなものは不要。そう示された」

かつての俺――審判の魔王であるならば、その輝きに忘我しただろう。逆境を、苦難を、試練を。人はその中においてこそ輝くのだと。

それは正しい。何故なら俺の掲げた祈りもまた、人類の性であることに偽りはないのだから。
その考えに歪みはない。今もなお甘粕正彦は魔王であり、審判を統べる者である。
だが、その果てに待っていたものは敗北だった。
仁義八行、真の勇気の化身たるもう一人の人類の代表者。
彼の言葉を、放たれた一撃を、その時の感激を、俺は決して忘れない。
「――ならばこそ、それを見てみたい」
甘粕は席を立つ。
尻を蹴り上げて立たせるのではなく。
格好良い様を見て、その背中に奮い立つ。
そんな勇気をこそ、見てみたいのだと。
子供らの成長を見守り、導き慈しむことこそ大人の本懐。
ならば試練など不要。そう分かってはいるのだが――
「ああ、これはなんともどかしい」
――それでも思うのだ。人とはやはり驚くほど腐敗しやすいものなのだと。
なぜおまえたちはそうなのだ？己の行いを恥ずかしいとは思わんのか？
甘粕正彦は目の当たりにした。西住みほ、甘粕自身が勇気あるものとして見惚れた少

女。そんな彼女に浴びせられる無責任かつ容赦ない悪感情。

安全圏から一方的に放たれるそれらは、しかし結局のところそれを言うことが目的なのではない。

それは手段だ。溜まった鬱憤、不平不満、嫉妬に嫌悪。それらを晴らすのにちょうど良い生贄（スケープゴート）として、勇気ある少女は選ばれてしまった。

学園関係者、ＯＧ、西住流の関係者、果てはどこの誰とも分からぬ評論家、教師、学生から――罵倒され、嘲笑され、踏みにじられる。

なるほど確かに、それは彼女にとって乗り越えなければならない試練だろう。その果てに、彼女はどうなる？

勇気を見せるか？はたまた潰れてしまうか？

それは確かに気になるし、その行く末も見てみたくはあるが――

「そのような試練は相応しくない」

なぜならその試練からは腐臭がする。

おまえたちは恥ずかしいとは思わんのか。無抵抗の少女一人に全ての責任を擦り付け、安全圏から何の覚悟もなしに攻撃を行い、嘲笑する。

それまでその少女に頼りながら甘い蜜を啜っていた輩が、その少女を知ろうともせず持ち上げていた輩が、どの口で少女を扱き下ろすのか。

いいだろう、ならば結構。これより俺がおまえたちに試練を与えよう。例外は許さん。誰も彼もが当事者となり、覚悟と責任を抱くのだ。

名目上は視察と講演。しかしその本質は、魔王が齎す試練である。

己の思いを曝け出せ。高らかに理想（ユメ）を謳うがいい。その果てに勇気（ヒカリ）を見せてくれ。その輝きに、どうか見惚れてみたいのだ。

審判の魔王は動き出す。

甘粕を乗せたヘリコプターが黒森峰女学園学園艦にやってくるのは、その数時間後のことである。

――よってここに、歯車はずれ始める。

人々の勇気を、理想を、もっともっと見てみたい。しかしそんな願いとは裏腹に、人々はあえなく堕落してゆく。それが堪らなく口惜しい。

見守るという答えは変えぬ。不安も逡巡もありはしない。

ただし少々趣向を変える。見守ることは確かに大切だが、それはすなわち放任するという意味ではないはずだ。

「俺は俺流のやり方で、おまえの言う勇気を見てみたい。ゆえに少々、羽目を外すぞ柊四四八（イエホーシュア）。なに、おまえの言葉は変わらず胸に刻んでいるとも」

大義を成すのは現実の意志。ああ、忘れもしない。ならばこそ――

「――邯鄲（ユメ）は使わん。そんなものに頼らずとも、人は勇気を示せるのだからな」

思い返すのは一人の少女。その示した勇気。

現実を生きる人間として振り絞った、精一杯の勇気。

ならば俺も、この現実で為すべきことを為すだけだろう。

超常の力など不要なり。もとより俺は本来彼女らとは違う世界の人間だ。

ジャンル違いが彼女らの世界をかき乱すなど言語道断。

序幕の舞台は黒森峰女学園。

主演はあの決勝戦の舞台にいた、二十台の戦車の乗組員たち全員。

そしてのみならず、この学園全ての人間。

「では始めようか」

誰も逃れることなど出来はしない。

――魔王からは逃げられないのだ。

第2話「胡蝶の夢」

――裏切り、という行為がある。

何らかの約束、同盟、信頼関係を捨て相手側に寝返ること。

無論言うまでもなく、それは最悪の行為だ。裏切られた者の心情を著しく傷つけ、踏みにじる最低の行為。

そしてそれは、実際にはまだ起こっていなかったとしても、その組織に多大な影響を与えるものだ。それは当然だろう。隣でともに轡を並べて戦う仲間が、裏切るかもしれない――そんな疑念を抱いてしまえば、まともに戦うことすらできなくなる。

後ろから撃たれれば、どうしようもないのだから。

ならば。これはどういうことだ。

なぜ私は、私たちは、こんな辛い戦いをしなければならない？

甘粕正彦。貴方は何を考えている――？

話を少し前に戻そう。

事後処理に追われる毎日を過ごしていた私のもとに、連盟から使いの人間がやってきた。彼は要件を手短に伝え、私の了承の返事を聞いて去っていった。

要件の内容は、端的にいえば視察。

甘粕正彦。日本戦車道連盟副理事。そんな肩書を持つ男が、我々を見にやってくる。

何故このタイミングで、と依頼が来た時歯噛みしたのを覚えている。

過日のあの出来事以来、チームには不穏な空気が流れている。いや、それどころではない。

この学園全体だ。どこにいても、聞こえてくるのはあの決勝についての悪意ある言葉の数々だった。

――ふざけるな、と声を荒げることが出来ればどれだけ楽なのだろう。

それを――妹の味方になってやる唯一の言葉を、言えたならばこの気持ちも少しは楽になるのだろうかと。そう考えて――

「……駄目だ。それは出来ない」

隊長である自分の務めは、一刻も早いチームの統一と、後援会など外部への対応。それを為さないわけにはいかない。

ここで私が勝手な行動をすれば、どうなるか。

妹であるみほを私が表立って庇い建てすれば、その時チームがどうなるか。その時私

は――

「――っ」

馬鹿な。何を考えている？正気か、西住まほ。お前は本当に、それでいいのか？

湧き上がる後悔、疑念――自己嫌悪。

「……嫌だ」

やめろ。やめろ。そんなことは考えちゃいけない――！

頭を何度も振り、そしてそのまま手近な壁に叩き付ける。

何度も、何度も、何度でも。痛みでこの苦しみを少しでも誤魔化せるのなら、それでいいと思った。垂れてきた赤い液体と鈍い痛みに、ようやっと私は我に返った。

とりあえず、絆創膏でも貼っておこう。

結局その日も、日付が変わる直前まで私は様々な仕事に追われた。体が鉛のように重い。このまま寮に帰って、一刻も早く寝よう、と私は学園を後にした。

寮までの道のりは決して遠くない。むしろ近いと言うべき距離だが、それでも普段は学生の声が響くその道が夜の静寂に包まれているのは、どこか不気味だった。

街灯の灯りさえ頼りなく思えてくる。なんとなくそれが嫌だったので、私は少し足を

速めようとして――

「――く、うぅっ!?」

恥ずかしいことに、足がもつれて倒れてしまった。こんなところで倒れているべきではない。早く帰らなければ、と。

そう、分かってはいるのだが。

「……」

どうして私は、起き上がろうとしない？

どうして仰向けになって、空を眺めている？

どうして――泣いている？

いくら力をいれようとしても、体が動かない。

もうこのまま、消え入るように眠ってしまいたいと、そんな考えすら浮かんでくる。

「……」

ふと、足音が聞こえた。規則正しく、また堂々としたそれは、徐々に私のほうへと近づいてくる。

逃げなければ、と当たり前の警鐘が鳴っているが、しかしそれでも体が動かない。

とうとう、足音が止まった。最後まで規則正しいそれは、私のすぐ傍で止まったのだ。

「――――」

夜の闇の中、遠い街灯と仄かな月の光が逆光となって顔がよく見えないが、それでも背丈や体格から見て男性だろう。

ああ、私はどうなってしまうのだろうか。ひょっとして、言葉にするのも悍ましい扱いを受けてしまったりするのだろうか。

――それで、楽になれるのだろうか。

だとしたらそれは、なんと甘美な――

「こうして相見えるのは二度目かな。久しぶりというには些か間隔が短いが、この場合はなんと言えば良いのだろうな?」

かけられたのは、そんな言葉だった。その声に私は聞き覚えがあって。

「しかしおい、随分と様子が変わったな。月見するのは結構だが、それでもこのような往来ですべきではないだろう。ましておまえのような年頃の娘では、悪い男に捕まっても文句は言えんぞ?」

月が雲に隠れる。そのおかげで、よく見えなかった男性の顔を私はようやく視認した。

「あま、かすさん?」

どういうことかと、私は思わずその名前を口にしていた。

彼が来るのは、確か明日の夕刻だったはずだ。今この場所にいるはずがない、と。

「なに、単に明日は空きだったのでな。急ではあるが予定を変更して早めの現着にしただけだ。俺としても実際に学園艦というものを見てみたかったし、な」

そういって彼は私の手を軽く引く。するといったいどういうわけか、体を苛んでいた疲労感が随分と楽になった。先ほど壁に頭を打ちつけたせいで負った傷も塞がって、痛みが消えている。

これならば、とりあえず立って移動すること程度ならば問題ないだろう。

困惑する私の背中や頭を彼は軽く叩く。多分、砂埃やゴミをはたいているのだろう。

現実とも幻とも知れぬ奇妙な浮遊感の中で、私と彼は話をした。

私のこと。母のこと、チームのこと。他にも、他にも、沢山話した。――無論、妹のことも。

その時私は泣いていた。自分でも何を言っているのか分からなくて、しかしそれでもこれまで抑えていた感情があふれ出るのを止められなかった。

ほとんど初対面の人に話す内容ではないだろう。だが、夢の中であるという奇妙な確信があったから、私はそんな突拍子もない行動に出たのだろう。

だってそうだろう。触れただけで疲労感がとれるとか、傷が治るとか、そんなことは現実にはありえないのだから。

そう、これは夢なのだ。ならば少しくらいは、弱音を吐いてもいいだろう。
彼は静かに私の話を聞いていた。口をはさむことは無く、しかし確かにちゃんと聞いてくれた。
――そうして私は、溜めこんでいたものを吐き出しつくした。
しばらくの静寂のあと、彼が口を開いた。
――西住まほはどうしたいのか、と。
現実ならば答えに詰まっただろう。だが、夢ならば。
「――――」
己の本音を、告白しても良いはずだ。
言って、その瞬間。彼もまた破顔して。
「ならばよし。努、その想いを忘れるな。おまえが信じる道を往くがいい」
瞬間、浮遊感とともに私の意識が遠のいてゆく。
「……」
固い感触をまず感じた。体を起こしてみれば、昨日も残って仕事をしていた部屋だった。どうやら机に突っ伏してそのまま寝てしまっていたらしい。
しかし、それにしても。
「――なぜ彼なのだ?」

あの夢の中。全てを吐き出す相手としていたのは、なぜか彼だった。
一度しか会ったことがないのに、なぜ彼だったのだ？
「……まあいい」
夢は夢。それに意味などありはしない。おそらく色々な意味で印象が強かったのが、彼が夢に現れた原因だろう。
所詮その程度なのだから。
だが、しかし。
「――」
ふっ、と笑みが浮かんだ。例え夢でも、己の本音を吐露できたのだ。少しではあるが、楽になった気がする。
溜まっていた疲労は、とうになかった。
では、今日も頑張るとしよう。

「く、ふふふふ。ふはははははははは――！」
それは本当に偶然だった。数多の重荷を背負い、数多の鎖で縛られた少女。

ぼろぼろの体で、そして揺れる心で、それでも必死に足掻いている少女。
俺はそんな少女の姿を見た。
ああ、目を奪われたよ。疲労と心労の影響だろう、先日目にした姿よりも随分とか弱くなっていたが、そんな外面などどうでもよかった。
揺れていた、そう、揺れていたのだ。彼女もまた、己の信じる道と進むべき道との乖離に苦しみ、恐怖していたのだ。
それこそが、その迷いこそが人間だ。彼女はいずれ必ず答えを出すだろう。もとより俺はそれを見に来たのだからな。
であれば、俺はその選択を尊重しよう。思う存分、苦悩するがいい。その果てにきっと、おまえの勇気(ヒカリ)を見ることができると確信しているのだ。
「とはいえ、そのままでは少々危険だと思ったのでな。思わず禁を破ってしまったよ」
彼女に夢を見せてしまった。ああ、全く。相も変わらず興が乗ってしまうとこうなってしまうのだ。悪癖ではあると理解はしているのだが、性分なものなのだ、どうしようもない。
「周与胡蝶、則必有分矣。(周と胡蝶とは、則ち必ず分有らん。)此之謂物化(此を之れ物化と謂う)」
知らず、甘粕はそう口ずさんでいた。
胡蝶の夢。

夢の中で蝶になっているのか、それとも今の荘周という人間が蝶が見ている夢なのか、という有名な説話。

その言わんとするところは、蝶も荘周も本質は己であり真実であるという万物斉同の思想である。

「肉親への情も、家訓を守ることも、そこに貴賤や正誤など存在せん。ゆえ、おまえの好きにするがいい」

甘粕は笑う。夜風につられて顔を上げれば、雲から月が顔を覗かせて闇を静かに照らしている。

「ああ、これは一層楽しみではないか」

外套を翻し、魔王は闇の中へと消えていった。

そして、翌々日。

甘粕が黒森峰戦車道を視察する日。

「ふふふふふふ、はははははははははは――！」

整列していたメンバーの前に、甘粕は降ってきた。

文字通り、上空のヘリコプターから飛び降りてやってきたのだ。馬鹿笑いとともに。

無論というか当然だが、パラシュートはつけていた。普通はそうでなければ死んでしまうので当然だろう。

唖然とする面々を前に、何でもない様子で甘粕は口を開いた。

「――おはよう諸君。聞いてはいるかもしれんが俺が甘粕正彦だ」

「視察ということで今日はやってきたわけだが、俺が見たいのはおまえたちの真の実力と信念だ」

甘粕はこちらを見る面々をぐるりと見渡す。この場にいる全員が主役だが、その中でも特に気になっている人物がいるのだ。

そして彼女らはすぐに見つかった。

――西住まほ。

――逸見エリカ。

――赤星小梅。

そして――西住みほ。

それらを確認して、甘粕は視線を正面に戻す。チームのメンバーが浮かべる表情は様々だ。不安、困惑、侮蔑に無関心。ああ、俺への敵意も見受けられるな。

結構。だが不参加は許さんぞ？

「――そこで、今日は紅白戦をしてもらいたい」

有無を言わさぬはっきりとした口調で、甘粕はそう言い切った。

知らず、笑みが浮かぶ。期待で胸が騒いで仕方がない。

――ではこれより、試練を始めよう。

第3話　「仁義八行」

「ふざけやがって――！」

逸見エリカは憤慨していた。ああまったく、冗談ではない。なぜこんな馬鹿げた真似をしなければならない？

これは最早試合ですらない。形式上それに則っているが、その本質は処刑だ。

あの子を、みほを追いつめるためだけの――！

「……っ」

ぎりっ、と歯を食いしばる。固く握りつぱなしの拳からはいつの間にか血が流れ始めており、刺すような痛みが脳を灼く。

あの男は、一体何を考えているのだ？

なぜそんなにも楽しそうに笑っているのだ？

私たちの苦悩が、そんなにも甘美か？

――私は本当に、これで良いのか？

「……は？」

待て。それは違うだろう。今私がこんなにも苦しいのは、あの男への憎悪と怒りの所

為のはずだろう。
だというのに、今私は何を考えた？
自己嫌悪だと？
馬鹿な。馬鹿な。私は、間違ってなどいない。
黒森峰のメンバーとして、私は――
――各々の信じる真（マコト）を示すがいい。
「――っ！……あ、ああ――」
天啓を得るが如く、私は理解していた。この残酷な戦いの意味を、彼の言葉の真意を。
――逸見エリカ（彼女の友達）として、本当に為すべきことを。
そうか。そういうことだったのか。それならばこの戦いの異常なルールにも納得がいく。
全ては彼が私たちに与える試練だ。
――十対十にチームを分けたうえでの殲滅戦。
――それぞれの指揮官は、隊長（西住まほ）と副隊長（西住みほ）で。
――〝偶然〟みほのチームに割り振られたのはあの出来事以来彼女を攻撃していた人物が大半で。
「――『相手方への造反も、委細構わん。各々好きにするがいい』」

公然たる裏切りの承認と推奨。それが意味するところは、つまるところ各々の信条の強さと方向性を試す試練。

――おまえたちは今の〝彼女〟が置かれている状況をどう考える？

根底にあるのはそんな問いだ。

この場においては、彼女に対するあらゆる感情が露わになる。

そしてそれを掲げ、互いに譲れぬからこそぶつかり合う。

そんな感動的な光景をこそ、あの男は望んでいるのだ。

「……なによ、それ」

馬鹿げている。それでもし、最悪の結果になった場合どうするつもりなのだ。

例えば、例えば、例えば――

「――駄目」

そんなものは嫌だ。そんな残酷な結果だけは、あの子に待っていてはいけないんだ。

だってそうだろう。そんなものは間違っている。

客観的に考えれば、悪いのはあの子だとしても。

あの子が背負っていたモノが、想像を絶する重さだったとしても。

じゃああの子が全部悪いなんて、押し付けることが正しいというのか？

そんな重荷を、責任を、たった一人の子に全て被せて、攻撃する。

「――そんなの、駄目に決まっているでしょうがぁっ！」

そんなことが、正しいわけがないだろう！

人を思いやり、慈しむこと。

人道に従い、そして正道を進むこと。

人とは、そうあるべきではないか。貫き通さなければならない仁義が、あるはずではないか。

ならば、私の正道とは――

「私は、あんたの味方よ、みほ――！」

気付けば、そう叫んでいた。泣きそうな声で、いや、実際に私は泣いていた。

だってこんな一大決心、今までしたこともなかったから。

だけど、だからこそ私は叫ぶのだ。同じチームのみんなが驚いた様子でこちらを見ている。

ああ、あんたたちもそうなんでしょう？口には出さなくても、心の中では迷ってたんでしょう？

私たちはみほと仲が良かったもんね。

「だから――」

その気持ちだけは、裏切っちゃいけないと思うんだ。

この場にいる他の十九両全員に通信を繋ぐ。私の思いを、覚悟を、見せつけてやるんだ。

「私、そっちに行くから！それまでやられるんじゃないわよ！」

高らかにそう宣言する。言葉通り、それは真っ向からの反逆の宣言。例え全てが台無しになったとしても、私は友達のそばにいると、そう決めたのだ。

「……いやあ、格好良かったよエリカちゃん！」

チームのみんながそう言ってくれた。私の行動は客観的に見れば非難されてしかるべきものだというのにだ。

「うん。あたしも決めた。みんなでみほちゃんを助けよう！」

「そーだね。ウチらの友情パワー見せてやりましょ！」

ああ、そうだ。呆れるくらい簡単なことじゃないか。

勝手に問題を複雑化して、勝手にそれに囚われて。

なんたる無様。なんたる醜態。

けれど、だからこそ。迷って、悩んで、その果てに選んだこの決断に嘘はない。

「これより私たちは白組に与する。自分たちの気持ちを裏切らないために。あの子の友達として、精一杯務めを果たすために！」

言葉と並行して、みほにメールで連絡する。ともかく、互いの位置を確認しないこと

には戦えない。

「不安はある。恐怖もある。でも、それが一体なによ！あの子が味わったものに比べれば、そんなものは芥でしかない！」

――メールの返事が来た。簡潔に自分の車両の位置を記したそれ。その最期の一文に、私は刹那、忘我した。

だがそれも一瞬。今は己が為すべきことを為す。

操縦手の子に簡潔に合流地点を伝えると、その子は了承の返事のあと、じっと私を見つめてきた。

他のみんなも、己の仕事をやりながら、それでも私を見つめている。

なるほど、確かに。確かにそれが私の仕事だったわね。

「さあ、行くわよ！戦車前進（パンツァー・フォー）ッ！」

待っていなさい、みほ。

今、行くから。

Ｓｕｂ　Ｒｅ：

Ｆｒｏｍ　みほ

本文　――私たちはここにいます。ありがとう。

両チーム車両
紅組：十八両
白組：二両。

「――エリカさん」
逸見エリカの喝破は、この場の全車両に伝えられていた。
チームを裏切るという宣言。それをわざわざ全車両に伝えた行為。
何のことは無い。逸見エリカは、己の真（マコト）をさらけ出したのだ。どんな苦境でも、友達を見捨てない。
ずっとずっと、支えていくんだと。
「――」
思い返す。
あの時。私たちが川に転落した時を。
「ねえ、小梅ちゃん」
操縦手の平野さんが、声をかけてきた。
「あの時……今でも忘れない。怖かったよね」

「……うん」

平野さんも、あの時私と一緒に川へ落ちた。この車両（III号）に乗っているのは、全員あの時と変わらないメンバーだ。

「冷たくて、どこにも逃げられなくて。私、このまま死んじゃうのかなって思った。思って、泣いてたよね」

水圧で開かない扉。急速に浸水していく車内。絶望と恐怖に、私たちの誰もが震えていた。

「……そんな時、副隊長は来てくれた」

そんな時、扉が開いた。

手を、伸ばしてくれた。

「嬉しかった。嬉しかった。助けに来てくれた、って」

そうだ。あの時私たちは、紛れもなく副隊長に救われたのだ。

「――だから、お礼を言おうと」

そう、思っていたのに。

見てしまった。責められ、嘲笑われ、軽蔑される副隊長の姿を。

違う、違う。副隊長は悪いことなんてしていない、間違ったことなんてしていない――！

――そうはっきりと言えたならば、少しは状況も変わっていたのだろうか。
「ありがとうございます、って。それすら言えなかった」
怖かったから。私たちまでもがあんな残酷な仕打ちを受けるんじゃないかって。
「馬鹿だよね、私たち」
自分のことしか考えていない。何と傲慢で狭量で小さな人間だろうか。
こんな簡単なことすら、伝える勇気もない。
「だけど、それじゃ駄目なんだ」
だから、私も。
自分の心に嘘はつかない。ありがとうエリカさん。ありがとうみほさん。私も、やっと、前に進む勇気が出たよ。
「――」
だから、これが一世一代の大仕事。
さあ、気合をいれろ赤星小梅。
「あ――」
ふと、手に暖かい感触があった。目をやれば、平野さんが……ううん、ＩＩＩ号のメンバー全員が、私の手に自分の手を重ねている。
「頑張って」

「勇気を出して」
「私たちも一緒だよ」
　そんな、優しい言葉をかけてくれて。
「――みなさん」
　もう何も怖くない。だって私には、こんなにも素敵な友達がいるのだから。
　だから、私は言葉を紡ぐのだ。
　おそらくは、私たち（黒森峰）の根幹に関わる言葉を。
「勝つこととは、そんなにも重要なことなのですか」
「誰かの人生を、思いを、覚悟を勇気を決断を。邪魔だからと、間違っているからと、切り捨てて前に進むのがそんなにも大切ですか」
「ならば私は――そんなものはいりません」
　気を抜けば、声が震えそうになる。
　本当は怖くて、怖くて、逃げ出したいけれど。
「私は怖がりで、臆病者だけど」
　自分一人では何も出来ない、弱い人間でしかないけれど。
「みなさんのような、卑怯者では断じてありませんっ!!」
　仲間を見捨て、切り捨て、挙句の果てに延々と責め続けるような。そんな人間では決

してない！

「自分のことは棚上げで、全部全部一人に背負わせて。それでその子が潰れたら喜々として苛め抜く。なんですかそれ、最低じゃないですか！あなたたちには、自分というものがどこにもない！」

「私は違う！私は、自分の心に嘘はつかない！あの時私は、副隊長に救われたんです！私はそれが嬉しいし、だからこそ今こうやって話せることに感謝しているんです！」

死んでしまうかもしれなかった。挙句、自分の死を〝仕方がなかった〟〝残念だ〟などという言葉で飾られ、勝利のための生贄とされるかもしれなかった。

そんな闇の中から私を引っ張り上げてくれたのは、紛れもなく副隊長なのだ。

「だからこそ、今度は私が副隊長を助けたい！だって私たちは、友達だからッッ!!」

知らず、私は泣いていた。ありがとう、ありがとう。私が頑張れるのは、大切な友達がいるからです。

本当にありがとう。

「これより私たちも、白組に……ううん、西住みほさんに味方します！」

『貴様ぁっ！』

激昂した先輩の車両のうち1台が、こちらに砲塔を向ける。だが、恐怖などない。

「自分は裏切ったのに、いざ自分が裏切られるとその様ですか」

なんて醜い。こうはなりたくないものだと、そう思った。
「小物ですね。度量がしれますよ先輩！」
『黙れぇ!!』
放たれた砲弾を、しかし私たちは土壇場で回避する。平野さん、ありがとう。
「だから、どうかお願いします！私と一緒に、みほさんを助けてください！」
瞬間、轟音とともに先ほど砲撃してきた先輩の車両が撃破される。
「……」
この場にいたのは私たちを含めて六両。そのうちの四両が、一斉に先輩の車両に向けて砲撃を行ったのだ。
「……一年にここまで言わせたんだ。私ら二年が黙っているわけにはいかんだろ？」
「正直、三年のアレには大分ムカついてたしね。って、まあ後から言い出すとかかなりダサいけどさ」
入ってくる通信は、どれもこれも優しいものだ。この場にいない三両からの通信もあった。
みんな、私について来てくれる。
ねえ、みほさん。
みんなみんな、私たちを助けてくれるよ。

こんなにも、味方がいるよ。
「だから、一緒に戦おう赤星。後輩を守るのが先輩の役目ってもんよ！」
「そうそう。だから、ドーンと構えなさい！恰好よかったわよ？」
近づいてきた先輩方の言葉に、今度こそ涙が止まらなかった。
「小梅ちゃん！みほさんから連絡だよ！」
通信手の桜井さんから、合流地点の連絡を受ける。
「了解！それじゃ皆さん、行きましょう！戦車前進（パンツァー・フォー）！」
「「「「戦車前進（パンツァー・フォー）!!」」」」

両チーム戦車数
紅組：九両（一両走行不能）
白組：十両。

「く――」
その様子を、無論甘粕正彦は目にしていた、耳にしていた。
用意された椅子など、とうの昔に用済みとなっている。まるで少年のように目を輝か

せ、立ち上がり、熱狂していたのだ。
ああ、なんと素晴らしい友情か！なんと素晴らしい勇気か！
「はは、はははははは――」
直接見えずとも分かる。彼女たちはみな、己の進むべき道を定めたのだ。あらゆる恐怖を、苦悩を経験したうえで、その果てに為された決断。
それが、眩しくて眩しくて仕方がない。
「はははははははは、はははははははははははははははははは――――――!!」
止まぬ豪笑は、甘粕正彦による人間賛歌。
「嗚呼、紛れもなく、今おまえたちは輝いている！なんと美しい勇気（ヒカリ）であろうかッ！」
「その輝きを、勇気を、そして光輝く人間（おまえたち）を！甘粕正彦は愛しているのだァッッ!!」
試練を乗り越えた人間を、魔王は決して侮蔑などしない。そんな輩は三流もいいところだろう。
ゆえに甘粕正彦は笑うのだ。
これこそ人間。これこそが勇気。これこそが覚悟。
であるならば――
「さあ、あとはおまえだな」
答えは既に聞いている。あれは紛れもなく夢ではあるが、だからといって夢と現（うつつ）で主

体が変わるなどありはしない。

「西住まほ。胡蝶の夢を見る少女よ。おまえの勇気(ヒカリ)を、どうか俺に見せてくれ」

全ては魔王の試練なり。

問われるは正道、王道、人が歩むべき理想の道程。

「くく、くふふふ、ふはははははははははははははははは――――!」

さあ、見せてくれ。俺はそれに見惚れたい、魅せられたいのだ。

第４話　「比翼」

決断には責任が付きまとう。

それは例えばその日の夕食の内容を決める際だろうが、例えば世界の命運をかけた決戦だろうが、同じことである。

もっとも、実際に世界が滅ぶか否か、などという戦いなどというものはまず起こりえないが、それでも人生とは選択と決断の連続だ。

進学、部活動、履修するコース、就職に趣味にと。あらゆる場面で人間は己の意志で、己の道を選び、進まなければならないのだ。

それは例えるなら航海に近い。行く先は見えず、不安と恐怖に怯えながら、それでもそこに留まることだけは許されない。

人は皆、己自身の手で船を漕ぎ、人生という大きな海を進んでいるのだ。

その選択。もう二度と取り返しがつかない、決断の時。いわゆる岐路というものが、人生には存在する。

ならば、今、今日のこの時こそが、私の人生の岐路なんだろう。

ありがとう、みんな。

私には、こんなにも素敵な友達がちゃんといる。
人生(海)の航海、その羅針盤となってくれるみんながいる。一緒に船を漕いでくれるみんながいる。
私の選択が、正しかったかどうかは分からない。
絶対的な正しさが、正義が分かりやすいほど鮮明なら、人生はこんなに苦しいものにはならないだろう。
だけど、実際はそうじゃない。立場や周囲の環境によって、正しさなんてものはいくらでも変化する。
「本当に大切なことは、自分の決断(ココロ)に嘘をつかないこと」
エリカさんが見せつけたように。赤星さんが見せつけたように。
あの時の二人は、今まで見たことがないくらい必死で、そして何よりも――
「格好良かったなあ……」
眩しかった。憧れた。目を奪われた。
二人の信(シンリ)、二人の信(ネガイ)、二人の信(チカイ)、そして何より、自分の心を信じる二人の姿が。
暗澹たる航海を照らす、灯台の光に思えたのだ。
「――だから、どうかお願い」
地響きとともに現れるは、闇を照らす九つの光(友達)。

眩しいなあ、本当に。目が眩みそうだよ。
だけど、その輝きが誇らしい。私（西住みほ）には、こんなにも素敵な、最高の友達がいるのだから。
だから、私も。
自分の心に嘘をついちゃいけないよね。
ずっとずっと、言えなかった私の本音を。今こそ言わなくちゃならないよね。
「――」
戦車から降り、深く息を吐く。怖い。私は今、紛れもなく人生の岐路に立っているのだ。
二人が、こっちに近づいてきた。その顔は笑っていて、とても綺麗だと思った。
「みほ」
そっと、優しい言葉。両の手に感じる、確かなぬくもり。
「みほさん。大丈夫です。私たちがついてますから」
その瞬間、堪えていたものが零れだした。
嬉しくて、嬉しくて、嬉しいのに涙が止まらない。
見ないでよエリカさん、赤星さん。きっと今、私、すごい変な顔してると思うから。
「私たちは、貴女を見てるから」

「どんな時も、この手は絶対に離しませんから」
溢れる涙が止まらない。二人のぬくもりが、何よりも尊く、嬉しく感じた。
ねえ、私たちは友達だよね？だったら――
「お願い――」
私に、少しでいいから、勇気をください。ずっとずっと、心の奥底に閉じ込めていた、本音を言うために。
そして。
涙を零しながら、少女は叫ぶ。当たり前で、だけどだからこそ誰もが言いよどむその言葉を。
「――助けてッ」
その、言葉に。
「「勿論ッ!!」」
力強く、そして優しい答え。
進路（ミチ）を見つけた少女たちは抱擁を交わす。
その光景を見ながら、赤星と一緒にやってきた二年生の遠山は、深く息を吐いた。
「――いいなあ」
「ええ、本当に」

声に応えたのは、同じくその様子を見ていた平野だった。
「結局、さ。全部赤星の言う通りだった。勝たなければ、勝たなければって、勝手にいろんなもの背負って……いや、違うな。全部みほ（アイツ）に押し付けてた。アイツは私たちとは違うから、って、勝手に期待して」
「――実際は、みほさんも私たちと同じ人間なのに。先輩だけじゃありません。私たちみんなが、みほさんに重荷を背負わせてたんです」
黒森峰の正義とは、勝利すること。
そんな正しさ（ヒカリ）に、誰も彼もが盲いていた。それ（勝利）に焦がれ、何もかもを切り捨てようとしてしまった。
「だって、その方が楽だから」
「――自分では何も考えなくてもいい。ただ駒として、指示に従っていれば勝てたもんなあ。んで、結果得られる栄誉。全く、情けなさ過ぎて泣けてくる。人間（あたしら）は驚くほど簡単に易きに流れちまう生き物だよ」
気分が乗らない、勇気が出ない、今は駄目だ、明日やろう。
本当に進むべき理想とは、そう簡単には選べないからこそ理想なのだ。
「正しいことは痛いから。だからここまで大事になっちまった」
本当に辛いとき、苦しいとき、仲間に助けを求めること。そんな当たり前のことすら、

一人の少女から奪い去った。本来正しかったはずの道が、黒森峰では邪道とされていた。

たったそれだけのこと。立場や環境によって変化する正誤の概念に、皆囚われていた。

「本当に大切なものは、すぐそばにあったというのに」

前ばかり見て、隣や後ろで泣いている人の姿さえ見失って。

「なあ、そうだろう？隊長」

全く、なあおいまほ。あたしらはなんて馬鹿なんだろうな。

見ろよあいつらを。あんな当たり前のことすらあたしらは出来なかったんだぞ？やろうとすら思わなかったんだぞ？

なあ、だからさ――。

「好きにしろよ。それできっと、うまくいくさ」

新たにやってきた一両の戦車。そこから降りてくる西住まほの姿を見ながら、遠山はそう呟いていた。

――戦いが始まるやいなや、みほたち白組の、みほ以外の九両が、一斉に掲げていた白旗を下ろし、紅い旗を挙げた。
通信で聞こえてくる、下卑た罵声と嘲笑。それら全てが、みほに向けられていた。
やめろ。
やめろ。
そんなものは聞きたくない！
「たいちょー。指示をお願いしまーす」
「あの裏切り者をボッコボコにしてやりましょうよ」
ふざけるな。なんだお前たちは。本当に理解できない。なぜこうも恥知らずでいられるのだ？
森の中へと後退するみほの車両を見ながら、私は茫然としていた。
どうすればいい。どうすればいい。私は、どっちの道を進めばいい!?
視界は万華鏡のように点滅し回転し、なにをしたらいいかわからない。
――押しつぶせ。チーム全体のことを考えれば、ここは奴（みほ）を倒さなければならん。
それは、きっと正しいのだろうけど。
――何を迷う必要がある。奴は掟を破ったのだ。

そんな道を、私は進まなければならないのか？
勝利とは、そんなにも重く尊いものなのか？
思考はぐちゃぐちゃで、何もわからない。
暗い海の底にいるような、そんな心地だった。
『――私、そっちに行くから！』
「……」
永遠にも思えた闇の中、そんな声が聞こえた。
『勝つこととは、そんなにも重要なことなのですか』
また、別の声。
それが、私の手を引いてくれたような、そんな気がして。
『――みなさんのような、卑怯者では断じてありませんっ！』
――その言葉に、ついに私の意識は浮上した。
卑怯者？私が？馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な。
違う、と。
そう、言えなかった。
――おまえはどうしたいのだ？（西住まほ）
「……」

それは、かつて夢の中で投げかけられた問い。
その答えを、私はとっくに出していて――
「ふ、ふふ」
分かりやすいくらいに道は見えていたことに、やっと気が付いて。
「ふふふふ、ふふふふふふふ――」
――ならばよし。努、その思いを忘れるな。
為すべきことも、これ以上ないくらい瞭然で。
「ふ、はは、はははははははははは――！あははは、はははははははは、あはははははははははは――――！」
自分の救いようのない馬鹿さ加減に、思わず私は笑っていた。
笑って、笑って、そして溢れる涙が止まらない。
全く、今の私はきっとすごく変な顔になっているのだろうな。
なあおい、私を見てくれよ。私はこんな人間なんだぞ？
こんな馬鹿女なんだぞ？
そんな奴が、何を偉そうに一人前ぶっている。
――チームの立て直しと来年度の体制への移行が優先？
――隊長として、チームに軋轢を生じさせかねない選択肢はとれない？

「――っ！」

気付けば、自らの顔を殴っていた。額から流れる血液も、脳に送り込まれる痛みも、どうでもいい。

それよりも、自分が何より憎らしい。

「――駄目ですよ隊長。せっかく綺麗な顔なんですから」

「……あ。坂井先輩、か？」

「はい。あなたの車両の通信手、坂井一美（さかいかずみ）ですよ」

ぺたり、と私の額に絆創膏を貼った坂井は、しかしそのまま私の隣から動こうとしない。

「――私は、先の大会が最後の舞台でした」

肩が震える。そうだ、坂井先輩は、三年生はあれが最後の大会だった。だからこそ、優勝を逃してしまったことに、私は――

「楽しかったです」

「……え？」

「こんなにも強くて格好いい仲間たちと一緒に戦えた。最後はちょっと悔しかったけど、それでも私は、心から楽しかったっと、そう言えます」

「しかし、最後の大会！私のミスで、先輩の最後の舞台を台無しに――」

その瞬間、物理的に私の口は止められた。
先輩の指が、私の口を止めていた。
「全部背負い込むの、悪い癖ですよ？あれはあなただけのミスじゃない。みんなのミスで……もっと言えば、単に運がなかっただけなんですよ」
「そりゃあ、優勝できなかったことは悔しいです。でも何よりも、みほさんに対する仕打ちを止められなかったことが、一番悔しい。……自分が恥ずかしいですよ。変に体裁を取り繕って、怖いから関わろうとしなかった」
「隊長はご存知でしたよね。私が、戦車道を引退すること」
「……はい」
坂井先輩は、あの大会を最後に戦車には乗るつもりがなかった。卒業後は家業を継ぐのだと、そう言っていたのを思い出す。
「戦車に乗れば、自分の矮小さを思い知らされる。……そんな気がして、戦車に乗る気にはなれなかったんです。後輩一人助けられない私が、何を偉そうに、って。だから今回、隊長がこの試合の話を持ってきたときも、断ろうと思ったんですよ」
「でも、出来なかった。だって、私なんかよりよっぽど辛そうな子が目の前にいたんですもの」
「その子はすごく真面目で、そしてすごく優しい人。そんな子がこんなにも苦しんでる。

ならせめて、少しでも助けてあげなきゃ、って。……結局、全部一年のあの子たちにもっていかれてしまいましたが」

こちらを見つめる先輩の目はどこまでも真剣で、それでいて暖かい。

ああきっと、この人も――

「あの子たちの言葉に、やっと私も目が覚めました。この試合が終わった後、私は少し動こうと思います。後輩を守れなかった情けない先輩ですけれど、それでも、今からでもまだ間に合うと信じていますから」

「だから隊長。あなたも、自分の道を見つけたんでしょう？いいえ、それは最初から貴女の心にあったはず。人は大きくなるにつれて、素直な心を心の奥底にしまいこんでしまう生き物ですから」

道を見つけた。いや、ようやっと戻ってこれたのだ。

「だから――」

ああ、そうだ。答えなどとっくの昔から知っていた。

ふと想起する、あの奇妙な夢での会話。夢というにはあまりにも現実感があって、会話の一つ一つを覚えている。

私は泣いていた。今と同じように。その時、彼がかけてくれた言葉は、確か。

「――貴女の信じる道を往きなさい（このしんじるみちをいきなさい）」

そう、まさにそんな言葉で。
「その答えは、もう知っているはずでしょう？」
その時、私は何と答えた？
夢の中だとしても、あれは紛れもない己の本心だった。それを忘れるなど、ありえない！
「私は――」
涙を拭い、真っ直ぐ、坂井さんの目を見つめ返しながら。
「私は、みほと一緒にいたい！これからもずっとずっと、みほと一緒に戦車道をやりたいんだ！」
その、言葉に。
「はい。よく言えました」
坂井先輩は微笑んで。
「じゃあ、本当にそれを伝えなくちゃならない人がいるでしょう？」
私も、ようやっと、心からの、精一杯の笑顔で。
「はい！それでは皆さん、お願いします！」
返ってくる返事は、どれもこれもあたたかい。
この車両のメンバーは、私以外みんな坂井先輩と同じ三年生だ。

きっとみんな、坂井さんと同じように悩んでいたんだ。恐れ、苦悩し、足を止めてしまった。

ならば。そう、ならば――。

「迷いはありません。私たちもこれより、みほの味方です！」

迷いがなくなった今、私たちはきっと、どこへだって行くことができるに違いないから。

「行きましょう」

坂井先輩が操縦手の岩本先輩に、目標地点を伝えている。

どうやら私が吹っ切れたその時から、即座にみほに連絡をとっていたようだ。

ありがとうございます、先輩。暗闇に足がすくんでいた私の背中を押してくれて。

だから、私は、おそらく人生で一番の元気な声で叫んでいた。

「では、戦車前進（パンツァー・フォー）ッッッ!!」

――――そうして。

「みほ……」

「お姉ちゃん……」

ついに、そして久しぶりに顔を合わせた姉と妹。

己の道を見つけ、そして進むと決めた二人。
「私は、おまえの味方だ」
「うん……」
見えない鎖に囚われ、身動きも出来なかったかつてとは、もう違う。
「一緒に戦おう、みほ。私たちが揃えば、怖いものなどありはしない」
「うん、うん……！」
ここに生まれるは比翼の絆。互いを知り尽くし、そして語り合い、ついに完成した不朽の絆（ヒカリ）。
「大好きだ、みほ。私はお前を、愛しているよ」
「……っ！おね、え、ちゃんっ……！」
どちらが欠けても、天高く飛ぶことはできない。
二人ならば、どこへだって飛んでいける。
思いは一つ。後悔などなく、二人はずっと胸を張って生きていける。
人生とは選択の連続だ。
迷うこともあるだろう。道を誤ることもあるだろう。
だが、その程度で人生は破滅など決してしない。
なぜなら、人には助け合える仲間がいるのだから。

第5話「想いの勝利」

「――嬉しい」

こんなにも楽しく戦車に乗ることが出来たのは、何時以来だろう。

心から信じあえる仲間がいて。

心のまま助け合える仲間がいて。

大好きなお姉ちゃんも一緒で。

胸を張って、戦える。

西住みほは優しい少女だ。例えそれがどれだけ正しい道であっても、どれだけ楽な道であっても。

それが大切な誰かの痛みを伴うものならば、彼女はその道を選ばない。

迷う友達がいるならば、一緒に迷おう。

泣いている友達がいるならば、ともに泣こう。

そしてその手を握ってあげよう。

辛いとき、苦しいとき、悲しいときに。

友達として、そっと優しく寄り添って、そして一緒にそれを乗り越える。そんな人間

になりたいと。
彼女は願い、そしてその道を選んだのだ。
そう、その選択を。その勇気を。
「私は尊敬するよ、みほ」
西住まほは何より眩しいと、そう感じるのだ。
『ふぇ!?お、お姉ちゃん!?』
ふと発せられた自分の言葉に、無線の向こうで妹が慌てているのが手に取るように分かる。
みほはもともと優しい子だ。
だからこそあまり強く出れないところもあって、そしてそのくせ悪いことは誰にも相談せずに抱え込んでいってしまう。
自身への称賛は周囲に譲り、周囲への中傷は自分が引き受ける。
それはなるほど、確かに立派な心掛けで、あの子らしいとは思うものの――
「聞こえなかったか?ならばもう一度、何度でも言ってやろう」
「私はおまえを、心の底から尊敬する。嘘じゃない。おまえの優しさに、おまえの勇気に。私は憧れているんだよ」
――それでも、自分をもう少し誇りに思ってほしいと、姉としては思うところがある

のだ。
「おまえがいなければ、私は多分ここにいない」
『――え？』
「悪い意味じゃない。私は今、おまえと共にあることを、誇りに思っている」
妹（みほ）に恥じない、格好いい姉であろうと頑張った幼少期も。
妹（みほ）を守ろうと、躍起になっていたこれまでの黒森峰でも。
そして、真に妹（みほ）と一緒に戦うと決めた、今この時も。
私の視線の先には、いつだってみほがいた。
「感謝しているよ、みほ」
規律を破ってでも、大切な仲間を助けた。
自分の心に、嘘をつかなかった。
何時だって、みほは私にできないことをやってのける。それが羨ましくて、眩しくて、そして何より誇らしいのだ。
『――私だって、そうだよ』
『お姉ちゃんは強くて、格好良くて、そして優しくて。私、いつだってお姉ちゃんみたいになりたいって、そう思ってたんだ』
――だから、返ってきたみほの言葉に、私は言葉を失っていた。

「……そう、か」

こんな情けない私のことを、おまえはそんなにも褒めてくれるのか。

嬉しいな、本当に。

さっき泣いたばかりなのに、また泣けてきたじゃないか。

「……私なんかで、本当にいいのか？」

『もう……。お姉ちゃん、それ悪い癖だよ？』

「え？」

『自分のことはいつも後回しで、いつも謙遜ばっかりで。そのくせ悪いことは全部一人で抱え込んじゃう。私が悪い、みんなは悪くない。それじゃ、いつか壊れちゃうよ』

待て、待ってくれ。それはみほ、おまえのことじゃないか。

そんなおまえだからこそ、私はおまえを守ろうと――

『似てるよね、私たち。私だって、お姉ちゃんと同じだもの』

『全部全部、私が頑張らないとって、勝手に背負い込んでた。私が守るんだって、意地張っていたんだよ』

「――」

ああ、そうか。

また、おまえは私の先にいたんだな。

馬鹿で意地っ張りな私と違って、優しいおまえだから気付けたんだな。

『でも、それじゃダメなんだ。だって、人には限界があるから』

全てを背負って、たった一人でどこまでも進んでいく。そんなことが出来る人間はまず有り得ない。

少なくとも、私にそんなことは出来ないのだ。

「だから――助け合って生きていく。当たり前のことだったな」

そう。それは本当に当たり前で簡単で、しかしそれゆえに誰もが言いよどむ言葉。

辛いとき、苦しいとき、悲しいときに。

友達を、家族を頼るという、当たり前の選択。

「なあ、みほ――」

自分がこんな言葉を吐くのは、何時以来だろうか。

「私は、おまえを助けるから」

自分を縛って、縛って、いつの間にか自分さえ見失って。

そして挙句、妹やその友達に、自分の間抜けさを気づかされた。格好悪いと、本当にそう思うよ。

でも、やっと帰ってこれたんだ。

「だから、おまえが私を助けてくれ」

一緒に往けると、もう一度信じることが出来たんだ。それが嬉しくて仕方がないんだよ。

今ここに、少女を縛っていた鎖は砕け散った。

ここに、ついに比翼は完成する。

ならば、恐れるものなどありはしない。

『うん！じゃあお姉ちゃん、提案なんだけど――』

見せつけてやろう。そして高らかに宣言しよう。

これが私たちの見つけた、私たちの戦車道だ。

「なによ……なんなのよこれは!?」

ふざけるな。一体なぜ私がこんな目に遭わなければならない？

西住まほの造反により、紅組は完全に指揮系統を喪失していた。今無様にも喚いているこの三年生が半ば強制的に戦術指揮を任されてはいるものの、そんな程度の覚悟と責任で、彼女たちの進撃を上回ることなど出来はしない。

『ちょっと、私たちはどうしたらいいのよ!?――あああっ!?』

基本の戦法は、従来通りの制圧前進。黒森峰最大の切り札であるＶＩＩ（マウス）号戦車すら

白組に寝返っている時点で、戦いは既に掃討戦に入っているといってもよいだろう。
保有する車両の台数も、総火力も、そして結束力も、全てにおいて白組が勝っている。
それでも、伊達に三年間戦車道に身を投じていたわけではなく、練度のみはなんとか拮抗してはいるものの、それがなんだというのか。
戦車道において同程度の実力を持つ者同士が戦う場合、当たり前ではあるが勝敗を左右するのは装備の質と指揮官の実力、そして何よりその戦いに懸ける想いの強さである。
精神論じみてはくるが、それは人生のあらゆる局面で言えることだ。
例えば、スポーツの試合で〝負けてもいい〟と考えてプレーをする選手と、〝勝つために全力を出す〟と考えてプレーする選手。どちらがプレーに集中し、またどちらがより大きな成果を出せるか。
余程捻くれた考えや逆張りをしない限り、後者の方が良い結果が待っているだろうと答えるだろう。
ならばこの場において。
西住まほと西住みほの二人が最強となるのは自明の理だろう。
想いが違う。絆が違う。
圧倒的な火力に裏打ちされて、みほが遊撃の立場となり自由に動き回る。

相手の戦術を、配置を、行動を、まほが驚異的な精度で予測し、対応し、あるいは潰す。

そしてなにより、二人は互いのことを知り尽くしている。

みほは姉の指示の意図を最低限の言葉ですべて把握し、そして姉を最も効率的にサポートする。

まほはそんな妹の行動さえも全て理解し、敵味方全ての行動を完全に把握し支配する。

無論、彼女たち姉妹だけではない。逸見エリカが、赤星小梅が、白組の仲間たち一人一人が、己の果たすべき役目を理解している。

結果生じるのは、全員が十全の実力を発揮できる戦いだった。

邪道？異端？馬鹿なことを。

これこそが勝利への最短経路。

制圧前進、臨機応変。かつて盲いていた西住流（ヒカリ）の先に見つけた、比翼の西住流。

チーム全員の実力と個性を最大効率で発揮させることこそが最優先。

今回こそかつての黒森峰が得意としていた戦法とほぼ同じ、火力にものを言わせた短期決戦という戦法をとってはいるが、その意味に大きな差があるのは言うまでもないだろう。

「それが、最良の選択だと信じているから」

巧みに指示を飛ばしながら、まほはふと呟いていた。

かつて家訓に、流派のしきたりに従っていたころとは、同じ行動でもそれにつながる過程が違う。戦いにかける想いが違う。

自ら選んだ道を進むことが出来る。それが私は、たまらなく嬉しいのだ。

――そして、当たり前に強いということは、訪れる結果も当たり前のものということだ。

『――紅組、全車行動不能。よって、白組の勝利！』

審判を務めていた甘粕の声が響き渡る。

心からの称賛と歓喜に満ちたそれは、魔王が送る勇者への賛辞だった。

西住まほの寝返りから、僅か二十分。白組の被害はゼロ。

誰にも文句など言わせない。そう言わんばかりの完全勝利だった。

試合を終えた格納庫。そこでは勝者であるみほたち白組が、歓喜とともに輪を作って

いた。
輪の中心にいるのは、言わずもがな西住みほだ。
この場の誰よりも早く、己が勇気を示した誉れ高き勇者。
彼女を始めとして、それぞれが見せた勇気に。その輝きに。格納庫を訪れていた甘粕は見惚れていた。
素晴らしい。なんと眩しいのだろうか。
これこそ青春。これこそ友情。これこそ愛。
――ああ、永遠にこの輝きを見ていたい。もっと、もっと見てみたい。
ならばどうする？次は果たして、どのような試練が相応しいだろうか。
「……いや」
違う。そうではないだろう、甘粕正彦。
俺の試練で、あの輝きを壊す？先ほど見せたあの勇気を、ならばさらにそれを上回れと？
それはあまりに無粋というほかないだろう。
宿業を、あらゆる縛鎖を、彼女たちは乗り越えた。ならば齎されるべきは祝福であり、断じて裁きなどではないだろう。
「――なあおい、そうは思わんか、おまえたち」

ああ、そろそろ来ると思っていたよ。もとより俺がこの場に足を運んだのは、おまえたちに会っておきたかったからなのだからな。
「貴様……！」
顔を真っ赤にしながら、紅組のメンバー……西住みほが乗り越えるべき壁として魔王に利用された者たちが歩いてくる。
その数は二十はくだらない。
納得がいかない、馬鹿げている、おそらくはそんな理由だろうか。
「情けない。情けないぞおまえたち」
その様が、悲しくて悲しくて仕方がない。
周囲を囲まれ、浴びせられる罵詈雑言の数々に、しかし甘粕正彦は一切動じない。静かな、そして重い威圧とともに放たれた言葉が、周囲の三年生たちの口を止める。
「おまえたちが本当にその言葉を浴びせたい相手は、俺ではないだろう？彼女らが、西住みほが気に入らんのだろう？ならばなぜ、己の思いを彼女らにぶつけない？」
これまで散々、好きなように彼女を攻撃していたではないか。
その行動自体は決して褒められたものではなかろうと、気に食わないと心の底から思うならば、なぜその思いを直接ぶつけない？
「彼女に味方が現れたからか？なあおい、まさか殴り返される覚悟もなく殴っていたと

は言わんよなあ？」
　本当に気に食わないと、許せないと思っているならば、この程度の障害で足が止まるなど有り得ない。
「おまえたちの言葉には何の重みも熱も宿っておらん。なあ、それで一体何を為せるというのだ？」
　多数派の意見に安易に同調し、道から外れた者を徹底的に攻撃しながら、しかしその言葉には己というものが存在しない。
「自分は守られていると、そう思っていたか？何をしても、それが正義のもとに行われるならば許されると？――阿呆が」
　そんな脳に蛆の湧いた無知蒙昧の輩を、甘粕正彦は何より嫌悪する。
「見ていられんよ。ああ、人とはそんな堕落した存在ではないだろう」
　ああ、出来ることなら今すぐにでも俺自ら喝を入れてやりたいよ。
　だが、違う。それをするのは俺ではない。
「――あら、甘粕さん。それに他のみなさんも。これは一体どういう状況でしょうか？」
　ゆえに、輪を離れて声をかけてきた坂井一美の姿を目にした甘粕は、静かに笑みを浮かべた。
「なに、彼女らがおまえたちに話があるというのでな。ここまで案内したというわけだ

よ。おまえは彼女らの傍にいなくても構わんのか?」
その言葉はほとんどが出まかせだが、そこに含められた意味は明白だろう。
「ええ。私には、やらなければならないことがまだ残っていますから。……可愛い後輩のために動くのが、先輩というものでしょう?」
坂井はそれを理解した。なるほど荒療治だが、同時にもっとも手っ取り早いのも確かだろう。
「それで、みなさんは西住さんに会いに来たと。ええ構いませんとも。では、どうぞ中へお入りください」
つまりはこれが、彼女たちへ課される試練。
安易な逃避も、鞍替えも許されない。
逃げることなど許さない。
「その果てに、おまえたちの覚悟を見ることが出来ると信じているから」
有無を言わせぬ甘粕と坂井の言葉に、紅組の面々は格納庫の中へ、渦中の少女のもとへと導かれる。
「では、存分に尻を蹴り上げてやるがいい。俺はそれを見届けよう」
「いえ、私は信じています。既に答えは見えているのですから、きっとおのずからその道を選んでくれますよ」

「くはっ――」

返ってきた言葉に、甘粕は思わず面食らい、そして笑う。

なるほど、俺は不要（試練）と。つまりそう言いたいのだろう？

いいぞいいぞ、思う存分語り合うがいい。その果てに彼女らも、必ずや飛び立てると信じているのだ。

口を挟むつもりだったが、委細承知した。俺はただ、おまえたちの行く末を見届けよう。

甘粕正彦は魔王である。ゆえに、勇者の勇気に敬意を表す。

古今、魔王とはそういうものなのだから。

第6話「臨界」

坂井と甘粕に促され、格納庫の中に入った紅組の面々を目にして、案の定白組の面々はそれまでの和やかな雰囲気から一変し、剣呑とした表情で彼女たちを迎えた。

「これはこれは。どの面下げて来れたんですか先輩方」

逸見エリカが慇懃な様子で口を開いた。明らかな不快感と嘲笑を隠そうともせず、吹っ切れた様子で容赦ない言葉を浴びせかける。

無論、三年生たちもそうなると黙っていない。彼女らにしてみれば、愚かにも黒森峰の栄光に泥を塗り、挙句それを恥じることすら知らぬ蒙昧共らに何か言ってやらねば気が済まぬ、といったところだろうか。

矢継ぎ早に放たれる罵詈雑言、悪口悪態冷罵の数々。

それら全てに、逸見エリカが、赤星小梅が容赦ない返答を叩き付ける。

もとより三年生の言い分には信念がない。熱が、思いが込められていない。

所詮は自分より巨大で強大な〝正義〟という力からの借り物だ。加えて、もはや彼女らが身を寄せる正義と、今の黒森峰が目指すと決めた正義は別のものだ。

ゆえに、彼女たちの言葉はその全てが悉く二人によって論破されてゆく。

悪く言えばエリカたちの行動は開き直りともとれるだろう。確かに今までの基準から鑑みれば、彼女たちの行動は間違っていると言われても仕方がないものであることも確かなのだから。

だがそれは結局のところ、その基準が真の意味で正しい場合に限るのだ。

そしてこれも当然だが、絶対的な正しさなど存在しない。

あるとしてもそれは、例えば人を殺してはならないとか、そういった常識、道徳といった概念であって、そしてそれですら場合によっては覆ってしまう。

よって、当たり前のように三年生たちは追いつめられてゆく。

「わ、私の母はここのＯＧなのよ？その気になればあんたたちなんか……」

「ああそうですか。で、それが何か？」

「私たちはＯＧの言いなりじゃない。勿論、先達として尊敬していますし、日々の援助には感謝しておりますが、だからといって仲間を、友達を売り渡すような真似は絶対にしません」

「だいたい、あなたたち言ってることとやってることが滅茶苦茶じゃない。私たちの理念は王道でしょう？なのにやってることは脅迫、いじめ。卑怯だとは思わないの？自分の道すらまともに見えてないそんな様で私たちに意見しようなんて、百年早いのよ！顔を洗って出直して来なさいッ！」

それが、しばらく続いた。
三年生たちは、もはや言葉を失っていた。
「――では一つ、提案なのですが」
そこで初めて口を開いたのは坂井だった。この場に似つかわしくないほど暖かい口調ゆえ、誰もが彼女に注目した。
「我々戦車道履修者……いえ、あの決勝を戦った仲間たちで、校内及びＯＧへ対応し、みほさんを守るというのはどうでしょうか？」
ゆえに、彼女の口から放たれた言葉に、この場の誰もが呆気にとられた。
唯一、甘粕だけがじっとその様子を見つめていた。
そうして、しばらくの後。場は再びの混沌と化した。
エリカに小梅ら、白組に与した者らからは一様に反対の声。
紅組の面々からも、こちらは案の定の罵詈雑言。先ほど完膚なきまでに言いくるめられたにもかかわらず、再び放たれる心無い言葉の数々。
それを聞きながら、西住まほはしかし奇妙なことに冷静だった。
いや、冷淡、と言うべきだろうか。
端的に言って彼女はもはや、目の前で薄汚い謗言を吐き続けるそれらを、同じ人間だとは思えなかった。

思考を占めているのは真っ黒な嫌悪。ただその一念のみが延々と頭の中を駆け巡っている。

気持ちが悪い。気持ちが悪い。気持ちが悪い気持ちが悪い気持ちが悪い――！

おまえたち如きが、みほを馬鹿にするな。おまえたち如きが、何を真っ当な人間面しているのだ。

「――ふざけるな」

気付けば、自分でもぞっとするほど低い声が漏れていた。

その言葉には、三年生たちが並べ立てていたものとは比較にならない想いが込められていた。

「おまえたちは、恥ずかしくはないのか」

学年が上の相手だが、それがどうした。

こんな輩に払う敬意など、もはや持っていない。

「己の行いを、情けないとは思わんのか」

属する集団の正義にものを言わせ、全ての責任をたった一人の少女になすりつけて。

気に食わないならばいいだろうと、平然と指揮官を見捨て、裏切って。

挙句自分たちが同じことをされれば、顔を真っ赤にして悪態をつく。

それを指摘されれば、惨めな自己保身に走る。

「他人にはするが、自分たちがされるのは御免被る、か？冗談も大概にしろよ。道理が通らん。理解が出来ん。何故そうまで恥知らずでいられるのだ」

今まで自分たちがしていたことが、そっくりそのまま跳ね返ってきた。

いや、これでもまだみほが受けた苦痛に比べれば足らないだろう。

ともかく、これはそんな当たり前のことでしかないのだ。

殴れば殴り返されるかもしれない、相手を扱き下ろせば報復が待っているかもしれない。それは当たり前の因果応報であり、だからこそ人はその覚悟を持つべきではないのか。

「おまえたちを見ているとつくづく感じるよ。人間とは、斯くも容易く堕落する生物なのだと。……坂井先輩、こんな輩に何を言っても無駄かと。校内とＯＧへの対応は我々で行いましょう。なに、みほのためならなんでもやりますよ」

これまで悩み、苦しみ、自己嫌悪すらしたまほの心は、抑圧から解放された反動というべきか、今極端に妹への愛と、それゆえの憎悪に燃えていた。

これ以上の会話は無駄だ。

そう言わんばかりに背を向けたまほだったが、ふと視線を感じてその方向に顔を向ける。

「……っ!?」

そこにいたのは、魔王だった。
佇まいも、表情も、先と何も変わらない。そう、変わらないはずなのに。
なぜか彼が、甘粕正彦が途轍もなく恐ろしい。
そう感じた瞬間。
西住まほは、いや、その場にいる甘粕を除いた全員が、まるで糸が切れたかのように
その場に崩れ落ちていた。

「……ああ、柊四四八よ。おまえはこれを見ても、人を信じられるというのだな」
任せると、見届けると、そう信じたが。
「――これは駄目だ。確かにそれは理想であろうが、彼女らはそれ以前の問題だよ。
何故なら彼女らには目指すものが存在せん」
雄々しい背中を、進むべき正道を、人として貫かなければならない道理を。そんな
理想（ユメ）を見ようともしない人間は、確実に存在するのだ。

そんな人間が、己の力で立ち上がることが出来るだろうか。
勇気を、覚悟を、誇りを抱いて前へ進むことが出来るだろうか。
「否、否だ。なぜなら、完全に知らぬ道を進むことなど出来はせんのだから」
「であればどうする。知らぬならば仕方がないと、言っても無駄だと諦めて、道を誤り続ける彼女らを放置するか？否……否だろう。なぜならそれを〝見守る〟とは呼べんからだ」
柊四四八、我があこがれの男よ。おまえの言葉を、おまえの勇気を、俺は今も変わらず胸に刻んでいる。
素晴らしい輝きだった。そのヒカリに、俺は正しく憧れたのだよ。
だが、おまえの理想は憧れるべき勇気を見ないことには始まらん。そしてこの世界では、おまえが示した雄々しい背中は存在せんのだ。これではいくらなんでも、案内不足というほかないだろう。
そしてこの者らは、目の前で示された勇気（ヒカリ）からすら目を逸らし、知らぬ知らぬと喚くのだ。
それゆえに、その前提すら果たせぬというならば。
「目をこじ開け、髪を掴み、殴りつけ、尻を蹴り上げてでもそれを見せつけてやらねばならんだろう。そうして初めて、決断という選択の機会が生まれるのだ」

知らぬならば教えよう。聞く気がないのならば、いいだろう。
その身を以て存分に味わうがいい。
――そう。西住まほが妹を愛し、今その果てに絶望したように。
甘粕正彦もまた、人の輝きを愛し、そして今、その果てに絶望したのだ。
まして彼は、先ほどこの世界に来て以来、最も素晴らしいと思える勇気を目の当たりにし、またこれまでずっと、西住みほの周囲について悲嘆してきた。
何時か必ず、道を誤っている者らも己の力で飛び立てると信じ、己が辿り着いた主義（ネガイ）に蓋をして、ここまでずっと手を出さずに堪えていたのだ。
であれば先の言葉にも訂正が必要だろう。彼は最初から絶望していたのだ。
それでも、かつて己が魅せられた勇気（ヒカリ）を胸に刻み、己が唾棄すべき存在であると吐き捨てるような抜作どもを、それでも信じようと努めたのだ。
その抑圧が、一体どれほどのものか。――それが解放された時、何が起こるのか。
彼（蘆生）らの主義とは、信念とは、各々が筆舌に尽くしがたい経験の果てに辿り着き、定めた祈りの形だ。
よって、例え敗北しようと。相手の勇気（ヒカリ）に憧れようと。成長の兆しを見せようと。
彼（甘粕正彦）自身が魔王であることに変わりはないのだ。
そして今、その抑圧は限界を迎えた。ならば訪れる展開は、これ以上ないほど簡単に

想像できるだろう。

「さあ――」

甘粕正彦は、ここに再び魔王となる。

既に答えは出されている。そこから逃げることなど、この俺が許さん。

おまえたちはそれでよいのか？進むべき道は今しがた示されたばかりだというのに、つまらぬ意地や保身のためにそこから目を逸らし続けるのか？それが本当に、己にとって恥じることのない選択なのか？

否と叫ぶならば、ここに証を立てるがいい。

己が魂を輝かせ、殻を破るがいい。

その機会を与える光こそが我なのだ。

「おまえたちの輝きを示すがいい。果てに待つ決断のため、まずは前座を用意しよう」

逃がさんと、この場所に来る前にそう誓ったのを覚えている。

「例外はない。ああ、先は堪えたがなあ、やはり俺はこういう性分なのだよ。ゆえ、おまえたちにも付き合ってもらうぞ」

そう。甘粕正彦は人の輝きを愛している。

だから、それが見たくて見たくてたまらない。そう、彼は忘我しながらこう思ったのだ。

――このような素晴らしい輝きを、もっともっと見ていたい。慈しんで、尊び、そして愛していたい。

魔王は勇者の勇気に敬意を表する。それは事実だ。間違いなどありはしない。

しかし、忘れてはならない。古今魔王が表する敬意とは、即ち破壊であり、恐怖であり、絶望の具現である。

よってここに、試練が現実を浸食する。

あまりの暴挙。あまりの愚挙。しかし、甘粕正彦とはそういう男なのだ。

つい先ほど己に立てていた誓いなど、既に遥か遠い忘却の彼方へと追いやっている。

既に勇気を示した者たちすら巻き込んで、ここにこの日の第二幕が開幕した。

第7話「悪夢の始まり」

西住みほが目を覚ましたとき、世界は異形の様相を呈していた。

「え……？」

まず感じたのは、肌を打つ冷たい雨の感触。

少し離れたところからは、轟轟と流れる水の音。

時折雷鳴がとどろき、強い風が森の木々を揺らしている。

どうやら自分はいつものように戦車から体を出しているようだが、辺りを見渡してみても、まるで酩酊しているかのように、事態の認識が遅々として進まない。

先ほどまで自分たちは、確か格納庫にいたはずだ。

それが、目を覚ましてみれば、なぜか自分の車両であるⅥ号戦車（ティーガー）に乗っていて。

見覚えのある場所にいきなり移動していて。

尋常ではない何かが起きていることだけは理解できたが、具体的なことは何一つとして分からなかった。

「なに……これ……？」

ここが明らかに黒森峰の艦の上でないことだけはすぐに分かった。

そして、西住みほには……否、かつてそこにいた黒森峰の面々には、ここがどこなのか理解できていた。

理解はできているが、だからこそ理解できない。

「なんで……これ、決勝の……？」

そう。ここは忘れもしない、先の全国大会の決勝戦を戦った舞台。

はるか遠い陸にあるはずの場所だった。

一体、何が起きた？

抗えない強烈な眠気と共に意識を失い、目覚めてみればこの状況。

まるで、世界がまるごと創り替えられたみたいな、そんな不条理。

そう、これではまるで――

「ねえ、みほちゃん……」

同じく意識を取り戻した砲撃手の女子が、みほに震える声で尋ねていた。どうやらこの戦車には、あの時と、また先ほどの紅白戦と同じメンバーが乗っているようだ。

どうやら全員、無事なようだ。意識を取り戻した彼女らを見て、しかし全く安堵は出来ない。

だって、これは絶対におかしい。

こんな非現実的なこと、あるわけがない。

「これ、夢だよね？そうなんだよね？」
夢。そう、夢だ。自分はきっと、悪い夢を見ているのだと。
そう、思った刹那。
「――っ！全速後退！急いでっ!!」
反射、直感、悪寒、警鐘。
理屈ではない本能と勘が、みほを動かしていた。
叫びとともに操縦手の肩を蹴り、この場から離れさせる。普段ならば決してしないような荒っぽい指示だったが、それでも事の異常性を目の当たりにしていたからか、操縦手の女子は文句など言わず、すぐさまそれに従う。
幸いにもすぐに動かせる状態だったため、みほの指示通り即座に動くことが出来た。
そしてそれが、結果的に救いとなった。
「く、うぅ、っ!?」
轟音と爆発音とともに、先ほど自分たちがいた場所に何かが降ってきた。
着弾地点は濛々と昇る爆炎と土煙に包まれ、もはやその様子を窺い知ることは出来なかった。
しかも、それで終わりではない。
「また?」

二発目、三発目、四発目に五発目。彼方から響いてくる馬鹿げた音量の発射音。次が来る。

「急いで！森の中に！」

駄目だ、駄目だ、あれは駄目だ！

あれを喰らえばどうなるか分からない。いや、違う。

どうなるかなど馬鹿でも想像が出来る。

「一体、何が……」

弾着の衝撃が地を揺らす中、なおも続く発射音の方向を、まだ開けている場所にいるうちに少しでも確認しておく。異常事態ではあるが、いや、だからこそというべきだろうか。

西住みほは常日頃よりも更にその能力を十全に、十全以上に発揮していた。

それは直感であり、それは戦術的観察眼であり、そしてそれゆえに、彼女の行動は当たりを引く。

「な……っ」

そして、それを目にした瞬間、彼女はあまりの驚愕に今度こそ言葉を失った。

『――ほ、――――！――じか――――ろ！』

「っ、お姉ちゃん!?」

ノイズまじりの通信が、呆然としていたみほの意識を引き戻す。
「お姉ちゃん！大丈夫!?」
『みほ！よかった、お互い無事なようだな。安心した――などと言える状況ではないか』
無線越しに聞こえてくる姉の声に、ようやっと少し息をつくことができた。しかし、安堵ばかりしてはいられない。
「とにかく、一度合流しないと！お姉ちゃん、今どこにいるの?」
互いの現在位置を交換し、そうして自分たちが現在同じ森の中にいることに気付いた。
言うまでもないが、二人は地図など持っていない。だが、ここはあの日の決勝の舞台となった場所だ。緊急時の合流地点から要注意箇所、敵手の潜伏予想地点まで全て、彼女らは頭の中に叩き込んでいる。
その程度出来なければ、黒森峰のメンバーにはなれないのだ。
そう。だからこそ、逸見エリカも赤星小梅も、先ほどみほを糾弾していた三年生ですらも、この異常事態の中でそれでも動くことが出来た。
それはひとえに、西住まほの功績だろう。彼女は状況の異常性に気付くやいなや、混乱する部隊を落ち着かせるために指揮を執り続けていたのだ。
その気構えと胆力は、間違いなく賞賛に値するだろう。

結果的に、この混乱の中全二十両が合流を果たすという最高の結果を齎したのだから。

「――さて。まずは皆の無事を喜ぼう」

集まった面々を見渡しながら、まほは言葉を紡ぐ。その声こそ普段通り凛としているものの、肩は震え、視線は泳いでいる。

どれだけ気丈であろうと、どれほどの才を備えていようと、彼女とて一人の少女なのだ。

「だが、状況は依然不明のままだ。なぜ我々がここにいるのか、我々を攻撃してくる者らは何者なのか。我々が知り得ている情報は非常に少ない。そこで、各員がこれまで目にしたモノをこの場で余さず伝えてくれ。どんな些細なものでも構わん。今は少しでも情報が欲しい」

そうして始まる情報共有。もはやこの状況を夢だと笑うものなど存在しなかった。

齎される情報の数々を整理しながら、まほは徐々に状況を解き明かしてゆく。

「……その時、追ってきた車両は？」

「ＩＳ―２（スターリン）が一両、Ｔ―３４／８５が二両。煙幕を用いつつなんとか撒きましたが、それでも、軽微ではありますが損害を被りました。……そして、車両にはプラウダの校章が」

森へ逃げ込むまでの間、敵戦車の攻撃を受けたと話す車両の乗員がいた。しかもその

戦車は、かつてこの場所で戦った相手であるプラウダ高校のものであったという。
「私たちは最初エリアの端の端にいたんだけど、そこから外には行けなかった。信じられないかもしれないけど、見えない壁があるみたいに、このエリアからは出られないんだ」
決勝の舞台で試合エリアとして指定された範囲。そこからどうやっても外に行けないと話す者がいた。その人物は先ほどみほを裏切った三年生だったが、今はそんなことなど気にしていても仕方がない。
聞けば聞くほど、状況の異常さが露わになっていく。
「隊長……これは、一体なんなんですか……？」
赤星小梅が震える声で、泣きそうになりながらそう尋ねてきた。口には出さないが、それはこの場の全員が抱いている疑問であり、恐怖だった。
「……分からん。だが、一つだけ言えることは」
まほとてそれは同じだ。この場にいる者は全て平和な世界を生きる少女に過ぎない。冗談のような非現実的現実の中、恐怖に慄かないものなど存在しない。
「ここは既に、私たちの知る世界ではない。……これは決して、夢ではない。私たちが見ているのは、紛れもない現実だ」
何故って、これはあまりにも生々しすぎる。思考はクリアで、夢の中にいるような浮

遊感など微塵も存在しない。
体に打ち付けられる雨が、冷たい。
雷の音が、砲撃の音が、鉄と油の匂いが、仲間たちの言葉が。
否が応でも、これが紛れもない現実であることを伝えてくる。
「……整理してみよう。確認された敵車両は今のところ合計七両。Ｔ―３４／８５、Ｔ―３４／７６、そしてＩＳ―２（スターリン）。いずれもあの時、我々が相対した相手――プラウダと同種だ。校章まで確認されているとなると、どうやら相手はプラウダである可能性が非常に高いな」
そう。仔細は不明だが、どうやら敵手の正体はかつて決勝で、この舞台で戦った相手であるプラウダ高校の者らであるようだ。
「なんでプラウダが……？」
「それも不明だ。そもそもこの状況だ、奴らが本当にプラウダの面々なのかすら怪しい。……いや、それどころか」
――その先を言おうとして、まほはしかし言葉に出せなかった。
そう。そもそもこのような状況で襲ってくる相手が、人間である保証はない。
そんなことを言ってしまえば、きっとさらに恐怖が深まってしまうだけだから。
――そもそも、私たちは何故こんなところにいる？

ここに来る前、確か私たちは格納庫で口論をしていて。
抗えない眠気とともに意識が飛んで。
気付けばここにいた。
「――待て」
そうだ。私はその時、何を見た？
あの場にいた全員が、本当に全員この場所に揃っているか？
「あの……お姉ちゃん」
そこで、手を挙げる妹の姿が目に入った。何か新たな情報があるのか、とまほは発言を促す。
「ああ、どうしたみほ？そうだ、おまえたちからはまだ何も聞いていなかったな。何でもいい、何か見たのならば教えてくれ」
その言葉に、みほは頷いて。
「私、見たの。こっちに砲撃してくるそれを」
「敵の戦車か？車種は？」
「ううん、違う。戦車じゃない」
そして、あまりにも出鱈目な事実を明かす。
「――カール自走臼砲。しかも明らかに、あのカールは異常だった」

「一分も経たないうちに行われた砲撃は、合計五発。カールは一両しかないのに、明らかに異常な頻度で砲撃が続いたの」

「――」

まほが、そしてのみならず話を聞いていたこの場の全員が絶句する。

冗談を、馬鹿なことを言うのはやめろと、咎める者はいなかった。

――開発国、ナチス・ドイツ。

――製造期間、１９４０年から１９４２年。

――配備期間、１９４１年から１９４５年。

――主砲、８．４５口径６００ｍｍ砲。

ラインメタル社が開発し、独ソ戦においてはセヴァストポリ要塞包囲戦やブレスト・リトフスク要塞攻略、あるいはレニングラードなどにおいて実戦投入された、史上最大の自走砲。

堅牢な要塞、城塞を文字通り粉砕するために生まれた巨砲。

そんな化物が、敵手には存在するのだ。

加えて、みほの話によれば、たった一両のカールから砲撃が雨霰と飛んできたという。

もはや冗談を通り越して荒唐無稽というほかにないだろう。

カールの発射速度は、おおよそ１０分間に１発。しかしこの場においてはその五十

倍、最低でも１０分で５０発の頻度で砲撃が飛んでくる。
悪夢としか言いようがないだろう。
「あと……あともう一つ。私、見たよ」
「……なんだ」
まだ、まだあるのか。これ以上知りたくない、と軋む心が悲鳴を上げた。
しかし、まほは聞かねばならない。それが指揮官たる自分の役目なのだ。
「カールの前にね、あの人がいたんだ。甘粕さんが、笑いながら私を見ていたんだ」
「――――」
ああ、やっぱり。
どこか他人事のように、西住まほは先の予感通りの言葉を受け止めていた。
そう。あの場にいた者たちの中で、唯一彼のみがこの場にいない。
思い返す。今までのことを全て。
――あの決勝の後、私たちのもとに彼は来た。
――その後、私は夢の中で彼と出会った。
――彼は、黒森峰（私たち）を視察しにやって来た。
――最後に見た彼が、どうしようもなく恐ろしかった。
「――」

言葉が出ない。そんなことはありえないと当たり前の考えが浮かぶが、しかし本能でそれが否定できない。

――彼が、甘粕正彦こそが、この状況を作り出したとすれば。

全ての辻褄があってしまうのだ。▪

――その通り。

「……っ!?」

彼の声が聞こえた。視線を感じた。その一つ一つに込められた圧、圧、圧。

足がすくむ。怖気が走る。歯はがちがちと音を立て、脂汗が滲んでくる。

――おまえたちの勇気（ヒカリ）を示すがいい。真に誇るべき道があるならば、その道を突き進め。果てにおまえたちが輝けることを、俺（魔王）は信じている。

怖い。ただひたすらにその存在が巨大すぎる。

――それを知り、あるいは見つけ、認めて信じるがいい。そして俺に抗い、立ち向かい、乗り越えるのだ。おまえたちならば、必ずやそれが出来る！

心からの激励と叱咤が終わり、圧が消えてからも、私たちはしばらく動くことすら出来なかった。

魔王なりの激励を終え、期待で胸が張り裂けそうになるのを堪えながら、甘粕は背後に目をやった。

――カール自走臼砲・Ⅶ号試作車輌「フェンリル」。

自身が創りだした悪名高き狼（フローズヴィトニル）の名を冠するそれを見上げ、そして甘粕は目を閉じる。

甘粕正彦が振るう夢の力は、分類すれば五つ、その五つの中でさらに二つの、合計十種の類型に分けることが出来る。

――身体能力を強化する戟法（げきほう）の、剛（パワー）と迅（スピード）。

――体力や耐久面を強化する楯法（じゅんほう）の、堅（防御力）と活（回復力）。

――イメージを遠距離に飛ばす咒法（じゅほう）の、射（射撃）と散（拡散）。

――他者や場の状況を解析・解体する解法（かいほう）の、透（すり抜け）と崩（破壊）。

――そして、残る最後の一つ。甘粕正彦がこの場において真っ先に用いた夢。

即ち、イメージそのものを具現化する創法（そうほう）の、形（物質創造）と界（環境創造）。

先の全国大会の舞台を、当時の天候まで合わせて再現したのは創法の界。

そして、フェンリルを創造したのは創法の形。

余談ではあるが、プラウダ高校の戦車を操っているのは、かつてこの決勝の舞台を戦った少女たちを再現した、いわゆるエキストラである。

明確な自我を有し、自ら考え、そして動くがしかし彼女たちは決して実在の人間では

ない。

当の本人たちはそもそも邯鄲に入っていないが、それでもそこにいたという認識さえあれば、夢はそれさえも再現する。この場の彼女たちは、搭乗する戦車も含めて、全てがそれだ。

身近なもので例えるならば、映写機が映し出す映像といったところであるが、しかしこの場においては紛れもなく存在するのだ。

よって攻撃されれば当然被害を受ける。この場において黒森峰に逃げ場はない。

話を戻そう。夢の力によって創形されたカールは、現実と変わらぬ威力を有しながら、しかし甘粕正彦の夢によって、その一切の弱点を埋められている。

移動速度が遅いならば、一度消して新たに創ればいい。

創り出される砲弾の数に限りなどない。

次弾装填に時間がかかるならば、最初から砲弾を装填完了時の位置に創りだせばいい。

そして、未だ見せてはいないが、例えば砲身そのものを捻じ曲げて砲撃することすら可能だ。夢においては、物理法則すらも操作される。

他にも、他にも、他にも——。邯鄲盧生を統べる者たる甘粕正彦は、文字通りなんでもできる。有り得ない話ではあるが、全人類を敵に回しても勝利するだろう。

しかし、これはあくまでも試練なのだ。
これだけのことを為しながら、甘粕正彦は黒森峰の面々を心の底から応援している。
――乗り越えろ、勇気を出せ、おまえたちにならばそれが出来る。
そう、信じているのだ。
「――来い」
閉じていた目を開く。その表情は心からの喜悦と期待に満ちており、そしてまた同時に破壊を齎すものとしての凶相であった。
魔王(おれ)はここにいる。魔王(おれ)がいる限り、誰も決して逃がしはしない。
全ては人の輝きを目にするため。おまえたちが輝ける未来を選べるように。
試練はまだ、始まったばかりだ。

第８話 「忠」

「くそっ……」

最早進退窮まった状況。車内に侵入してくる冷たい水に濡れながら、西住まほは歯噛みしていた。こんな状況を齎した魔王のようなあの男に、そして何より、己自身の考えの甘さに。

無駄だと分かってはいるが、それでも状況を呪うしか出来なかった。

そうだ。こんな馬鹿げたことが出来る人間が、真っ当な思考や常識の持ち主であるわけがないだろう。

彼は戦車道連盟の副理事だが、それはきっと彼が持つ肩書の一つに過ぎないのだろう。そしてそんなものなど、今となっては最早何の意味も持っていない。

重要なのは、彼が何を思い、何を考え、何を期待してこの状況を作り出したのか。

彼の真意は何なのか。

何故私たちは、こんな目に遭っているのか。

戦いの場において、何故と理由を問うのは愚挙以外の何物でもない。

そんなことを問うても、例えその答えが得られたとしても事態は変わらないし、そも

そもそんなものがあるとは限らない。

重要なのは目の前の戦いに勝利すること。ならば考えるべきはこの状況への対応以外にはないのだが、ではだからといってそれをやめることは出来なかった。

そしてそれは、この場においては決して無意味ではない。何故ならば先の理屈は常識であり、正論であるからだ。

普通はそうである、だからこそ普通でない人間にはその常識が通用しない。

彼女たちは未だ、甘粕正彦という男を知らない。

彼がどれほど常識外の思考を有する馬鹿なのか、まだ知らないのだ。

ゆえに、この状況を作り出した彼を少しでも理解しようという西住まほの思考は、現状を打破するために最良の選択であった。

――始めは、甘粕正彦の言葉が終わってしばらくの後。同じ場所にいつまでも固まってはいけないという当然の判断のもと、移動を開始した直後だった。

集まった情報を吟味していた私たちは、偶然にも自分たちのいる場所があの決勝の舞台で利用した森であることに気付いた。

さらに言えば、プラウダが森に入った私たちを出来る限り包囲殲滅しようとしていることも含めて、あの時の焼き増しに近いことにも。

そう、何もかもがあの時と同じだった。

唯一気がかりなのはカール自走臼砲だが、そもそもこちらの位置を正しく理解できなければ脅威ではない。

当たれば例え要塞であろうと粉砕するそれは、しかし極論を言えば当たらない限りは存在しないのと同じなのだ。

だから、とるべき選択はあの時と同じ。それでとりあえずは対応できる、と。

今度は気をつければいい、と。

あとはなんとか、この場から逃げる方法を考えればいい、と。

そんな当たり前で正しい選択肢を選んでしまった。

正常性バイアスという考え方がある。

社会心理学、災害心理学において指摘される人間の心理における問題点の一つを指摘したそれは、端的に言えば事態の過小評価と危機察知能力の鈍化だ。

人間は得てして異常な状況――たとえば天災、あるいは火災や事故の現場など、明らかに危険と分かる状況下において、それを無視または過少に理解してしまう。

「まだ大丈夫」「自分は大丈夫だ」「そんなことはありえない」――そう思い込み、そして時にそれゆえに自らの身を滅ぼしてしまう。

では、なぜ人はそんな心理を抱くのだろうか？

自己を滅ぼす悪癖であるそれが、なぜ問題として取り上げられるほどに人の心に残

り、消えることがないのだろうか？

――答えは単純にして明快。そうするほうが楽だからだ。

非日常の現実に正面から向き合い、立ち向かうには当たり前だが多大な精神力を必要とする。

絶えず命の危険と隣り合わせで、逃げ場などなくて。

そんな状況（セカイ）に、一体誰が耐えられるという？

――そう、無理だ。

だってそれはどうしようもなく苦しいから。どうしようもなく怖いから。

だから、逃げる。

目の前の現実から目を逸らし、目の前の現実に嘘をつく。

なるほど、事実だ。そしてそれは正しい。

そうでなければ、きっと狂ってしまうから。

不条理に立ち向かえるほど、人間は強くないから。

「――だから、諦めろと？」

そんな逃げの理屈を、認めろと？

否、と甘粕正彦は喝破する。

「違う。違うのだよ。人とはそんな惰弱な生物では決してない。苦難、恐怖、絶望とは即

ち乗り越えるべきものだろう。世の古今や東西を問わず、人はそんな理想（ユメ）を描く」
基督教（キリスト）において、神（イエス）の子が悪魔からの誘惑を受け、そしてそれを断ち切ったように。
希臘（ギリシア）神話において、英雄（ヘラクレス）が十二の試練を課され、その全てを乗り越えたように。
他にも、他にも、他にも――。
物語とは得てしてそういうものだ。そうした輝（ヒカリ）きこそを素晴らしいと思う心は、人類に共通して存在する。
「では何故、人はその道を選べない？危機を前にした時、何故そこから目を逸らす？」
素晴らしいと思うなら、焦がれるならば。どうしてそれに倣おうとしないのか。
「答えは明瞭。それが所詮は夢に過ぎないからだ」
乗り越えるべき試練
そんなものは、現実にはない。
倣（う）
そんな素晴（べき）らしい人間（背中）は、現実にはない。
――英雄（終四八）が示した勇気も、彼の為した偉業も、この世界には存在しない。
最後に至っては夢という形ですら存在しない。この世界で彼の勇気を知っているのは、真実甘粕正彦ただ一人なのだ。
それが夢で終わる以上、現実に影響は及ぼさない。
そしてその果てにあるものは何か。
「覚悟も、勇気も、総じて所詮は空想上の産物でしかなく、何も起きず、何もせず、そし

てそのままでも生きていける世界。そんな世界では、人は勇気のなんたるかすらも忘れてしまう」

西住みほが、西住まほが、逸見エリカが、赤星小梅が、そして彼女らの友が示した勇気を、しかし見ようともしなかった輩がいたように。

頑張る者が嘲笑され、何の覚悟も持たぬ蒙昧共が己の下劣さを理解すらせずにほくそ笑むのだ。

なんと醜悪で愚かしく、そして嘆かわしいことだろうか。

愛する人間(おまえたち)の輝きが日の目を見ずに澱み腐り果てていく様を、見てはおれんのだ。

「よって、俺がそれを叶(ユメ)えよう。真実、己の力で勇気を示せる機会を与えよう。知らんというならばいくらでもその身を以て味わうがいい。ここには俺しかいないというのならば、俺がおまえたちの尻を蹴り上げてやるしかあるまいよ」

普遍的、かつ平等に。

「それこそが我が試練。おまえたちを牢獄から解放する光であるッ！」

既に甘粕の思考に、自制の文字は存在しない。一度軛から解放されてしまった時点で、この男は暴走する機関車と同義だ。

「さあ、それで良いのか？俺は以前の焼き増しを以て試練と称すほど、甘い男ではないぞ？」

危機が、苦難が足らんというならばいいだろう。
目を見開くがいい。そして向き合い、乗り越えてくれ。
もとより俺は、それをこそ信じているのだから。
濁流と化した川を挟んだ向こう側、隊列を組み前進する黒森峰の戦車を見つめながら、甘粕は再びフェンリルを創形する。
敢えて見やすい位置で行ったため、当然向こう岸では少女たちが混乱と恐怖の声を上げている。細い崖の道ゆえに、最早彼女たちの進退は窮まった。
そう。逃げ場などどこにもありはしない。魔王からは逃げられない。
「――撃て」
その場の全員が、静かに放たれた魔王の勅令を耳にしていた。
刹那、轟音とともに放たれた６０ｃｍ重ベトン弾が崖そのものに着弾し、そして文字通り粉砕する。
足場を失った全ての車輌が落ちてゆく。
奇しくも、いや、甘粕からしてみればそうなるように演出したのだから当然というべきだろうか、それはあの決勝の出来事――全ての始まりとなったあの時と同じで、そして全く異なる展開だった。
何故ならあの時川へと転落したのが赤星小梅らのＩＩＩ号戦車だけだったのに対し、

今回は全ての車輌。

甘粕は、誰も彼もをまとめて千尋の谷へと叩き落としたのだ。

さあどうする？誰が真っ先に抗ってくれる？ああそうだ、この程度の苦難は、既に彼女たちが乗り越えたぞ？ならば他の者らも出来る筈だ。

これは西住みほの勇気を知るための試練。

そして同時に、それを上回るための試練。

ゆえに、ここに勇気と愛を示すがいい。おまえたちが真にそれを信ずるならば、真にそれを願うならば、不可能などありはしない。

なぜなら既におまえたちは俺と繋がっている。どんな不条理であろうと、俺が許し、おまえたちが望むならば出来るのが夢なのだ。

――甘粕正彦は、人間の愛や勇気と言った素晴らしい輝きを愛している。それが見たくて見たくて仕方がない。

そして困ったことに、彼はそれを見るために悪い意味で積極的なのだ。輝かしい人間を見るためならば、大勢の人間を極限の混沌と災禍に叩き落とすことに対してすら、何の躊躇いも持っていない。寧ろそれこそが救済であると、心の底から思っている。

当たり前だが、彼の試練につき合わされて無事で済む人間など存在しない。立ち向かうことに耐え切れなかった人間は傷つき、最悪の場合は死を迎えるだろう。

そんな楽園（じごく）を齎すがゆえ、甘粕正彦は魔王なのだ。

「あ、ああ……」

徐々に浸水する車内で、赤星小梅は震えていた。

水圧で扉は開かず、どこにも逃げ場など存在しない。

そして、あの時とは決定的に違うことがもう一つ。――今度は、誰も助けてはくれない。

ここに、大会の時のような救助隊など存在しないだろうから。

今私たちが置かれているこの状況を、そっくりそのまま全員が体感しているのだから。

よって、最早詰みだ。黒森峰の面々は、為すすべもなく魔王の試練によって齎された災禍によりすり潰され、終わる。

「――い、やだ」

そうだ。そんなのは嫌だ。

こんな訳の分からない苦難に巻き込まれて、そこで終わるなど、みんな嫌に決まっている。

だってそうじゃないか。そもそもの始まりは自分だったのだから。

あの時、私が川に落ちてさえいなければ。

みほさんが謂れのない非難を受けることはなかった。

隊長が苦しむこともなかった。

そして、彼(甘柏)が来ることも、おそらくはなかった。

みんなみんな、私があの時落ちたのが悪いんだ。そしてそのせいで、今みんなが苦しんでいる。

それが、何より一番腹立たしくて許せない。

仲間であると、友達であると誓ったのだ。なのにいつも助けてもらってばかりで、挙句自分の所為でこんな地獄に仲間を落としてしまった。

「嫌だ。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！私の所為でみんなが苦しむなんて、そんなのは絶対に嫌だ！」

私は(赤星小梅)臆病な人間だ。自分一人では苦難になど立ち向かえないし、そんな場所では足がすくんでしまう。

だけど、それでも。
自分の所為で大切な仲間を危険に曝して平気な顔をしているような、そんな卑怯者ではないと誓った。
自分だけ助かればいい、なんて考えは最初からない。だって、私は――
「みんなを失うことが、一番怖いんだから！」
――ならば。
瞬間、視線を感じた。声が聞こえた。
そして同時に感じる、何か途方もなく大きなものを見ているような、そんな奇妙な感覚。
――願うがいい。おまえの愛を、友情を。忠を、覚悟を、理想を。
思い返すのは、先ほど見た異常な光景。何もないところに一瞬で現れた巨大兵器と、それを創りだしたであろう人物の顔。
そうだ。何を自分の物差しで状況を推し量っている。ここが異常な世界であるということくらい、分かっていたはずだろう。
ならば出来る。最早全員が助かる手段など、一つしか思いつかない。
今度は人任せになどしない。私が、私の意志で、みんなを助けるんだ。
「――消、え、ろぉっ!!」

出られないのなら、消せばいい。常識的に考えれば有り得ない選択肢だが、他に方法など存在しない。

そして、そんな理外の願いが叶うのが夢の世界。思い一つで、不可能を可能にする世界の姿だった。

――見事。それこそが邯鄲の夢。おまえの思いの結晶だ。

裂帛の気合とともに放たれた小梅の手に触れた途端、彼女たちを水底へ縛っていた戦車が、文字通り跡形もなく消滅した。突然水中に放り出された小梅たちは、しかし驚愕も少なくそのまま他の車輌の救助活動に移っていた。

ここから出たいと、心の底から願った。

仲間を助けたいと、何よりも強く願った。

そのためならなんだってやると誓った。

その不退転の決意。その覚悟のほど。全てが最高の純度であったゆえに、赤星小梅の夢もまた最大効率で稼働する。

――邯鄲の夢とは、何も選ばれし人間にしか振るえない力というわけでは決してない。

誰しも一度は、夢の中で現実を超えた経験をしたことがあるように。夢においては、人は誰であろうと大別五つの夢を全て使用できるのだ。

たった今、赤星小梅が示したように。

そしてそんな素晴らしい勇気をこそ、甘粕正彦は称賛する。自らが先頭に立って苦境を作り出しながら、しかし一方でそれに抗うための手段を用意している。どうか抗ってくれと願いながら殴りつけている。

矛盾しているし破綻している。とても真っ当な思考回路ではないことは明らかで、しかしそれゆえに甘粕正彦なのだ。

夢は終わらない。魔王の試練は終わらない。心からの期待で胸を膨らませながら、甘粕正彦は笑みを深めた。

第9話「憧憬」

――別に、何かこれといった理由があったわけではない。

浸水する車内で、ふと三年生の一人はそんなことを考えていた。最早脱出は不可能。じわじわと迫る死の恐怖に身は震え、泣き叫んで然るべき状況にも関わらずだ。

一種の走馬燈、のようなものだろうか。あるいは、現状の再確認だろうか。

理屈ではなく、本当になんとなく、あの日からの自分たちを回想していた。

そもそもの始まりはなんだったのだろうか。

自分よりも年下であるにもかかわらず、自分よりも優れた能力を持つ彼女たちへの嫉妬だろうか。

それとも、単に西住みほという少女を気に食わないと思ったことだろうか。

これまではそう思っていたし、それが正しいと信じていた。

実際、とくに西住みほに関しては三年生のみならず他の二年や一年からも苦言を呈する者がいたことは否めない。

西住流を体現したかのような姉と違って、どうしても軟弱な人間に見えたのだから。

日常生活ではどこか抜けていて、引っ込み思案で、自分の言いたいことも碌に言えな

い小心者。

姉のおかげで、そしてまた西住という家のおかげで、一年の身でありながら副隊長にまで上りつめたと、そう思っていた。

けれど、西住みほはそんな悪評を真っ向から跳ね返して見せた。

端的に言えば、優秀だったのだ。

状況を冷静に把握し、対応する戦術的観察眼。

犠牲を良しとせず仲間を慮る優しさと、それゆえに人を惹きつける統率力。

そして、そんな自分に驕ることのない謙虚さ。

全てが自分よりも上で、だからこそ文句のつけようがなかった。

黒森峰では、勝利こそが正義。ゆえに、己の実力を発揮し勝利を齎す彼女は紛れもなく正義であり、だからこそ表立って彼女を批判することはできなかった。

だから、あの時。あの決勝の舞台で、西住みほが正しくない選択をした時。

私たちは、これ幸いと彼女を批判した。

正義は我にあり、おまえは間違っている、なんと馬鹿な真似をしたのだろう、愚かしいぞ――と。

「――そう、思っていた」

そう思い込んでいた。正しい理屈を並べて、本当の原因に目を向けていなかった。い

いやむしろ、その逆だ。
それを目にいれまいと、見たくないと、ただ顔を背けていただけなのだ。
そう。本当は理由など存在しない。
あるとすればそれは、酷く小さく、醜い嗜虐心と虚栄心。
憂さ晴らし。気まぐれ。いいところで所詮その程度のものだったのだろう。
何のことはない。彼女たちは結局、日々を生きる上で溜まっていた鬱憤の捌け口として丁度良かったから彼女を殴っていたに過ぎないのだ。
要するに、彼女らはどこにでもいる小物だったのだ。真面目に生きる気概のない、一山いくらの愚か者。
理想も、信念も、意志も、何もかもが欠けたくだらない存在であり、黒森峰という巨大な群れに属してそのおこぼれを貰うような、そんな俗物に過ぎなかった。
そして、挙句の果てにその醜さを突き付けられた。人とは斯くあるべきであると、そんな勇気を見せつけられた。
それが、どうしようもなく怖かったから。
それを、認めなかったから。認めようとすらしなかったから。
今、こんな大事にまでなってしまった。
——たとえ仲間を見捨てても、勝利することこそが至上の目的である。

――足手まといは切り捨てろ。それが兵法の常識だ。

――そもそも、おまえが助けに行く必要などどこにもない。救助隊にでも任せれば良かったのだ。

それは、今まで己が偉そうに垂れ流していた正論。狭量な己を守るために心に纏っていた鎧の数々。

それは文字通り正しくて、反論する余地など欠片もない。

だが、違う。だって、今私はこんなにも――

「――いやだ」

こんなにも、無様に泣き喚いている。

死とは最大の恐怖である――そんな当たり前で、そしてこれまでずっと無視してきた最大の正論。これまで無縁だった、知らなかった、そんな恐怖。それを真っ向から突き付けられて、初めて私はそれに向き合った。

怖い。ただひたすらに、迫りくる死が恐ろしいと涙を流す。しかしそれすらも、いっそう激しく侵入してきた水に呑まれ、消えてゆく。

このまま誰にも知られず、暗い闇の中で死んでいくのだという現実が、冷たい水となって容赦なく私を苛んでいた。

他の面々もそれは変わらない。いくら頑張っても扉は開かず、逃げ場などどこにも存

在しない。

そう、思っていたのに。

「大丈夫ですか、先輩!?」

彼女が、西住みほが、いとも簡単にその絶望を吹き飛ばしていた。車外への扉をこじ開け、必死に手を伸ばしている。

湧き上がる安堵の念。ああ、自分はまだ死んでいない。

それが、嬉しくて仕方がない。

だから、なあ西住。

甘い話だってことは自覚してるよ。今まで散々虐めてきたのは私たちで、おまえはずっと苦しんでた。今やっと、その現実と向き合うことが出来たから、分かるんだ。

自分が最低な部類の人間だって、やっと自覚したばかりなんだよ。

だけど、そんな私にもおまえは手を伸ばしてくれるのか？

私なんかが、その手をとってもいいのか？

「――急いで！」

「――――」

視線が交差する。ああ、この子は本気だ。本気で私たちなんかを心配して、本気で助けようとしている。

自分が受けた仕打ちなんか二の次と言わんばかりに。

瞬間、頭を金槌で殴られたような衝撃が襲った。そして次瞬、猛烈に襲ってきたのは羞恥の念。

自分と比べて、彼女のなんと真っ直ぐで美しいことだろう。全身全霊で、全力で、全存在をかけて、ただ己の信念を貫いている。

先ほどまでの自分に対する怒りが収まらない。自分はこんなにも美しい少女を踏みにじっていたのかと、自己嫌悪の念が止まらない。

思い返せば、自分はなんと愚かで低俗でくだらない人間だろうか。

自分よりも優れた人間に、勝手に嫉妬して。だけど表立って何かする気概はない。

他人のミスに乗じて、思う存分好き勝手に殴りつけた。そこになんの熱も、覚悟もない。

示された勇気を、見ようとすらしなかった。そんなことをすれば、自分の矮小さを見せつけられるような気がしたから。

――そして、その果てに待っていたのはコレだ。

彼女は負けなかった。暗い闇の中でも、決して己を見失わず、眩く輝き続けたのだ。

無論、それは彼女一人の力ではない。彼女の友人が、そして血を分けた姉が、彼女を地獄から連れ出した。だからこそ今、彼女らは何よりも烈しく輝いている。

そんな勇気ある少女に、手を差し伸べられている。誰がどう見ても、器の違いが明確に分かる結末だ。

自分のような小悪党にはお似合いの末路だろう。だって、惨めで惨めで仕方がない。

けれど、それでも。

まだ生きていられることが嬉しかった。そして何より、彼女が——西住みほが眩しくて、羨ましくて。

その勇気（ヒカリ）に、私は焦がれたのだ。

差し伸べられた手を握り返す。

自分はくだらない人間だと、自覚した。

だけどそんな自分にすら、この優しい少女は手を差し伸べてくれる。生きてくれと、心の底から願ってくれる。

そんな真っ直ぐな思いを見せられて、それを裏切ることなど最早出来ない。

もはや手遅れだと、言われるかもしれない。

いまさら何を、と言われるかもしれない。

けれどそれでも、自分は確かに彼女に、彼女たちの勇気に魅せられたのだ。

報いを受けろというならば、喜んで受けよう。

彼女たちにそう言われても仕方ないことを、自分たちはしていたのだから。

ならばこそ、こんな不条理の中で死ぬことは出来ない。
何より、彼女たちを守ってあげなければならないだろう。傲慢かもしれないけれど、そう思ったのだ。
だから、まだ終われない。
この悪夢が終わるその時まで、自分は彼女たちを守り抜こう。
――ここに、目を閉じていた者らはついに勇気（ヒカリ）を目の当たりにした。
それは奇しくも、甘粕の求めていた変化ではなかった。
何故なら彼女たちを前へと進ませたのは、甘粕の齎す絶望と恐怖ではない。
それは即ち、西住みほが、西住まほが、逸見エリカが、赤星小梅が示した勇気への憧憬。
結果的には大きな差などない。最早仮定に過ぎないが、甘粕の試練が彼の思惑通りに進んでいても、彼女たちはおそらく同様の結論を得ていただろう。
だが、必要に迫られて仕方なく選択した道と、例えどんな状況であれ自分の意志で選んだ道では、その価値に大きな隔たりがあることは当然のことだろう。
よって、その慮外の輝きを目の当たりにしながら甘粕正彦は歓喜するのだ。
最早無駄と、有り得ぬと思っていた勇気の形。
彼がかつて心の底から憧れ、魅せられた勇気の形。

それが眩しくて眩しくて仕方がない。
ああ、我が憧れの柊四四八(イエホーシュア)よ。おまえが今の俺を見ればどう思うだろうな？
まるで成長していないと、相変わらずだと呆れるか？それも仕方がないな。
何故なら俺は、また人間を信じることができなかった。
悪癖であると理解はしているのだが、しかし結局は我慢できなかった。
「ゆえに、これが最後だ」
俺は不要(試練)と、彼女らはそう示したのだ。ならば、あとはただ去るのみだろう。
――ここまで明確に、己の信じる道とは異なる勇気を見せつけられながら、しかし甘粕の思考はこの通り。試練を途中で止めるという選択肢が出てこない。
より正確にいうのならば、選択肢としては存在するがそれを選べないのだ。
甘粕正彦は人の輝(ヒカリ)きを愛している。そして、好きなものをずっと見ていたいというのは人間ならば誰しもが抱く当たり前の感情だが、甘粕の場合はとくにそれが顕著であった。
要するに、予想以上の勇気を示した彼女たちを見て、彼はこう思ったのだ。
「さあ、もっとおまえたちの輝(ヒカリ)きを見せてくれ。その煌めきに、どうか見惚れてみたいのだ」
よって、試練は終わらない。

彼の狂念を反映するかのように、フェンリルが不気味に唸り声を上げていた。

川から上がった黒森峰の面々は、森の中に手ごろな開けた場所を見つけ、そこで休息をとることにした。

冷え切った体を暖めるため、小梅が何もないところから火を起こしたのを目にして誰もが目を見開いていたが、同時に全員の心にあったのは奇妙な納得だった。

何故なら彼女たちは皆、既にこの世界の異常性を目の当たりにしている。

それは即ち、甘粕によるカール自走臼砲（フェンリル）の創形。

やろうと思えば出来る。それがおそらくは、この世界においてのみ許された超常の力。

「――まるで、夢だな」

まほが、ふと呟いていた。

「けれど隊長。夢は必ず醒めるものです」

その小さな声を、この場で唯一逸見エリカが耳にしていた。彼女の凛とした声に、思い思いに夢の力を試していた小梅やみほたちも、そして静かにその様子を見つめていた

三年生たちも、彼女に目を向ける。
「終わらない夢なんてない。私たちが生きているのは現実で、だからこそこんな夢は間違っています」
死ぬ思いをした。訳も分からず、ただ不条理に巻き込まれた。
「私は……そんなの御免です」
自分たちは決して、生きるか死ぬかの修羅場に好き好んで入っていくような気狂いではないのだ。
「……そうだな」
雨にもかかわらず消えない不思議な炎に照らされながら、まほは頷いた。
「戦車道とは、武道だ。礼節を学び、淑やかで慎ましく、そして凛々しい女性を育てるための」
それは、脈々と受け継がれてきた不滅の理念。
武道とは即ち、人間の道を武術を通して学ぶ行いのことだ。
その目的とはつまるところ、心技体を鍛えぬくことによる人格形成に他ならない。
「彼の考えは馬鹿げているよ。死ぬか生きるか、そこで示される気概だと?それを見せろと?――甘粕さん、貴方は間違っている。少なくとも戦車道を愛する一人の女として、私はそれを断じて認めない」

長い思考の末に、西住まほはこの場における最大のルールを理解していた。それは、彼女がこの中で最も直接的に、そしてまた長く甘粕と関わっていたからだろう。

「彼は人の輝きを、世界の何より愛している。それが見たくて仕方がないから、こんな頑張らなければ生きていけない世界（ユメ）を描いた」

これまで自分たちに彼が投げかけた言葉の数々。その全てが心からの期待に満ちていた。それを察せないほど、自分は――いや、自分たちは盲目ではない。

「だからこそ――なあ、みんな。言ってやらねばならない言葉があるとは思わないか？」

今もどこかで、楽しそうに私たちを見下ろしているであろう彼に。

誰も信じていない、弱い弱い魔王に。

「――余計なお世話だ、この馬鹿ッ!!」

貴方の試練なんかなくたって、私たちはきっとやり直せる。

貴方の試練なんかなくたって、人は勇気を出せるのだと、西住まほは高らかに宣誓していた。

だって、私のこの思いも、エリカや赤星の思いも。そして、この場のみんなの思いも。そこに貴方の試練は関わっていない。

結局これは、当たり前の答えに気付いたかどうか、それが早いか遅いかの違いでしかないんだ。

「そうでしょう、先輩方」

川から上がってきたときは少し驚いた。今までとは何となく、本当に何となくだけど、今まで憎くて憎くて仕方がなかった三年生たちに、何の嫌な感じもしなかったのだ。

直感的に察したよ。ああ、やっとこの人たちも気づいてくれたんだって。

そう理解した時、私は少し恥ずかしかったな。だって私も、一時の勢いで全部捨てようとしていた。

夢に落ちる寸前の自分は、彼女たちを何か気持ち悪いものとすら見ていたけれど。

「今の先輩方は、ちゃんと人間です」

きっと彼女たちなりに、決断出来たのだろう。

本音を言えば、では許せるかと言われると怪しい。今だって、これまでの彼女たちの行いには腸が煮えくり返っている。

そんな思いに、昨日までの自分ならば蓋をしていただろう。チームの編成や諸々の対応を考えれば、ここで私的な感情で動いてはならない、と理由付けをして。

けれど、それでは駄目なのだ。

「本当に大切なことは、自分の決断(ココロ)に嘘をつかないこと」

エリカが示したように。赤星が示したように。そして、みほが示したように。

私はそんな彼女たちに、憧れたのだ。彼女たちに気付かせてもらったんだ。

「だから、ずっと言えなかったことを今から言います。――みほに謝ってください、先輩方」

言葉は短く、はっきりと放たれた。

そして、そこから目を逸らしていたかつての小物の姿はどこにもなく。

「分かっているさ。私たちは、最低なことをしてしまった」

ぽつぽつと、一人一人が己の罪を曝け出してゆく。

「こんな状況になるまで、西住の勇気を見ようともしなかった。自分が死ぬ思いをして初めて、あの時全てを捨ててでも仲間を助けに行った意味が分かったよ」

「死ぬのは怖い。そんな当たり前のことすら見ようともしていませんでした。そして挙句の果てに、西住さんを間違っていると糾弾した。……勝利という黒森峰の正義を隠れ蓑にして、貴女を一方的に殴りつけた」

「謝って済むことではないことは分かっている。だが、今こうやって悔いることが出来ているのも、西住のおかげだ」

「……済まなかった。三年生を代表して、謝らせてくれ。そして感謝する、みんな。私たちがこの決断に至れたのは、みんなのおかげだ。……ありがとう」

最も率先的にみほを糾弾していた三年生がそう言って頭を下げる。無論、他の者らも同様だった。

道を誤った者は、やがてそれに気づく時が来る。肝要なのはその時その人間がどういった決断をするかであろう。

何故なら人間は、いくらだってやり直すことが出来る。

間違いを犯した己を恥じ、変えたいと思うだけで、人は正しい道を進むことが出来るのだ。

「――頭を上げてください、先輩方」

それが分かっているからこそ、西住みほは微笑んだ。

「許すとか、許さないとか、正直私にはよく分かりません」

辛くなかったと言えば嘘になる。憎くないと言えば嘘になる。

「だけど、先輩方は謝ってくれました。それで、随分と楽になったんです」

自分の決断が正しかったのか、間違っていたのかなんて分からないけれど。

「今こうやって、私たちは本当のチームになれた。私はそれが、何よりも嬉しいんです」

互いの思っていることを、恥ずかしいところも含めて伝え合って。

今こうして、真の意味で私たちは力を合わせられるのだ。それが嬉しいと思うことは、決して間違いではないだろう。

後悔はしないと、先ほど誓ったばかりだ。ならば私が本当にすべきことは、先輩方の謝罪をちゃんと受け止めることだ。

「だから、続きは起きてからやりましょう。みんなで一緒に、黒森峰に、私たちの学校に帰ってから。だから……」

ねえ甘粕さん。貴方はきっと、今もどこかで見ているんですよね。

私は本音を言うと、感謝してるんです。

だって、貴方が来なければ私たちは何も変われなかったと思うから。

エリカちゃんも、赤星さんも、お姉ちゃんも、他のみんなも、そして私も。

変わる機会を用意して、背中を押してくれたのは、甘粕さん。

それで十分。ここからは私たちが私たちの手で切り開く物語だ。

「だから、帰ってもらいますよ。話しても分からないなら、力ずくで分からせればいい話ですよね？」

己の信じるものをイメージしろ。

先ほど彼がやっていた。それを確かに、この目で見た。

ならば出来る。やってみせる。

「――来て」

そして、思いが形を為す。

ここに現れるは、あの時も、そしてこれまでもずっと乗ってきた相棒であるⅥ号戦車（ティーガーⅠ）。

思いの強さも、部品の一つ一つまで把握している全体構造ゆえに再現された性能も、

決して彼に引けを取らないと自負している。
「私たちは、負けない――」
この試練を、終わらせる。
そして必ず、現実に帰るんだ。
空を見上げながら、みほは笑う。
雨は、上がっていた。

第１０話　「仲間」

「決して隊列を崩さないで！無理せず、生き残ることを最優先に考えてください！」
爆炎と黒煙に負けない声で、みほからの無線が飛ぶ。これ最早それを無視する者など、ましてや裏切る者など彼女たちの中には存在しない。
紅蓮の業火に包まれる大地を、少女たちの駆る戦車たちは走り抜けてゆく。その隊列に一切の緩みはなく、無限に襲い来る魔王の砲撃などものともしていない。
「全車左へ！砲撃が来ます！」
何故なら彼女たちは、その全てを回避しているからだ。当たれば要塞の壁であろうが粉砕する魔の狼の牙は、しかし決して地を駆ける鋼鉄の虎と豹の群れを捉えきれない。
それは決してまぐれではない。それを可能にせしめた要因は、大別すれば二つある。
まず一つ、大前提として避けるために動ける車種を選出したこと。
先ほどのフェンリルの砲撃により、この夢に入った時点で彼女たちが搭乗していた戦車は全て水底に没している。そこで当然、彼女たちは新たな戦車を必要とし、そしてそれを創りだした。
即ち、創法の形による武器の創形。

真っ先にそれを為したのはみほであり、そして黒森峰の面々の中で最もその資質に秀でていたのは彼女と、姉であるまほだった。

この両名が有する戦車に関する知識は、名門黒森峰の中においてもさらに群を抜いて高い。そんな彼女たちがその資質に秀でていたのは紛うことなき幸運と言えるだろう。事実、彼女たちが創形(だ)したＶＩ号戦車ティーガーＩとパンターＧ型は、現実のそれらと何ら変わらない性能を有していた。

ただし、これが必ずしもプラスであるかと問われれば、答えは否だ。何故なら二人はあまりにも戦車の構造に詳しかった。よって、たとえ無意識下でも現実における性能限界を設けてしまう。

燃料や砲弾はまた創ればいいとしても、甘粕のように創りだした物質を意のままに操り、不条理を現出させることはできないのだ。

話を戻そう。二人が創りだした車両は全二十両、そしてその全てがティーガーＩとパンターＧ型であった。これは即ち、十分な装甲と火力、そしてそれを満たしたうえで動ける車種としての選出である。

装甲が軽すぎては直撃でなくともカールの砲撃には耐えきれない可能性があり、十分な火力がなくては少ない機をものにすることが出来ない。

そして、それらを備えていてもまともに動けなければ文字通り粉砕される。常識を超

えた攻撃が飛んでくることを考えれば、機動力は欠かせない存在だ。
そしてその選択は見事的中する。いまだ一発の直撃も貰わず、前進していることがその証左であろう。
さらに、ここで二つ目の要因が絡んでくる。彼方から放たれる砲撃の全てを完全に予測し、それに対応している西住みほこそがそれである。
いや、予測ではない。何故ならみほは文字通り、はるか彼方でこちらに砲塔を向けているカールの姿を見ていたのだから。
即ち、呪法による遠隔視。
その範囲は、いまや甘粕によって創界されたフィールド全域をカバーしていた。まさに鷹の目と呼ぶべき、飛びぬけた空間認識能力。そうして得られる膨大な情報を全て処理する演算能力。
戦術指揮官として、彼女は天賦の才を持っている。それはこの夢においても変わらず、そして超常の力としてさらに昇華していた。
――成程。ではこれはどうだ？
甘粕とてそんなことは分かっている。もとよりここは彼の空間だ。彼の目から逃れられるものなど存在しない。
己の攻撃は悉く空を切り、徐々に迫りくる戦車たちを見ながら、しかし甘粕は取り乱

すことなど決してしない。
寧ろその逆だ。よくぞ乗り越えたと。よくぞ耐えたと――おまえたちは素晴らしいと。心の底から喝采している。
ならばこそ、甘粕正彦もまた一層奮起するのだ。そうでなければ、己の試練を乗り越えた者らに失礼であろう、と。
常軌を逸した思考回路だが、それゆえにこの男は魔王なのだ。
「前方に敵戦車確認。距離３３００。ＩＳ―２ですが、数が多い……。二十、いえ、三十です」
先ほどまで交戦していたプラウダではない。あれは正真正銘、魔王が創りだしそして操っている軍勢だ。
『パンター、ティーガー全車射撃開始。行進間射撃だが気にするな。思う存分、魔法の弾丸を叩き込んでやれ！』
この夢の世界でモノを言うのは、現実における常識やセオリーではない。
普通に考えれば有り得ないことも、思い一つで可能になる。
それは例えば、このように。
『よっし、一両撃破！』
『さしずめ魔弾の射手といったところか。しかしこれは、随分と集中がいるな……』

放たれた砲弾のうちのいくつかが、明らかに適正距離よりも遠い位置の敵戦車を追尾する。

回避行動など意に介さず、敵手を無限に追い続ける魔の砲弾。それを実現させたのは、呪法の射に長けた砲手の思いの力に他ならない。程度の差はあれど、もともと砲撃という〝飛ばす〟行為を仕事とする彼女たちの資質は、最低でも射程距離を軽く倍には伸ばす。優れた資質を持つ者ならば、文字通り必中必殺の魔弾となって敵戦車を貫くだろう。

最初の砲撃で撃破した敵戦車の数は八両。普通に考えれば大戦果だが、それでもまだ敵は二十二両残っている。

「気を付けて！敵戦車の砲撃が来ます！」

そして、彼女たちに出来ることは無論のこと甘粕にも出来る。

轟く砲撃音とともに飛来する、合計二十二発の魔弾の群れは、恐ろしいほどに正確に黒森峰の戦車を襲う。どれだけ回避を試みようが、絶対命中の理を以て虎と豹を地に沈めるだろう。

だが――

「詠段（えいだん）・顕象（けんしょう）――」

凛と響く声とともに、変化が現れる。

砲弾が弾かれる。装甲が薄い側面でさえ、砲弾が負けている。飛来する１２２ｍｍ徹甲榴弾の群れは、全二十両に全弾命中。全ての車輌が側面や上部装甲を攻撃されながら、しかし無傷で健在であった。

「……全く、なんなのよこれ」

その奇跡のような御業を為した主こと逸見エリカは、襲い来る疲労感に息を少し荒くしながら、しかし憮然としてそう呟いた。

重ねて言うが、彼女たちが夢に入ったのは紛れもなくこれが最初だ。当然、夢の熟練度など言うまでもなく低くて当然。

その、はずなのに。

「気持ち悪い」

頭の中に湧き上がってくるのは、知らない筈の知識。

――邯鄲の夢。

――序・詠・破・急・終の五常楽。

――戟法・楯法・咒法・解法・創法。

知らない筈なのに、知っているように。あたかも自分がそれを最初から知っていたかのように。どこからか流れ込んできているのだと、本能的に理解していた。

そしてその根源であろうあの男が、それを為していることも。

「要は、やる気があるなら力を貸すと、そう言ってるんでしょ？だから使い方を教えると」

序から上がれ。そこが本当の戦士としてのスタートラインだ。その先はおまえたち自身で見つけるのだと。

己に繋げた者らを強制的に一つ上の位階に引き上げた。

即ち、序から詠へ。五法の夢のうち二種を同時に行使し、重ね合わせる第二段階。

正確に言えばその存在そのものと、その詳細を悉く少女たちの頭の中に叩き込んだのだ。

そして、結果的に。今この瞬間、逸見エリカは壁を一つ越えた。先ほどの現象は楯法と咒法の同時使用。即ち、物質硬化を全車両に施したのだ。それは迫りくる脅威から仲間を守るために必要だったから。紛れもなく自分の意志で、一つ高みへと昇った。

「――馬鹿じゃないの」

なんだそれは？そんなもの私は知りたくなかった。そして何より、こんな真似をするあの男が気味悪くて仕方がない。

要は度を越したスパルタなのだ。勇気を見せろ、高みへ昇れ、もっともっと頑張れ。そうでなければ死ぬぞと、試練を雨霰と降らせながら叫んでいる。

今さっきの攻撃だって、私が全力以上に頑張らなければ誰かがやられていた。

心底理解できない。本当に余計な真似しかしないと呆れてものも言えない。
だって、私たちがやっているのは、本当にやりたいのは戦車道だろう。
こんな異能の力を振るって好き放題やれるなら、極論戦車なんかなくてもよくなってしまうじゃないか。
それでは最早、全く違うジャンルじゃないか。
「だから、ねえみほ。あいつをぶっ飛ばしてやりましょ」
何も分かっていない魔王面した馬鹿に、面と向かって言ってやらなければならないことがあるだろう。
「守りは任せて。私がいる限り、絶対に誰も死なせたりなんかしないから」
疲労も苦痛も、総じて些事。
それこそが私(逸見エリカ)が貫き通すと決めた、仁義の道なのだ。
そして、詠段に上がったのは彼女だけではない。
「射して崩せ。詠段・顕象――！」
自然と浮かんでくる知らない筈の言葉を紡ぎながら、赤星小梅は夢を描く。
自らが車長を務めるパンターの７０口径が火を噴いた。そこから放たれた砲弾が、最小限の誘導を得てＩＳ―２の車体正面に着弾し、そしてそのまま爆散させる。
言うまでもなくそれは本来有り得ない光景だ。ＩＳ―２の正面装甲の堅牢さは言わ

ずもがな鉄壁であり、パンターであろうと貫通は容易ではない。
にもかかわらず、貫通どころか着弾した瞬間にＩＳ―２が爆散するのだ。
それは即ち、車体内部を襲う着弾の衝撃が、貫通よりも上であるという異常な事実を示している。
それを可能にしたのは、解法の崩による存在そのものの破壊。
甘粕のイメージした存在そのものを揺さぶり破壊する、夢の力だった。
もとより既に敵手との距離は最初の半分以下にまで縮まっている。既に虎と豹にとっては夢などなくとも攻撃が届く範囲内だ。よってここでの咒法は本当に補助程度、軽い誘導程度だ。この範囲内であれば、それほど高い資質を持たない小梅にもこの程度の芸当ならば可能である。
あとは言うまでもないだろう。赤星小梅もまた、逸見エリカと全く同じだ。
「本当に、すごい力です」
既に敵車輌は数えるほどだ。このまま順当にいけば、私たちは間違いなくこの場での戦いには勝利する。
何の工夫もなく、ただの力押しで。
思い一つ、気合一つでいくらでも戦況をひっくり返せる。小が大を圧倒し、蹂躙する。
まさしく夢のような力だとつくづく思う。なんて便利で、なんて素晴らしくて――

「なんて、つまらない」

心底うんざりだと、赤星小梅は吐き捨てていた。

だってそこに、私たちがこれまで培ってきた常識やセオリーは通用しない。

偉大なる先達が築き上げてきた戦いの戦術や工夫などが、知らぬ存ぜぬとばかりに踏み倒される。

それが、どうしようもなく悔しくて仕方がないのだ。

勇気を見せろと、彼はそう言った。

彼にとっては戦車も、あのカールですらもそれを引き出すための道具に過ぎないのだろう。ゆえに、様々な制約や限界を無視してその道具を使い倒す。

欠点など要らぬ、そんなものにかかずらっていては大切なものを見ることが出来ん、とでも言わんばかりに。

「結局、弱いところを見ようともしていないだけじゃないですか」

それはきっと、そのまま彼の人間に対する見方と共通する。彼が好きなのは、人間が示す素晴らしい勇気（ヒカリ）のみ。その他諸々の弱い部分、醜い部分など目に入ってすらいないのだろう。

「私たちは違う。どんな戦車にも、どんな人間にも欠点があって。それを認めて初めて真に向き合うと言うんじゃないんですか。それを無視して、一体何が見えるというんで

すか」

私たちにとって戦車は単なる道具なんかじゃない。共に戦い、苦楽を共にしてきた相棒だ。

当然、車輌ごとの欠点だってたくさん知っている。

例えば、パンターはどうしても側面装甲が薄いとか。

ティーガーは重さゆえにサスペンションやトランスミッションへの負担が大きくて、整備が大変とか。

マウスに至ってはそもそも重すぎて問題しかないとか。

けれど、知っているからこそ問題に対応できるのだ。そしてそれは、人間相手でも同じことだ。

格好いい部分、素晴らしい部分だけを見ていてもその人の人となりは分からない。

駄目なところを十個くらいはすぐに言えなければ、本当の意味で友達だなんて言えないだろう。

「だから、私たちはこんな夢なんか要りません。そうでしょう、みほさん」

最後の一輌となったＩＳ―２を撃破しながら、疲労に震えながらしかしはっきりと、小梅はそう呟いていた。

「うん。そうだよね、二人とも」

夢のような光景を目の当たりにしながら、西住みほは頷いた。胸中に苦難を突破した安堵や喜びはなく、あるのはただの虚無感。

こちら側の損害は五両。しかし乗員はすぐに脱出して無事なうえ、損失した車輌は新たにまほが創形することで補充される。

よって実質的には損害はゼロと言って良いだろう。それでいて三十両の敵戦車を全滅させている。

この場における戦いは勝利に終わったが、しかしみほの心にそれを喜ぶ気持ちは微塵も存在しなかった。

まず一つ、この状況を作り出した元凶が依然健在であることがその理由。

カールの砲撃が一時止んでいたのは、おそらく彼が見物に回ったからだろう。既にカールとの距離は２０００を切っている。ここからはいよいよ、あれと直接対決しなければならないのだから。

加えて、自分も含めいよいよ疲労の色が濃くなっている。

思い一つで奇跡を為せる夢の世界では、逆にいえば迷いや揺らぎが命取りだ。精神的な疲労はそれに直結するため、ここからは先ほどまでのように万事うまく事が運ぶ保証はない。

そして、何よりも。

仲間と一丸となっていたとしても。例えそれで勝利できたとしても。

「――面白くない」

端的に言って、何の意味も感じられない。逸見エリカや赤星小梅が抱いた思いは、そのままこの場の少女たち全員に共通するものだった。

『なあ、みんな』

みほの独白を聞いてか否か、姉であるまほから通信が入る。

『これが終わったら、どこかと練習試合を組もう。今度はちゃんとした、戦車道をやりたい。――みんな一緒にだ』

この鉄火場に不釣り合いな優しい声だった。きっとお姉ちゃんは、みんなの考えてる事なんかお見通しなんだ。

『だから、必ずここから出よう。あの馬鹿に説教してやろうじゃないか。余計なお世話だ、とな』

私たちが本当に好きな戦車道をやるために。

それを理解していないあの人に、私たちの思いをぶつけてやろうと。
そんなまほの言葉に、誰もが限界を超えて奮い立つ。
まだ、やれる。
「――みんな」
だから私も、お姉ちゃんの後に続かなければならない。
だって私は、副隊長だから。
「これが最後です。目標、カール自走臼砲……いえ、それを操っているあの人。誰でもいい、あの人に正面からお姉ちゃんが言った通りに私たちの思いをぶつけましょう！」
いつもよりもずっと漠然としていて、けれど明瞭な作戦指示だった。それでも、返ってくる返事はどれもこれもが力強く、優しいもの。
それが誇らしくて、私は人知れず笑っていた。
喜ばしいと思っているのは、今ではなく未来を見たから。魔王の試練を一つ乗り越えたからなどでは決してない。
これからも、こんなにも素敵な仲間たちと一緒に戦車道が出来る。
それが、何よりも嬉しくて仕方がないのだ。
だから、甘粕さん。必ずこの思いを、貴方にぶつけてみせる。
「それでは最後の作戦……がみがみ作戦を開始します！」

「……」

沈黙。そしてすぐ後に起こる、暖かな笑い。

『ぷっ。あはははは！ちょっとみほ、いくらなんでも迫力なさすぎよ！』

『がみがみ……確かにお説教と言えばがみがみですよね。ええ、ぴったりな名前だと思いますよ』

「え、エリカちゃん！赤星さんまで……」

『いいじゃないか、それも含めてみほらしいよ。こらおまえたち、あまり笑うな。まだ戦いは終わっていないんだからな』

『分かってますよ隊長。ええ、本当にみほよね』

『はい。とても素敵な作戦です』

思い思いにかけられる言葉の数々。そこに揶揄や嘲笑は一切含まれていない。

『行きましょうみほ。思う存分、聞き分けの無い馬鹿に説教してやるために』

『もう一度、みんなで戦車道をやるために』

『どんな苦難だろうと、私たちならば絶対に越えられる。黒森峰に、私たちの学校に、みんなで帰るんだ』

みんな、私を信じてくれる。

私も、みんなを信じている。

だから私は、ありったけの声で叫ぶのだ。
「はい！それではみなさん、行きましょう！戦車前進（パンツァーフォー）ッッ！」
――ここに、決戦の幕が上がる。
思いは一つ。確かな信念と勇気を抱いて、二十の鋼鉄の獣が進撃を開始する。
迎え撃つは、魔王が従える魔の狼。
その砲身部分に立ち、手を高く掲げながら魔王は笑う。
その気概、その勇気、その煌めき。実に素晴らしい。至高の輝（ヒカリ）きだよ。
ならばこそ、さあ。
「来るがいい、誉れ高き勇者たちよ。俺におまえたちを愛させてくれ」

「来る――！」
魔狼の砲身が軋みをあげて旋回する。物理的な限界なぞ知ったことかと、本来有り得ぬ角度に照準が合わさっていた。無論、みほとてそんなことには気づいている。もとより常識外の世界なのだ。一般的に言われている性能（スペック）など、この場においては飾りでしかない。その程度はやると思っていたから、対応出来た。
即ち、最高のタイミングでの進路転換。一糸乱れぬ統率で、獣の群れは見事フェンリ

ルの照準から逃れ出でていた。

――足らんよ。まだ終わってはおらん。

「……駄目、撃たれる！」

だが、それでも。覚悟していてなお、続く光景は西住みほにとって信じがたいものであった。しかしだからといって、驚愕の言葉は上げてはいけない。

鋼の意志でそれを抑えつけ、簡潔に状況を伝える言葉を無線に流す。彼方では今もなお、理外の夢が駆動している。

砲身が曲がる。逃さぬと言わんばかりに、射角の外へと逃れ出た少女たちを追って戯画的に曲がりくねった砲身は、ついにみほの指揮をも上回って地を駆ける鋼の獣たちを捉えていた。

そして迸る、炎の轟哮。

曲がった砲身では暴発するとか、そもそも砲身が曲がるはずがないとか、そんな真っ当な理屈は通用しない。

加え今回の砲撃は、先ほどまでのカールの砲撃とは違い追尾してくる。

どこまでも獲物を追い続ける猟犬の如く、奇怪な軌道を描いて砲弾が飛来する。真っ当な常識が通用しないのは明らかで、例え山を盾にしようとこの砲弾はすり抜けてくるだろう。

だが、その程度だ。

こちらにもそれに対抗する手段（ユメ）がある。

「効かないのよ！この程度なんでもないわ！」

逸見エリカが、そして他にも楯法に長ける者たちが、ありったけの防御を展開する。その結果、轟音とともに着弾した砲弾は、しかし彼女たちに何の痛痒も与えていなかった。濛々と立ち上る煙と、衝撃によって生じたクレーターがその威力のほどを物語っているが、その中をなおも二十両の戦車たちが疾走する。

この程度で、私たちの思いは砕けない。

しかしそれも結局はジリ貧だ。先ほど高らかに喝破したエリカとて、桁外れの衝撃からくる精神へのダメージは多大なものだ。何発も続けて受けていれば、やがて限界が訪れるだろう。

直撃を赤星小梅らの解法によって避けてすらこれなのだ。まともに受ければ、問答無用で文字通り吹き飛ばされる。

つまり、みほたちに求められるのは電撃戦。

防御が限界を迎える前に、敵兵器を破壊することこそ、彼女たちが勝利する唯一の道筋だった。

だが……そう、だが。

『畜生、ふざけやがって！いくらなんでも硬すぎるだろ！』

既に何発も砲弾を撃ち込んでいるにもかかわらず、カールは依然健在。ただ純粋に、夢の密度が桁外れだった。

やっていること自体はエリカと変わらず、楯法による硬化である。――その強度が並外れて強いという点を除けばだが。

彼我距離はとうとう１０００を切った。この距離で、しかも場合によっては解法の崩を乗せた砲弾を喰らいながら全くの無傷。

足元に等しい至近距離を走り回る戦車を撃つために、自爆しかねない角度で砲撃を行いながら、やはり無傷。

出鱈目という以外にないだろう。もはや単純な破壊力で考えれば、この場においてこの怪物を倒せる存在など、怪物自身を含めても存在しなかった。

「まともなやり方じゃ、どうやっても倒せない――」

ならばどうする。考えろ、考えろ、手段がないとしても作り出せ。

「――」

その思考は間違いなく必要で、正しいものだったが。

『みほ！逃げろ！』

同時に、致命的な隙を生んでしまう。ほんの一瞬、本当に刹那ではあるが、みほは戦

場から目を離してしまった。
無線から響いてくる姉の悲痛な声に我に返ってみれば、曲がりくねったカールの砲口が、真っ直ぐこちらを向いている。
操縦手のスコープ越しでは、あまりに巨大なカールの動きを至近距離で把握することはほとんど不可能である。そのため鷹の目を持つみほが逐一指示を送り、これまで彼女たちは奇跡のような回避行動を実現させていたのだ。
よって、どうしても初動が遅れた。
最早、何もかもが手遅れ。
ここに西住みほの命運は尽きた。
――そう、何も起こらなければだが。
『西住イ!』
文字通り飛んできた一両のティーガーに弾かれる形で、みほたちの車輌は間一髪で直撃する位置から弾きだされていた。
無論それは、言うまでもなくみほたちの代わりに突っ込んできた車輌が直撃を被るという意味に他ならず。
「く、あぁっ……!?あ、あ、う……」
エリカたちの楯法があってなお、戦車がまるで玩具のごとく爆風で吹き飛ばされる。

戦車道で使用される車輌として創形していなければ果たして無事であるかも怪しい被害だが、幸いにも乗員全員が無事なようでなんとか横転した車輌から脱出する。

そして、みほたちが目にした光景は凄惨なものであった。

巨大なクレーターの中に転がっている、もとは戦車であったらしき鉄くずの数々。

所々が赤く染まったそれは、紛れもなく先ほど自分たちを助けようとやってきた三年生たちのものだ。

何って？そんなこと、言うまでもなく分かりきっていて――

「う、うあ、ああああああああああああああああああ！」

文字通り、生きてはいないだろう。これは紛れもなく夢だが、ここで死ねばどうなるかは分からない。

夢だから平気だろう、と楽観するにはこの夢はあまりにも現実味を帯びていた。

助けてくれたのは、先日まで自分を虐めていて、そして先ほどやっと分かり合えた三年生たちの車輌だ。まだまだ話していないことはあるのに、もう会えないかもしれない。

『みほ！しっかりしろ！』

「――」

絶望と後悔に染まる意識を引き戻したのは、再び聞こえてきた姉の声。

そうだ。泣いていても奇跡は起きない。

ここは、自分の力で未来を切り開かねばならない楽園(じごく)なのだ。

ならばどうすればいい？先の僅かな空白の間に、部隊は一気に統率を失ってしまっている。そしてそんな面々を狙ってカールが軋みながら蠢いている。それが見えているのに、最早指示を飛ばしていては間に合わない。

――また、さっきの先輩みたいに犠牲を出すのか？

――どうやっても、あの怪物を倒せないのか？

「――嫌だ」

仲間を見捨てないと誓った。みんなで一緒に戦って、一緒に勝つ。それこそが私の本当にやりたい戦車道の形なのだ。

「――」

その時、天啓のごとく降りてきた閃き。

いや、理屈としては至極当然のものだった。どれだけ威力を高めようと、例え解法の崩で壊そうとしても、敵手の夢はこちらをはるかに上回る強度だ。一人一人の力では、どうやっても絶対に破壊は不可能であると示された。

ならば話は簡単だろう。これまでばらばらに行われていた攻撃を、同時に叩き込めばいい。

理屈としては解法の崩の足し算だ。現状における理論上の最大火力とは、すなわちそれだ。

だが、それは文字通り理論上の計算である。

なぜなら実際に砲を放つ人間も、そしてそこに夢を描く人間も別人だからだ。例え完璧に指示をしたとしても、僅かなズレが生じてしまうのは仕方がない。そしてそのズレが、この夢においてはおそらく致命傷になる。たとえ数瞬でもタイミングが違えば威力は半減してしまう。それでは彼の夢を崩せない。

即ちこの場において求められるのは、全てのタイミングを完全に合わせて夢を叩き込むこと。

「少しでも、ほんの少しでも穴を開けれるならきっと倒せる。だけど……」

そんなことが出来るのか。

『……みほ。私はな、本当に幸せだよ』

「え？」

その時聞こえてきた姉の優しい声に、思わずみほは呆けた声を上げていた。

『状況こそ最悪だがな、それでもこうしておまえと、そして仲間と一緒に戦っていると実感できたのはこれが初めてだ。そしておまえは、ここまでずっと最高の指揮をしてくれた』

『――私はおまえが誇らしいよ。そしてそれは、きっと私だけの思いじゃない。ここにいる誰もが、おまえのことを最高の仲間だと思っている』

その言葉に、みほは刹那忘我した。

『――私は、私たちはおまえを信じている。だからおまえも私たちを信じてくれ。……言うまでもなかったか？』

最後の言葉は、お姉ちゃんなりの激励だった。そうだ、私たちは仲間なんだ。

辛いことも、苦しいこともあったけれど、それを一緒に乗り越えてきた。そしてこれからも、みんなで乗り越えることが出来ると信じている。

ならば、私が指揮官としてやらなければならないことは明白だ。

「――」

自分の夢を思い描け。他の一切を忘却しろ。私はそれを知っている。

甘粕正彦はどこまでも普遍的、かつ平等に試練を齎す魔王だ。

よって、先ほど逸見エリカや赤星小梅に夢界の基本を流し込んだのと同様に、己に繋げた黒森峰の面々全員にそれを行っている。

今や、この場の全員が詠の段へと急速に上達していた。これは偏に、試練という極限の状況下で磨かれ続けた結果だろう。

ならば――そう、ならば。

この土壇場で、西住みほが更なる深奥の力を手にしたことも、必然と言って良いだろう。

「破段（はだん）・顕象――!!」

それは即ち、みんなで一緒に戦い、勝つという願いの結晶。

自分たちは一人なんかじゃない。どこまでも一緒に、力を合わせて戦う仲間だ。

だから、絶対に負けたりなんかしない。

ここに覚醒した新たなる破段。その力は、文字通り西住みほの夢の表れに他ならない。

「こっちを狙ってる!?だったら――」

「私が守るから――」

「私が消す！」

「射角外だ！なんでもいい、攻撃を加えろ！奴の気を逸らしてやれ！」

即ち、仲間との間で成立する意識の完全同調。

みほの思考を、まほの思考を、逸見エリカの思考を、赤星小梅の思考を、一切のタイムラグなしに全員が共有する。自分の思考は刹那の遅れもなく相手に伝わり、完全な連携を可能とする。

無論、共有される思考に区別はない。考えていることは全て筒抜けで、色々な気持ち

も全部仲間に伝わってしまう。
だが、それが一体なんだという？
「どんな人間にも欠点があって、それを認めて初めて向き合う、か。うん、そうだよね赤星さん。私もそう思う」
そんなことは全部承知だ。悪いところも全部ひっくるめて仲間なのだから、いまさらそんなもので揺らがない。
突然の変化に驚愕もせず、冷静に状況に対処し始めた仲間の姿が誇らしい。
自分にはこんなにも素晴らしい仲間がいるのだと、何回目かも分からないそんな歓喜が全身を駆け巡っている。
「みんな――」
今や言葉など不要。全員がみほの思考を共有している以上、為すべきことは既に理解している。先ほど一発撃ったばかりのカールは、しかしそれゆえに次弾発射までにタイムラグが発生する。
「約十一秒。その間にケリをつける！」
それは呆れるくらいに短くて、普通ならば絶対にその隙を文字通り完璧に突くことなど不可能だろう。
だが、今の私たちならそれが出来る。

「お願い――」

言って、みほは文字通り飛翔した。解法はそこまで得手としているわけではないけれど、それでも十一秒もあれば目標の場所までは飛んでいける。

そして――

「今だ」

それは、誰の声だったのだろうか。

刹那の狂いもなく、全く同時に着弾するよう綿密に計算された砲弾が、十八両の戦車から放たれていた。

ありったけの解法の崩と楯法の堅を乗せた流星が、文字通り全く同時に着弾する。

そして、ついに鉄壁の防御に穴が開く。今この一瞬のみ、カールは文字通りただの兵器だ。

「みほ！」

「みほさん！」

「決めなさい！」

その一瞬。今のみほが逃すことなど有り得ない。

空中で瞬時に創形されたのは、自分たちが所有する超重戦車（マウス）。

欠点だらけで、大戦中結局まともに使われたことなどない欠陥兵器。

だけど、それでも優れた部分もちゃんとあって、それを活かせるかどうかは使い方次第なのだ。

「いっ、けええええええええっ！」

当然中には誰も乗っていないが、その状態でも砲撃が可能なのが夢の世界。

轟音と共に放たれた５５口径１２８ｍｍ徹甲弾が、唸りを上げてこちらを向き始めていたカールの砲身に吸い込まれる。

みほのみならず、この場にいる全員の解法の崩を乗せたそれが車輌内部で致命的な破壊を齎し、砲身が崩れ落ちる。そしてそれだけでは終わらない。

先ほどみほがマウスを創形したのは、文字通りカールの真上――つまり空中だ。当然それは、重力に従い落ちてくる。

そう、落ちてくるのだ。重量１８８ｔの怪物が、文字通り破滅的な破壊となって降ってくる。

「ぶっ潰れろォッ！」

致命の一撃はここに為る。

文字通り降ってきた超重のネズミに押しつぶされ、ついに魔の狼は活動を停止した。

「ああ……」

その様子を見ながら、甘粕正彦は静かな感激を覚えていた。
フェンリルの巨体ゆえ甘粕自身が直接潰されることこそなかったが、それでも爆発と降り注ぐ金属片にその身を曝していたのだ。全身に火傷や裂傷、その他様々な傷を負い、血を流し、ぼろぼろの体でありながらそれを癒すことすら忘れている。
素晴らしい。なんと眩しい。彼女たちは見事、俺の試練を乗り越えた。
ここに、彼女たちの勇気は示された。
ならば、最早夢は終わり。
「くはっ――」
そう、終わりの筈だが、しかし――
「くは、ははは、はははははははははははははははは――！ふっ、ははは、くはははははははははははははははははははははははははは――――！」
――かつて、甘粕正彦のことを普遍的無意識（ア・ラ・ヤ）は馬鹿と評した。
曰く、一桁の足し算よりも分かりやすい理屈が通じない、と。
愛も、勇気も、傲慢さも我がまま具合も。全ての桁が人類の枠から外れている、突き抜けた大馬鹿者。
そう、久しぶりに見た輝かしい勇気（ヒカリ）を前にして、彼はまたしても、本当にまたしても興が乗ってやりすぎてしまったのである。

「――そう、まだだッ！」

もっとこの勇気を見ていたい。もっともっと、この輝きを愛していたい。これ以上は危険だとか、意味がないとか、そんな真っ当な理屈など一切合切放り投げて。

そして次瞬、世界が切り替わった。

「え……？」

「なに、これ……」

目に見える風景に、別段これといった変化はない。

ただ、西住みほも、西住まほも、他の誰もがそれに気づいていた。

まず起こった異変は、先ほどフェンリルの砲撃を受けて死亡したはずの三年生の面々が変わらぬ姿で復活していることだった。

そして、これまでの戦闘の余波で発生した破壊痕が、そっくりそのまま消えている。そう、破壊されたフェンリルも、甘粕の姿も、どこにもなかった。

まるで、場所自体は変わっていないのに何らかの位相が違っているかのように。

――甘粕が教えていないので当然だが、西住みほたちは夢の世界については全くの無知だ。教わったのはそこでの力の存在だけで、それ以外は何も知らない。

よって、夢の世界――夢界（カナン）が全部で八つの階層に分かれていることも。今まで彼女たちがいたのが第三層（エリコ）であることも。

今まさに、全員が第四層（ギルガル）へと入ったことも。全て知らないし、分からないのだ。

「馬鹿な……」

混乱の渦中で呟かれたまほの言葉に、誰もが彼女を見やる。その表情は何か信じられないものを見ているかのように真っ青だ。

一体何が、とみほはつられて視線の先を見る。

「……え？」

そして、そこにあったそれを目にして、今度こそみほの、いや、この場の誰もが呆気にとられた。

視線の先にあった光景は、最早現実感がなさ過ぎてどう反応すれば良いか分からない。

まず視界に入ってきたのは平原。それはこれまで戦っていた決勝の舞台にはなかった、地の果てまで広がる広大さ。

加え、空が血のような赤一色に染まっているのだからその異常さは極め付けと言う他無いだろう。

だが、そんなものなど気にしていられない。

何故ならその平原に、否が応でも目を引く巨大な鋼鉄が君臨していたのだから。

〝８０ｃｍ列車砲〟という列車砲がある。

第二次大戦中ナチス・ドイツが実用化した世界最大の列車砲であり、軍事や歴史を少し齧っていれば名前を聞く程度の経験はしたことがあるのではないだろうか。
――重量、１３００ｔ。
――砲身長含めた全長、約４７ｍ。
名を「グスタフ」および「ドーラ」と言うそれらを知る人間は多い。
では、こんな話を聞いたことはあるだろうか。
――この巨大な列車砲を、自走可能にする構想があった。
即ち、８０ｃｍ列車砲を搭載した自走プラットフォームの計画の存在である。
超重戦車すら上回る、超超重戦車、あるいは自走砲として構想されたそれは、結局開発されることなく終わっている。
だが、構想としては確実に存在したのだ。
そして存在したならば、それを引きずりだせるのが人類の普遍的無意識たるアラヤに触れることのできる者――すなわち、盧生と呼ばれる存在である。
「おまえたちの輝きを俺に見せろォ――モンスターッッ！」
Ｐ１５００　モンスター。
またの名を陸上巡洋艦（ラントクロイツァー）。
人類の歴史から引きずり出された幻想の兵器が、今ここに創形されていた。

第11話「魔王」

「冗談、よね……」

それは誰の言葉だったのか。あまりにも非常識で非現実の不条理に、それ以外に言うべき言葉が見当たらない。

みほの破段によって、現在黒森峰の面々の思考は完全な同調状態にある。それは指揮官であるみほの思考や認識を全員が即座に共有し、またみほも各々の思考や認識を全て把握するという、いわゆる思考伝達能力（テレパシー）の極点とも言うべき力だったが、その完璧な同調にはある欠点が存在する。

それは即ち、隠し事が出来ないこと。

通常ならば何も問題はない。先に述べたが、彼女たちは既に一心同体とも言うべき強い絆で結ばれている。寧ろそれを織り込み済みで仲間として互いに尊重しあうからこそ、この夢は実現しているのだ。

だが、今のこの状況ではそれが完全な裏目に回ってしまう。

即ち、誰かが抱いた恐怖がそっくりそのまま全員に伝播するのだ。

一人二人程度ならば容易く乗り越えられるだろう。それがどんな苦難であろうと、心

折れず諦めない者がいる限り、彼女たちは己を奮い立たせ、立ち向かうことが出来ただろう。

だが、全員が等しく恐怖し、絶望したならばどうなるか。

司令塔であるみほ自身が恐怖してしまった場合、どうなるか。

マイナスの感情というのは抑制することが困難だ。なぜならその根源は理性ではなく本能だからである。

死ぬのが怖い。痛いのは嫌だ。だからそんなのは御免被る、と言うように。

よって、全員が完全に意識を同調させたこの状況では、恐怖や絶望が爆発的に増殖する。

今ここに少女たちはついに足を止めてしまった。それは文字通りの意味であり、同時に精神的な気概の面においても同様である。

――この試練（あくむ）に終わりはない。

自分たちを襲う無限の災禍、その巨大さに気付いてしまった。

その隙を、魔王は決して見逃さない。

「あ――」

彼方で放たれる炎の轟砲。かつて実戦投入された際、都市区画を文字通り木端微塵に粉砕した４．８ｔ榴爆弾が降ってくる。

それも、一発では終わらない。まだ着弾もしていないというのに、既に次弾が発射された音がする。

「ふざけるな――」

なんだこれは。本当に意味が分からない。何故自分たちがこんな目に遭わねばならないのだ？

私たちはまだ死にたくない。さっき三年生の先輩方が生き返っていたが、だからといって一回でも死ぬのなんか真っ平御免なのだ。

だから、みんな。

私（逸見エリカ）が、みんなを守るから。

みんなも、私を助けて。

「お願い――」

無論、その思いは即座に全員が共有する。

この絶望の中、それでも諦めていない者がいる。

恐怖に震えながらも、立ち上がろうとする者がいる。

ならばいいだろう。私たちも力を貸そう。そのためならどんな苦しいことでも耐えてみせると信じている。

――よってここに、双方向の合意が為される。

夢界における邯鄲の夢とは、即ち術者自身のイメージである。よってその夢の限界もまた、術者自身の精神力や想いの強さに完全に依存している。

つまり夢界において強者となり得るのは、基本的に精神力の強い者。自分の夢を強く想うものということになる。

ではここで、その基本原則を逆に考えてみよう。

己だけでは実現しない夢があったとして、その場合どうするだろうか。

答えは単純。相手に協力してもらうのだ。

相手のイメージや想いの力を利用あるいは援用し、己が望む理想（ユメ）を現出させるその技術こそが〝協力強制〟。

五常楽の第四段階――急ノ段を発動するための最大にして絶対の条件。

逸見エリカは、仲間を守り、そして共に戦うための助力を求めた。

彼女の仲間は、それに合意した。

ならばこそ、彼女の強く美しい願いが、今ここに新たな力を現出せしめる。

「急段・顕象――！」

それはまさしく奇跡。逸見エリカは、本来発動すら出来ない筈の急段をこの土壇場で覚醒させていた。

急ノ段を使用するための条件は二つ。

一つは先に挙げた協力強制。より正確に言えば、自分の夢の更なる進化である。
そして、残る一つは夢の熟練。即ち、五法のうち三つ以上の夢の同時展開である。
エリカの場合、この〝三つ以上の夢の同時展開〟はこれまで出来ていなかった。にも関わらず彼女が急段を発動できたのには理由がある。
まず、協力強制に巻き込んだ人間の数が多いこと。自分を除いて合計九十九人の願いを利用し、百人分の力を手にしたことがその一つ。
そしてもう一つが、力の根源たる盧生――甘粕正彦自身から流れてくる力と知識。協力強制の対象からこそ外れているが、彼のバックアップを受けている状況ならば、彼の眷属として夢に入ったエリカの力もまた上昇する。
さらに、何よりも大きな理由が別にある。
それは即ち、気合と根性。
やらなければみんな死ぬ。それを為すのに最も向いているのは自分。
ならばやる。出来る。そんな思いの強さが、この最悪の状況下での覚醒を強烈に後押ししていた。
理屈が通じないし道理が通らない究極の根性論だが、それが力となるのが夢の世界。
ならば、先の言葉を訂正しなければならないだろう。逸見エリカの覚醒は、断じて奇跡などではない。

立ち向かうという勇気があったからこそ為せた、必然の結果である。

よって、魔王の砲撃は無為と化す。都合三発の榴弾の直撃を受けながら、十九両の戦車とその中にいる全員が無傷。

西住みほに至っては生身で榴弾の着弾による爆風に曝されたにも関わらずその身に擦り傷一つ負っていないのだから、まさに圧倒的な防御力と言う他にないだろう。

逸見エリカの急段――彼女が求めた夢とは即ちこの防御。

その効果は「仲間を守る守護の光を放つ」こと。

単純な能力だが、その防御性能は驚異的と言って良いだろう。

この夢で最も重要なのは、エリカ自身が己も仲間の一員であると認識していることである。

つまり、まずエリカが「仲間だからみんなを守らせてほしい」と己の願いを提示する。

次に、エリカが守る対象と決めた仲間から「勿論。ただし、貴女も仲間であるから生きてほしい」と合意を受ける。

その結果、エリカが最初に放った守護の光の防御能力を一とすれば、条件付けに関わった仲間の数に応じてその力を倍加させ――今回の場合、百の力で他の仲間を守る。

次に、百の力で守られている側が術者であるエリカに生きてほしいと願うことで、その力をそっくりそのままエリカに転送するのだ。結果、エリカは百×百――つまり一万

の力で守られる。

そして最後に、エリカ自身が仲間を大切に思っているゆえに、「己だけが守られているのは納得できない」と願うのだ。結果、この段階でエリカを守っているのと全く同程度の防御能力で全ての仲間たちが守られる。

最終的な状況は、エリカ自身の防御能力を協力強制に巻き込んだ人数の二乗倍に強化した上で、全員に等しく展開するというものになる。

今回の場合、エリカ自身を含めて夢の完成に協力した仲間は丁度百人なので、今全員を守っている守護の光は、急段発動前の一万倍の強度に高められている。

無論、弱点はある。あくまでもベースになっているのは楯法の堅による防御のため、物理攻撃に対しては無類の防御能力を誇る一方で精神攻撃などの搦め手にはあまり効果がないこと。

協力強制に巻き込んだ人数が少なければ、大した能力の向上が期待できないことなどがそれだ。

しかし一方で、強いところにはとことん強い。対物理に特化した防御能力ゆえ、彼女らを物理的に傷つけることは非常に困難である。加え、楯法がベースになっている以上、回復能力としても有効だ。

よって、もはやどんな兵器が出てこようと恐れずに足らない。今ここに、勇気ある少

女の夢が魔王の試練を真っ向から押し返し――

「――急段・顕象――」

そして、その勇気こそが審判の魔王を更なる高みへと至らしめる死の階段。

甘粕が齎す理不尽を前に恐怖しながらも、それを乗り越えるために奮起し立ち向かうこと。

それは即ち、甘粕正彦の語る人間賛歌――脅威の中でこそ人間は輝くことができる、という性悪説にして人間愛の思想に賛同していることに他ならない。

よって、ここに絶望の協力強制が成立する。

「斯く在れかし――聖四文字!」

爆発的に膨れ上がる夢の波動。皮肉にも過去最高の純度で勇気を示したがゆえに、その力をも利用して甘粕の力が天井知らずに増大した。

「あ、ぐぅっ……!?そんな……」

再び放たれたモンスターの砲撃は、しかし今度は先ほどまでとは比較にならない破滅的な暴力となって少女たちを襲う。

砲弾に込められた夢の密度が、桁外れに増大している。

たった一発。そこに込められた尋常ならざる解法の崩。それを爆発的に拡散させる咒法の散。

そう。たった一発の砲撃で、逸見エリカが紡いだ夢は容易に踏み越えられた。
それでも文字通り粉砕された車輌が存在しないのは、紛れもなくエリカの勇気ゆえだ。先の一瞬、エリカの急段による防御能力は更に数倍にまで跳ね上がったのだから。
思い一つで不可能すらも可能になる。成程、勇気を奮い立たせて仲間を守ったエリカの行動は素晴らしく、誇って然るべきものだろう。
だが、そんな勇気ですらも魔王にとっては褒め称えるべきものだ。逸見エリカが、あるいは他の誰かがこの状況でどれほど勇気を振り絞ろうと、どれほど立ち上がろうと。
その健気で美しい輝き（ヒカリ）を食らい、甘粕正彦は無限に強大化を繰り返す。
ゆえに、聖四文字（いまーデゥス）。
裁きの神。試しの神。愛する子羊たちの正道を呼び覚ますためなら大殺戮でさえ厭わない、虐殺の絶対正義。
常に試練を課すために、それは必ず唯一にして絶対の存在でなければならない。例え試練の中でどれだけの勇気を示そうが、絶対に越えられない不可侵の存在。それこそが神という存在に他ならない。
よって断言しよう。最早少女たちに勝ち目は絶無。
絶望を告げる第五射が、ここに裁きの雷火となって降り注いだ。

「やれやれ……」

その様子を、それは見ていた。呆れるような文言とは違い、その言葉に大きな感情の波はない。ただ、己が甘粕であるにも関わらず、己の声が聞こえていないのは単に興が乗って周りが見えていないのだと、現実を機械的に処理している。

「おまえはこの世界における最初の盧生だ。加えて異なる世界の記憶を持つ、史上初の平行世界からの来訪者。私としても、おまえは実に興味深い男なのだがね。その選択と決断はおまえにとって最も困難なものであり、だからこそ私はこれまでおまえを排斥しなかった。その決断を尊重してね」

声の主とは、即ち阿頼耶。この世界において甘粕が繋がる、この世界の普遍的無意識そのものだ。

「しかし、その禁は破られた。おまえはあの日——西住まほと出会ったその時に、再び無意識に繋がった。それは即ち、おまえが再び魔王となることを意味している。加えこちらの世界に夢へ入る技術は無いのだから、おまえを放置すればやがて君の楽園が実現

するか……あるいは、おまえの世界と同じ結末を迎えるだけだろう。つまり、おまえが阿頼耶識を超え、そしてその手で人類は残らず根絶される」

甘粕とて普遍的無意識に繋がる人類種であることに変わりはない。したがって、アラヤは彼の記憶を隅から隅まで全て知っている。

当然、彼がかつてやらかした事件の数々も、全て知っているのだ。

「その尋常ならざる意志力には敬服している。だが、それとこれとは話が別ということだよ。所謂事前策というやつだ」

普遍無意識の理解を超え、その枠から飛び出すような男は端的に言えば異物だ。放っておけば延焼を起こすと分かっている火種を放置する人間がいないように、人類の総意はこの異物を排除することを決定した。

よってここに、アラヤは甘粕の記憶から最もそれに相応しい人間を選択した。

甘粕自身が持つ彼に関するあらゆる情報――それら全てを統合して枠を作る。

加え、甘粕がもともといた世界の座標を逆算し、あらゆる手段を用いて干渉する。

「柊四四八――」

そして、見事それは成功する。今ついに、アラヤははるか遠い世界の英雄に接触した。

「おまえの力を貸してほしい。魔王がこちらで暴れている」

要件のみを簡潔に伝えると、男は了承の返事を返してくる。

そして――

「久しぶりだな甘粕。相も変わらず馬鹿をやっているようで、俺は頭が痛いぞ」

放たれたデウスの審判を真っ向から弾き返し、みほたちの眼前に一人の青年が立っている。強靭な意志の光を輝かせながら、微塵の恐怖も抱かずに魔王に正面から相対している。

その姿の、何と眩しく雄々しいことだろう。

勇者、英雄、斯くあるべし。これぞ人の正道であると、その背中を目にして少女たちは思わず憧憬の念を覚えた。

甘粕とは全く違う。彼がその背中で語るのは強く優しい、仁義八行の人類愛。

魔王の試練から世界を守る救世主（イエホーシュア）として、今ここに第二（終）の盧生（四八四）が降り立った。

第１２話　「不朽の夢」

「これはこれは。誰かと思えば奇遇だな」

予想外の乱入者を前に、しかし甘粕正彦は動じない。むしろ旧友に久しぶりに出会ったの如く、目の前の男との再会を心の底から喜んでいる。

紅蓮の炎と黒煙を切り裂き君臨する鋼鉄の巨砲を踏みしながら、しかし彼が示すのは紛れもない親愛の情だ。

「ああ、相も変わらずおまえは己の真を貫いているようで何よりだよ。なあそうだろう、柊四四八。先の一撃をおまえが凌いだ後から、おまえの考えていることが分からんのだから。これはつまり、そういうことなのだろう？」

彼らは共に阿頼耶識を理解し、悟りを開くに至った盧生である。よって、彼らは本来無意識下で完全な意思疎通を為してしまう。同じものを見ているのだから、その〝窓〟を通して相手の心までも見てしまう。

ならばこそ、甘粕正彦（盧生）が柊四四八（盧生）の思考を読めないという現状は、どちらかが無意識の海に繋がっていないことを意味している。

甘粕（おれ）は有り得ない。なぜなら再び魔王となることを選んだから。当然アラヤに繋がっているし、ゆえにそこからあらゆる夢を引きずり出せる。

　であれば、ああ――

「本当に、先の一瞬だけか」

「そうだ。あのまま放っておけば彼女らは間違いなく消し飛んでいたぞ。俺は確かに夢を捨てたが、流石に切羽詰った状況だったからな。それを以て矛盾と呼ぶならば、それは行き過ぎた放任だ。そんな道は間違っているだろう」

柊四四八（おれ）がこの世界に来てまず見たのは、甘粕によって消し飛ばされようとしている若い芽の数々だった。

　奴の目に適ってしまった、勇気ある少女たち。彼女たちを守るために、俺は咄嗟にこの世界のアラヤと繋がったのだ。

　無論、この世界では俺は盧生ではない。世界が異なれば常識が違い、住まう人々が違うのだから、異物である俺が即座にアラヤに接することは普通は不可能だ。かつてと同じように、そしておそらくはこの世界で甘粕がやったように、再び邯鄲を制覇する必要があっただろう。

　だが、今回だけは例外だ。なぜなら、今回はアラヤのほうから繋がるように要請があったのだから。

ゆえに様々な条件をすっ飛ばしてその力を振るえるわけで、だからこそ甘粕の攻撃を防ぐことが出来た。

その事実は、確かにかつての俺の決断から考えれば矛盾だろう。夢に頼らないと俺は語り、甘粕はそれを認めて消えていったのだから。

だから今も、俺は出来る限りの言葉を尽くしてこの馬鹿を説得する。アラヤとのリンクを切っているせいで本来ならば夢界から即座に消える筈だが、当のアラヤが何かやっているのだろう。今も俺の存在はなんとか消えずに残っていた。

「だから、まず裏切ったのはおまえだろう、甘粕。この様はなんだ？」

「おまえのこれは試練ですらない。なぜなら彼女たちは、とっくに自分の道を示している。しかも、おまえの存在など関係なしにだ。それでもまだ足らんと言うのか。もっと勇気を、さらなる輝きをと、無限の渇望のままに苦難を齎すか」

一瞬でもアラヤに繋がった俺は、事ここに至るまでの仔細を全て把握している。そこで知った、たった今も後ろで見ているであろう少女たちが見せた勇気。

どれも、心の底から素晴らしいと称賛できる輝きだった。

「それを見えぬ知らぬ存ぜぬと、どこまでも一時の情動に惑わされ暴走するなど――恥ずかしいとは思わないのか！……おまえは何も成長していない。他人に勇気を求めるなら、まずは己がそれを示せ！それすら我慢できず、分かりやすく手っ取り早い試練（ユメ）な

どに頼るなど――あの時俺に語った言葉は嘘だったのか!?答えろ、甘粕正彦ッ！」

そう。本当に大切なのは自分の心に嘘をつかないこと。

あの時俺が語った言葉に嘘はなく、だからこそ俺はそれを誇りに思っている。

だから、夢は使わない。

アラヤがいつかと同じようにリンクを切ろうとする俺に驚愕していたが、これは当然のことなんだよ。

夢に頼っている限り、甘粕正彦の勇気は超えられない。

こいつは馬鹿で人の話なんか聞かない奴だから、分かりやすい形で示してやるしかないんだ。

そして、俺の叩き付けるような詰問に対し、甘粕は――

「――否」

小さく、しかし確かにそう答えた。

「否、否だ。……ああ、俺はこういう男なのだよ。だから正直な話をすれば、おまえが今夢を用いて俺の前に立っていれば、俺は喜々として試練を続けただろう」

そうだ。俺はまた我慢できなかった。

つまるところ嫌なものを見たくないという単純な理屈であり、そしてこうするより他に手段を知らない。

どれほど努力しようと、俺が得た悟りの形に変わりはないのだから、結局最後はこうなってしまうのだ。

「だが、おまえの答えは変わっていないと今示された。――成程、何も成長していないと言われても仕方がない醜態だよ」

だが、だからといってあの時俺が得た救済に偽りはない。おまえに対して、おまえの示す仁に対して、俺は間違いなく憧れたのだから。

「俺の思いに嘘はない。ならばこそ、俺もまた前へ進むとしよう。ただ――」

そこで初めて、柊四四八から目線をずらす。

ぼろぼろになりながらも勇気を示した少女たち。ああ、俺はこんなにも強く美しい少女たちを前に、しかし確と彼女たちを信じようとはしなかった。

だから色々と節介を焼いてしまった。

しかしな柊四四八。最後こそ我がことながら忸怩たる思いに堪えないが、しかしそれでも途中までは俺もかなり辛抱したのだぞ。

そしてだからこそ、彼女たちは俺の試練（ユメ）に最後の最後まで嵌らなかった。ああ、それはつまり、何と分かりやすいことで――

「勇気ある少女たちよ。おまえたちの答えを、夢を、俺に聞かせてはくれまいか」

彼女たちは真に人として勇気を示したのだから。俺は最後に、その輝きを見てみたい

と願うのだ。

奇妙な浮遊感の中、私は彼らの声を聞いていた。
いや、正確に言うならば、今目の前で甘粕さんと真っ向向き合い、対峙している男性の背中を見ていた。彼の言葉を聞いていた。
うまく言葉にできないけれど、彼の背中を見ているととても安心できたのだ。
まるで、そう。子供を見守っている父親のようだと、なんとなくそう感じたのだ。
すると、彼らの会話が終わったようだ。甘粕さんの視線がこちらに向き――
「勇気ある少女たちよ。おまえたちの答えを、夢を、俺に聞かせてはくれまいか」
そんな、突拍子もないことを言ってきた。
「……」
正直なところ、状況はよく分からない。いきなり現れたこの男性は誰なのかとか、今まで散々止むことのなかった暴威が今どうして止んでいるのかとか、他にも色々分から

ないことはたくさんあって。

「……すみません。うちの馬鹿が迷惑をかけてしまった」

こちらに振り返った男性が、丁寧な謝罪の言葉と共に頭を下げた。だけど私たちには、彼がどうしてそんなことをするのかも分からない。

「あなたは……？」

お姉ちゃんが彼にそう問うている。いつもと変わらないよく通る声だけど、やっぱり困惑の色が混じっていた。

「柊四四八という。甘粕の――まあ、知り合いみたいなものです。ただ、細かい話をする時間はありません」

周りを見ろ、と彼は促す。そしてそこには、やっぱり奇妙な光景が広がっていた。

空が、雲が、地面が、木が。ありとあらゆるものが光となってゆっくりと消えてゆく。

「遠からずこの世界は崩れます。それとともに貴女たちは現実に戻れますが……俺からの頼みです。奴の、甘粕の問いに答えてやってはくれませんか」

「……なんで、そんなことを？」

納得のいっていない声はエリカさんのものだ。それも仕方がないだろう。だって私たちは、ついさっきまで彼の所為で散々な目に遭っていたのだから。

それに、柊さんは疲れたような笑みを浮かべながら――

「簡単です。甘粕は、馬鹿だからですよ」
そんな、やっぱりよく分からない答えを返した。
「だから、貴女たちの一番大切な思いをぶつけてやればいい。なに、奴がまた暴れ出しそうなら俺が意地でも止めますから」
「……」
私たちの答え。私たちの夢を示せと彼は言った。
そして、私たちは、とっくにそれを見つけていて。
「……分かりました」
だから、それを伝えなくちゃならない。
このまま黙っていれば、この不思議な夢は終わるのだとしても。
「みなさん。行きましょう」
私の言葉に、みんなが優しく応えてくれる。
「それじゃ、いっちょがみがみ説教してあげましょ。ねえ、みほ？」
「ああ。一緒に行くぞ、みほ」
「みほさん。思う存分、色々言ってあげましょう」
――そして、とうとう私たちは彼の前に立った。
夢が崩れ始めている影響だろう、すでに巨大な陸上巡洋艦（ラントクロイツァー）が至る所で崩壊を始めてい

るが、彼はそんなものなど一切放置し、とうとう私たちと同じ地面まで降りてきた。
今か今かと私たちの言葉を待つその姿は、まるで好きなテレビ番組の放送を待っている子供みたいで。
「甘粕さん――」
彼が本当に、私たちを心の底から応援していたのだと分かったから。
「――ありがとうございます」
「なっ……」
「え？」
「はあ？」
「……」
「……ほう」
反応は様々。お姉ちゃんやエリカさんたち、私の仲間のみんなは驚愕。柊さんは一瞬少し驚いたみたいだけど、静観。そして、目の前のこの人は、やはり一瞬の驚愕のあと、興味深いと言わんばかりに声を紡いでいた。
うん。確かに何を言っているんだって話だと思うよ。実際私たちは、この人の所為で死ぬような思いをしたわけだし。
でもね――

「貴方が今日来ていなかったら、私たちはきっと、何も変わらず迷ったままだった」
その一点だけに限っても、彼は間違いなく私たちの背中を押してくれた。
「変わるきっかけを作ってくれた。そして私たちは、そのおかげで本当のチームになれた。その事実からは目を背けちゃいけないと思うんです」
「……」
「だから私は、ありがとうって言うんです。そして――それで十分なんですよ」
さあ、言うべき礼は言った。ならばここからは、お待ちかねのお説教だ。
「そう、それで十分。私たちは、貴方がいなければ真っ直ぐ歩けないような、そんな弱い人間じゃ決してありません。私は、そう信じています。……色々言いたいことは山ほどありますけど、時間がないようなので簡潔に言います」
深く、ゆっくりと呼吸を整える。
それは、ちょっと前にもお姉ちゃんが言っていた言葉で。
「――余計なお世話です。私たちは、私たちの力で、私たちの人生を生きていく。どんなに辛くても、苦しくても、素敵な友達と一緒なら頑張れる。そう、信じているんです」
私の言葉に、彼はこの夢で初めての優しい微笑を浮かべる。
なんとなくその雰囲気が、少しではあるけれど柊さんに感じたものと似通っていて。
「では、黒森峰女学園の少女たちよ。おまえたち全員に聞こう。おまえたちの夢は、一体

何だ？」

その答えは、私たちの中でとっくに出ていた。

ねえ、柊さん。さっきの言葉の意味、分かったよ。

この人は物凄い馬鹿だ。だから、分かりやすく答えを見せてあげないと満足しないし、そして馬鹿だから時にその分かりやすい答えすら見落としてしまう。

なんと傍迷惑な人だろう。なんと面倒くさい人だろう。

ここまで突き抜けていると色々大変だろうなと、そんな漠然とした感想を私は抱いた。

「そんなもの――」

エリカさんが真っ先に彼の言葉に答える。相変わらず納得がいっていないみたいだけど、それでもその声は自信と、そして何よりも誇りに満ちていた。

「私たちは、とっくの前に決めています。いいえ、見つけています」

「ああ。だから、みほ。言ってやれ」

赤星さんが、お姉ちゃんが、他にも、他にも、素敵な仲間がこんなにもいる。

思いは一つ。迷って、苦しんで、その果てに見つけた不朽の理想（ユメ）が、私たちにはちゃんとある。

それが何よりも嬉しかった。だから私は、私たちは――

「みんなで一緒に、戦車道をやることですッッ！」
だから、こんな試練はもういらない。
どれだけ強くなろうと、どんな夢みたいな力を手にしようと。
大好きな戦車道を、大好きなみんなと一緒にやれなければ意味なんてないのだと。
そう高らかに、誰よりも弱くて馬鹿な彼に言ってやった。
「――ああ」
己に向けられた真っ向からの否定意見。
おまえは要らないという心からの叫びに、深く深く感じ入る。
西住みほが自分たちの夢を喝破した瞬間、彼女たち全員が完全に急段の協力強制から外れたのを、俺は自覚していた。
それは即ち、彼女たちが完全に俺の試練を乗り越えたことに他ならず。
「――見事。俺の負けだよ」
万感の思いとともに、兜を脱いだ。
「ならば、その夢をどこまでも貫くがいい。おまえたちならば、必ず出来る。その道に幸あらんことを、俺は心より願っているぞ」
己に繋げていた少女たちを、完全に夢界から現実へと送り返す。眷属の繋がりも断ち切ったゆえ、彼女たちはもう二度とこの邯鄲には入れない。

「――全く、相変わらずおまえが関わると碌なことが起こらん。今回みたいなのはこれっきりにしてくれ、頼むから」

事が収まるところに収まったのを見て、ようやっと肩の力を少し抜いた柊四四八がそう声をかけてくる。

全く、良い気分ではないなこれは。まるで悪事が親に発覚した子の気分だよ。

人として進むべき道を示した柊四四八に対し、俺はなんという不義理を働いていたのだろうと、そんな慙愧の念に堪えない。

「そうだな。では、俺はあるべき場所に戻るとしよう。そのほうが、そちらとしても目の届く場所に置いておくことが出来るしな？」

「……それはそれでまた苦労しそうだが、おまえを野放しにするよりはマシか。今なら俺が通ってきた道があるから、おまえも帰ることは出来るだろう。だが――」

「無論、二度と夢は使わんよ。大義を為すのは現実の意志。ならばこそ、俺もまた先達（おまえ）に倣い、俺の求道を俺自身の力で果たしてみせよう。おまえの語る勇気を、おまえがそれを為す道程を、この目で確と見届けたい。ただ――」

そこでいったん言葉を切る。俺の言葉に、柊四四八のみならずアラヤまでもが耳を傾けているのを確認しながら、俺は続きを語った。

「アラヤよ。俺のもともといた世界とこの世界を繋ぐ道を、一週間の後再び開け。俺が

帰るのは、その時だ。まだ、この世界で為さねばならんことが残っているゆえな」
若人を導く先達として、俺がやれることが残っている。
ならば、その務めは果たさなければならないだろう。子を導き、慈しむことこそが大人の本懐というものなのだから。
そんな俺の言葉に、もう一人の盧生はしばし逡巡した様子だったが、やがて小さく息を吐き口を開いた。
「……信じていいんだな?」
「誓って。俺は再び、アラヤとの接続を解除する。約束は違えんよ」
「ならばやってこい。ただし、もしおまえが約定を破ったならば、即座にアラヤから俺に連絡を入れさせろ。そうなった場合、俺はおまえを連れて帰るわけにも、まして野放しにするわけにもいかない。アラヤに伝えておけ」
その言葉を最後に、とうとう柊四四八の存在が薄れてゆく。
まるで泡沫の夢の如く、俺が焦がれた英雄は元の世界へと帰っていった。
「ではそういうことだアラヤよ。俺もまた、俺の為せることを為しに戻るとしよう。ゆえ、さらばだ」
その言葉を最後に、俺はアラヤとの接続を完全に解除した。
夢を捨て、只人として意識が現実へと帰ってゆく。

ここに、長く険しい魔王の試練はついに幕を下ろしたのだった。

第13話（終）「私の戦車道」

――あれから、一年。

現実に帰った私たちの前から、甘粕さんは姿を消していた。

夢の中で負った傷は文字通り幻の如く消えていて、三年の先輩方も何事もなく生きていた。

気がついたら保健室のベッドに寝かされていたのだから、なんとも不思議な感じだったのを覚えている。

しかも、あれだけ濃い経験だったにも関わらず、現実ではせいぜい一時間程度しか経っていなかったというのだから余計変な感じというか。

一体いつから夢だったのかすらはっきりしないものだから、なんとも言えないのだ。

お姉ちゃんは「邯鄲の夢」とあの不思議な出来事を呼んでいたが、言い得て妙だろう。

――人生の目標も定まらぬ若者が、旅の途中邯鄲という街で仙人に出会う。若者が己の不遇を仙人に語ると、仙人から夢が叶うという枕を貰い、さっそくこれを使って眠りについた。

するとどうだろう、彼はみるみるうちに出世街道を歩み始める。良き妻を貰い、子に

恵まれ、時に苦境に立ちながらもそれを乗り越え、栄枯盛衰の全てを知って幸福な一生を過ごしたのだ。

だが、彼がその人生を終え眠りについたと思いきや、なんと再び目覚めているではないか。仙人に出会ったその日から大した時間も経っておらず、寝る前に火にかけた栗粥がまだ煮揚がってさえいない。

つまり、全ては夢であり、ほんの束の間の出来事だったのだ。

最終的に若者は己の欲を払われ、人の一生の儚さを知った。

その若者の名を、盧生（ろせい）という。

確か、こんな故事だったと思う。

出会ったのは仙人などではなくアニメか何かのラスボスを務める魔王みたいな人だったとか、あんな突拍子もない人生があってたまるかとか、色々ツッコみたい点はあったけれど、それでも私たちはあの夢を通して、間違いなく大きく変われたと確信している。

少なくともチーム内にあの決勝の後や、あるいはそれ以前の勝利至上主義だった時分の雰囲気は残っていなかったし、学校で私が何か言われていたら助けてくれる人たちが少しずつ増えていった。

そして、甘粕さんと出会った日から二日後にそれは起こった。

なんと、先の全国大会で起こった事故に対して、運営側である戦車道連盟の方が全面的に責任を認め公に謝罪したのだ。

全ては安全管理上迅速な対応が出来なかった連盟に問題があり、だからこそ私（西住みほ選手）の行動は人として素晴らしいものだったと、会見の場で甘粕さんがそう言っていたのを覚えている。

正直、謝罪会見じゃなくて私への称賛が殆どだったから、見ていてなんだか気恥ずかしかった。お姉ちゃんは得意げに見てたけど。

そして、戦車道に関連するあらゆる安全基準がこの機会に見直されることになった。といってもレギュレーションとかは変更がなく、運営側の判断に関連することが大半だったらしいので詳しいことはあまり分からない。

だが、当時の私は本音を言えば手放しには喜べなかった。

戦車道履修者を中心に学校の雰囲気は変化しているけれど、ＯＧに代表される支援者、そして何より、私たちに深いかかわりを持ち、日本戦車道において強大な発言力を持つ西住流――お母さんが何と言うか不安だったからだ。

西住流を体現したようなあの人にとって、私の行動は紛れもなく邪道で叱咤すべきものだったと分かっていた。そんなところにこの会見だ。身もふたもない言い方をしてしまうと、甘粕さんの言葉は西住流に対して泥を塗ったようなものだったから。

だから、その会見をまるで待っていたかのようにお母さんがテレビに出ていて、甘粕さんの言葉を支持したとお姉ちゃんから聞かされたときは随分と間抜けな声を上げてしまった。

……これを機に、私へのバッシングは一気に鳴りを潜めることになった。最終的には連盟も西住流も私を支持したのと同義なのだから、後ろ盾がなくなった感じだろう、ざまあないとお姉ちゃんやエリカさんらチームのみんがなが当の私よりも嬉しそうにしていたのが印象的だった。

そして、その翌日。

私とお姉ちゃんは実家にいったん帰ることになった。なんでもお母さんが私たちと話がしたいらしい。

その日のことは、話した会話の一つ一つを今でも覚えているくらいに大切な記憶として私の中に残っている。

……最初は、とても怖かったのが正直なところだった。

家に帰ればお母さんに何を言われるか分からなかったし、他にも西住流の門下生の人に会ってしまうかもしれない。

テレビではああいっていたけど、本当のところはどうなのかまだ分からなかったから。

お姉ちゃんはきっと大丈夫だと言ってくれたけれど、不安で仕方がなかったのだ。
ただ、それとは別にこれをいい機会だと捉えている自分が別に存在した。多分お姉ちゃんも似たような考えだったんだと思うが、今回のこれは、お母さんに私たちが選んだ道をしっかりと伝えるいい機会だと、そんなことを考えている自分もいたのだ。
私は、私の決断に嘘をつかないとそう決めた。
だから、自分のしたことが本当に正しかったかは分からずとも、これが自分の本当に進みたい道だという確信があったのだ。
たとえ西住流の教えから逸脱しようとも、これだけは決して譲れないし、譲らない。
そんな覚悟と、けれどやっぱり不安と恐怖が入り混じったなんとも不思議な気分で実家に帰った私を待っていたのは――
「みほ」
なんと、お母さんだった。出迎えてくれたのが使用人の菊代さんではなくお母さんだったことに、私もお姉ちゃんも思わず言葉が出なかった。
少なくともこんなことは、今まで一度たりともなかったのだから。
そんな私たちを見て、お母さんは少しだけ笑って。そして私をじっと見つめて。
「――おかえりなさい」
「――――」

本当に優しい声で、そんなことを言ったのだ。
今まで見たこともないようなお母さんの顔。聞いたこともないような声。そのどれもがとても変な感じがして、けれどそれは決して嫌な感じではなかった。
ただ、これまで色々と張りつめていた気持ちに肩透かしを食らった感じになって、どうしていいか分からずにおろおろする私を見て、お母さんもお姉ちゃんも笑っていた。
それは決して嘲笑なんかじゃなく、本当に優しい笑顔で。
私はここにいてもいいのだと、そう言われた気がして。
「違うわ、みほ。ここにいてもいいのかとか、自分は間違っていて居場所がないとか、そんなことを考える理由なんてどこにもない。いつでも好きな時に帰ってきていいのよ。当たり前のことでしょう？だってあなたは――」
どうして考えていることが分かったのかとか、何か返事を返す前に、私はお母さんに優しく抱きしめられていた。
少し上からかけられる言葉はとてもあたたかくて、そして何となく、迷いが晴れたような確たる熱を感じるもので。
「――あなたは、私の大切な娘なのだから」
……その一言が、決め手だった。

私は泣いた。今まで起きた色々なこと。辛いこともあった。苦しいこともあった。だけど、今こうやって私をちゃんと見てくれる人がいる。私を助けてくれる人がいる。

それがどうしようもなく嬉しくて、嬉しくて。

この温もりが、何よりも心地良くて。

だから、私は言わなくてはならない。

西住流の教えから外れたことに対する謝罪とか、自分が見つけた大切な道とかではなく。

本当に当たり前の、だけどいつの間にか言わなくなってしまう言葉を。

「お母さん――」

拭っても拭っても、溢れる涙は止まらないけれど。

それでも、出来る限りの最高の笑顔で。

「――ただいまっ！」

家族として、大切なその言葉を伝えることが出来たのだ。

……その後は、本当に久しぶりのお父さんも交えて、本当に普通の家族みたいに一日を過ごした。

あの決勝に関わる話は一度もなかった。ただ学校であったことや、友達と一緒に遊んだりしたこと、他にも他にも、色々な普通の話を思う存分続けたのだ。

甘粕さんが来たことを話した時にお母さんが少し驚いた様子だったのは、結局どういうことか分からなかった。

そして、翌日。私たちは再び学園艦に戻ることになった。

港までは菊代さんと、それからお母さん、そしてお父さんも一緒に来てくれた。

話すべきことは、もう既に話している。

だから、お母さんとお父さんは最後に一言だけ、言ってくれた。

「どんな道であろうと、それが自分の信じる真（マコト）ならばそれを貫きなさい」

「俺たちはいつもおまえたちを応援している。だから、自信を持って進みなさい」

……本当に、夢のようだった。

あの日。甘粕さんがやってきてから全てが変わった。

その変化の一つ一つが、どれも私にとっては良い結果だった。それがまだどこか信じられなかった。

「夢ではないさ。全ては、おまえがあの時勇気を出せたからこそだよ、みほ」

……お母さんといい、お姉ちゃんといい、何か心を読む能力でも持っているのだろうかと思ってしまうくらいに正確に私の考えていることがばれてしまう。

そんな私の考えは読めないのか、あるいは読んだうえでスルーしているのか――多分、いや確実に後者だろうが、お姉ちゃんは嬉しそうに言葉を続けた。

「みほがいたから、私たちは変われた。みほが勇気を示したから、甘粕さんは動いた。お母さんだって、きっとそうだ。だから、誇っていい。全てはおまえが示した勇気の道なんだよ。……まったく、おまえは私の自慢の妹だな」

ここまでべた褒めされると、なんだか恥ずかしくなってくる。だって、私がしたことは、別にそう大したことじゃない。

友達を、仲間を助けること。それは人として当たり前のこと。

少なくとも私はそう信じている。

そして、そんな私を見てみんなは助けてくれた。傲慢かもしれないが、私の決断がみんなを変えたのはきっと間違いないのだろう。現にお姉ちゃんはそう言っているわけだし。

ならば、その道を示した私が逃げてはいけない。あの時の自分に、嘘をついてはいけないのだ。

だから、甘粕さんが、そしてお母さんが教えてくれたように。

「……うん。ありがとう、お姉ちゃん」

「私は、後悔なんて絶対にしない。私が信じる道を、私は決して見失ったりしない。迷わない、挫けない、諦めない。みんなと一緒なら、怖いものなんてない。――それが、私の戦車道だから」

自分の大切な夢を、決して忘れないと誓うのだ。

――そして。

『プラウダ高校フラッグ車、行動不能。よって……黒森峰女学園の勝利！』

ついに私たちは、再び全国の頂点に立つことが出来たのだ。

割れんばかりの歓声が上がり、そしてそこでやっと、実感がわいてきた。

目頭が熱くなる。私たちは、本当に――

「勝ったな、みほ」

戦車から降りたお姉ちゃんが、泣きそうな声で嬉しそうにそう言っている。

「みほ！やったわね！」

「みほさん！」

エリカさんが、赤星さんが――いや、チームのみんなが。

私を中心に輪を作っていた。
みんなみんな、私の大切な、自慢の仲間。
辛いことも苦しいことも、全部全部一緒に乗り越えてきた最高の親友だ。
だから――
「――はい！私たちの、勝ちです！」
万感の思いを込めて、この勝利を喜ぼう。
ありがとう、お姉ちゃん。ありがとう、エリカさん。ありがとう、赤星さん。
ありがとう、みんな。
私はこれからもずっとずっと、みんなのことを忘れない。
みんなで勝ち取った勝利こそ、本当に大切なものだと信じているから。
それが、私の信じる真（マコト）。
私の、大好きな戦車道だ。

プラウダ高校
ｏдин　〝雨宿り〟

「……はぁ」

ため息とともに商店街を歩いているこの少女は、プラウダ高校戦車道チームのカチューシャである。

普段の彼女を知る人間が見れば、一目で明らかにただ事ではないと分かる。それほど今のカチューシャは気落ちしていた。

その切欠は、先日行われた第６２回戦車道全国高校生大会の決勝戦だ。

あの試合。他の誰でもない自分自身の指示で試合は終わった。

カチューシャが描いた絵図の通りに進んだ試合は、しかし最後の最後で誰もが予想だにしていなかった結末を以て終結した。

――黒森峰フラッグ車車長による、車輌及び指揮の放棄。

足場の悪いポイントに黒森峰を追い込み撃破するという作戦が齎したのは、足場を失った一輌が川へと転落するという非常事態。彼女らを救うべく、フラッグ車車長であり副隊長でもあった西住みほという一年生は川へと飛び込んでいった。

その様子を、無論のこと自分（カチューシャ）は見ていた。敵フラッグ車を撃破する大役を担っていた分隊の指揮を任されたのは、他でもない自分だったからだ。

「分隊長！ど、どうすれば……？」

目の前には無防備を曝す大将首がある。

――君なら必ず出来る。頼んだぞ、カチューシャ。

自分の役目はそれを獲ることで。

自分たちの悲願がかなうと、そう思ったから。

「――撃ちなさい」

困惑している仲間たちに、そう告げていた。

……そうして、プラウダは勝った。

前評判を覆し、あの黒森峰に――あの西住流に、勝ったのだ。

……と、ここまでは痛快なサクセスストーリーだった。

だが、話はめでたしめでたしでは終わらない。いつだって人間は無責任で、残酷な生き物なのだ。

全国大会も終わり、新チームとしての活動が始まった。

隊長の座を引き継いだカチューシャは、無論のこと気の緩みなど一切なく厳しい訓練を行っていた。

そしこれは、新チーム結成から間もない、ある日の昼休みの出来事である。
珍しく昼寝をする気分ではなかったカチューシャは、校舎内の自動販売機に飲み物を買いに行っていた。
普段ならば幼馴染であり、また新チームの副隊長でもあるノンナに買いに行かせていただろうが、その日に限って彼女は少し体調を崩し欠席していた。
「――しかし、ほんとムカつくわね」
「ほんとほんと。……でも」
「……？」
自動販売機の前で、二人の女子生徒が携帯電話の画面を見ながら何やら話している。何の話かは当然分からないが、とりあえず当初の目的を果たそうと、カチューシャが歩き出したその時。
「――〝プラウダの優勝はまぐれ〟。〝戦車道の理念に背く卑怯者〟。〝殺人未遂〟。……好き勝手言いやがって」
「……でも、私は正直、それも一概に間違いだとは言えないと思うの。なんの躊躇いもなく、無防備な相手を撃ったんでしょ？」
「……ッ!?」
聞こえてきた会話の内容に、反射的に足が止まってしまった。

それはまさしく、自分に深く関わる内容だったから。
そしてその内容が、予想だにしないほど悪意に満ちたものだったから。
だが、言われっぱなしではいられない。とにもかくにもまずあの二人のくだらない話を止めさせようと、カチューシャは再び顔を上げて――
「――前の隊長さんだっけ？戸惑う分隊長さんに命令して撃たせたって言ってたらしいし。そうまでして、勝ちたかったのかな」
「……は？」
慮外の言葉に、今度こそカチューシャの全てが停止した。
頭が真っ白になり、そして次瞬、カチューシャは逃げるようにその場を後にしていた。
「はぁ……！はぁ……！」
走って、走って、たどり着いたのは三年の教室。そこにいるであろう目当ての人物を探せば――いた。
窓際の席で、静かに本を読んでいる長身の女性。
「隊長！」
息も絶え絶えに駆け寄り、開口一番そう叫んでいた。
周りの生徒たちが何事かと騒ぎ立てる中、話しかけられた当人――前隊長は呼んでいた本を静かに閉じた。

「落ち着け、カチューシャ。……今の隊長は君だろう？」
「そんなことを言ってる場合じゃ――」
ない、と言おうとした口が、前隊長の指で物理的に閉じられる。
「……屋上においで。そこで話を聞くよ」

「新チームはどうだい？うまくいってるかな？」
フェンスに背中を預けながら、隊長は変わらない様子でそう聞いてきた。
その様子が、本当に変わらない様子だったから。
「――隊長。どうしてよ」
それが、気に食わなかった。
「どうして、黙っていたのよ」
自分たち（ブラウダ）に心無いバッシングが寄せられていたことも。
「どうして、一人で背負い込んだのよ」
その対象が自分になるように、あえて嘘のコメントを残したことも。
「どうして、何も教えてくれなかったのよ……ッ」

そしてそれら全てひっくるめたことを、新しい隊長である自分に一切伝わらないように情報を遮断したことも。

全部全部、気に食わない。

「カチューシャ。私は――」

「うるさいうるさい！もう、知らない！」

尋ねようと思っていたことも、伝えようとした想いも何もかも、もはや彼方へと消え去っていた。

ぐちゃぐちゃの思考に衝き動かされるように、カチューシャは屋上を後にしていた。

――そして、時間は再び現在に戻る。

休日ということもあり、本来ならば戦車道の訓練をしているはずの時間だったが、今はそんな気分ではなかった。

だから体調を崩したと嘘を言って、今日は休んだ。

ノンナが心配して看病すると言ってきたが、当然断った。

今は、一人になりたかった。

「人殺し、ね……」

あのあと自分でも決勝戦についての情報を集めてみたが、とても見ていられない内容だった。

敗北の原因となってしまった黒森峰副隊長への、異常なバッシング。
そして、勝者である自分たちへのバッシング。
どちらも胸糞悪かったが、やはり気に食わないのは自分たち――いや、前隊長に向けられた中傷の数々だった。
「……」
自分へのものならばよかった。馬鹿なことを、と一笑に付していただろう。
だが、その矛先は自分ではない。
それが、何より腹が立って仕方がない。
（……ああ、もう！考えれば考えるだけイライラしてくるわね）
寮でじっとしているのも暇だし、何よりマイナスなことばかり考えて気が滅入ってしまう。だからこうして、なんとなく商店街をぶらついていたのだが――
「雨が降るとか、聞いてないわよ」
急に空模様が悪くなって、こうして雨宿りする羽目になってしまった。
通り雨だろうか、かなり強い雨足のせいで、軒下に入っていても跳ね返りで濡れてしまう。
「……？」
ふと、自分が逃げ込んだ建物からいい匂いが漂っていることに気付いた。

振り返って見てみればどうやら喫茶店のようだ。
（止む気配もないし、仕方ないわね）

店内は中途半端な時間帯ということもあって、それほど混雑はしていなかった。カウンターに座ってロシアンティーを嗜んでいる若い男性が一人と、奥のテーブル席で談笑している、多分ウチの高校の女子生徒が三人。
なんとなく少し緊張しながら、カウンター席――男性と三つ間を開けて座った。
ふと男性のほうを見れば、スプーンでジャムを掬って紅茶に入れようとしているではないか。
「……それ、間違ってるわよ」
思わずそう声をかけていた。見ず知らずの人間にいきなり言うことではなかったかもしれないと、口を開いた後に少し後悔した。
「む？そうなのか」
しかし、男性のほうはさして気にした様子もなく、逆に何が間違っているのかと問うてきた。

「……それじゃ紅茶が冷めちゃうでしょ。ジャムは紅茶に入れるのではなくて、直接舐めなさい」

「なるほど、本場の作法というわけか。ご教授感謝する」

そして男性は、今度は正しい作法で紅茶を飲み始めた。カチューシャの前にも男性と同じロシアンティーが運ばれてきて、少しばかりの優越感を味わいながらそれを口に含む。

「――そういえば、ウチの戦車道の話聞いた？」

「――！」

静かな店内に響いていた女子生徒の会話。なんでもない世間話や愚痴だったそれに、突如としてそんな話題が上ってきた。

雨は未だ止まず、紅茶もまだ残っている。

外に出ようにも出られず、その会話に聞き耳を立ててしまった。

「聞いた聞いた。有り得ないよねぇ、人を殺してまで勝とうとするとかヤバくない？」

「しかも、嫌がる下級生を脅して無防備な相手を撃たせたんだって。最悪じゃない？」

……。

下卑た笑いと会話に、カチューシャの中で何かが切れた。

我慢の限界だった。

身勝手な奴らに物申してやろうと席を立ちあがり――
「おい、喧しいぞ。下らん話ならば外でやれよ」
――それよりも早く放たれた男性の言葉が、不快な囀りを止めていた。
「な、なによオッサン。私らが何喋ってようと勝手じゃない」
「そうよ。それに実際事実なんだから、別にいいでしょ」
「ふむ……。では、彼女の前でもう一度同じ言葉を吐いてみるがいい」
そういって男性は、カチューシャの方を目線で指し示した。
驚愕するカチューシャを尻目に、男性はなおも言葉を紡いでゆく。
「彼女はプラウダの戦車道チームのメンバーだ。それも、次期隊長と目される有力選手。……さあ、何を喋ろうと勝手だぞ?」
その言葉に、女子生徒たちは酷く狼狽していた。
好き勝手言っていたら、まさか話題の張本人と呼ぶべき人間が目の前に現れたのだ。
プラウダ高校の生徒であった彼女らは、当然カチューシャのことも知っていた。
「な……あ、ええと……」
「どうした。事実なのだろう?ならば思う存分おまえたちの言葉を彼女にぶつけてみろよ」
「……い、意味分かんない!もう帰ろ!」

お代を叩き付けるようにテーブルに置いて、女子生徒たちは去っていった。
カランカランと、乱暴な開閉に怒るようにドアベルが鳴った。
「……」
その様子を、男性は何故かとても悲しそうな表情で見つめていた。
「ねえ」
そんな彼のことが、気になったから。
「貴方、名前は？」
カチューシャは男性にそう問うていた。
「甘粕正彦。ただの旅行者だよ」
男性――甘粕正彦はそう答え、再びカウンターに腰を下ろす。その表情には影があり、そしてまた同時にどこまでも真摯にカチューシャを見つめていた。
「……隣、いいかしら」
「喜んで」
雨は、未だ止まない。

Дｂａ　〝礼儀作法〟

「さて。プラウダ高校次期隊長、カチューシャ殿とお見受けするが相違ないか？」

「……〝次期〟じゃなく〝今期〟よ。それと、さっきは助かったわ。カチューシャもあいつらにはムカついてたもの」

二杯目の紅茶を飲みながら、カチューシャはちらちらと隣に座っている偉丈夫を見やる。

皺ひとつ見当たらない仕立ての良いスーツ、真っ直ぐピンと伸びた背筋、そして紅茶を飲む際の細かなマナー。

そして何より、それらを一切無理することなく自然体で体現していること。

どれも些細なことではあるが、だからこそカチューシャは目の前の男のことがそれなりに気に入っていた。

礼儀。それは人が社会生活を営む際に必ず関わってくるものだ。

目上の人間には敬意を払う。相手を不快にさせない。何事にも真摯に取り組む。

どれも当たり前で、しかしカチューシャはそれがどうも苦手だった。とくに敬語などは苦手を通り越して壊滅的であり、だから誰に対してもきつい言葉遣いになってしま

う。

それが許されるだけの能力を備えているという自負があるし、また誰よりも努力してきたと自負しているからこそ顧みる気は毛頭ないが、それはそれだ。

とにもかくにも、甘粕正彦に対するカチューシャの第一印象は〝悪くない〟の一言に尽きる。

少なくともこの男は、ついさっき見た不愉快な連中とは全く異なるタイプの人間であることは明白だった。

そして何より、カチューシャが気に入ったのは――

「既に新体制は始動しているわけか。では、月並みな言葉になるが賛辞を贈らせてくれ。まずは貴殿の隊長就任を寿ごう。更なる活躍を期待している」

――言葉に込められた〝熱〟だろう。先の啖呵でも、そして今の祝辞でも、甘粕正彦は紛れもなく本気だ。

それは先に述べた礼儀の基本。誰に対しても正面から堂々と向き合うこと。

単純ではあるが、カチューシャにとっては初対面の人間からそれを向けられることは悲しいかな少ない。

彼女は年齢に見合わず、まるで少女の如き見た目をしている。身長が低いことは彼女のコンプレックスであり、そして残念なことに初対面の人間は大抵の場合それを土足で

踏み荒らすのだ。

――〝迷子か〟と親切心から声をかけられたことがあった。

――ノンナと一緒にいるとき、〝まるで親子のようだ〟と言われたことがあった。

中傷や軽蔑といった悪意ならば、強くなって己の力を見せつけてやれば済む。

だが、何気ない日常の何気ない一言はどうしようもない。

〝善意〟による無自覚な攻撃から始まる出会いが殆どだったカチューシャにとっては、甘粕の態度は非常に新鮮だった。

「ありがとう。それにしても、初対面相手によくあそこまで言えるわね」

だからだろうか、カチューシャは珍しく素直に礼を以て返答していた。

「こう言っちゃ悪いけれど、貴方はカチューシャたちには何の関係もない人よね？どうしてあそこまで言ったの？」

そしてまた、だからこそ気になるのだ。

甘粕の言葉を信じるなら、彼は別にプラウダの関係者ではない。端的に言えば、カチューシャに味方する義理など欠片もないのだ。

にも関わらず、彼ははっきりと己の意見を発した。当事者であるカチューシャよりも早く。

「差し出がましい真似をしてしまったかな。だが、あれらの態度に我慢できなかったの

だ。俺は、陰口というものが反吐が出るほど嫌いでな」

そんな問いに、甘粕は明確な怒りの感情を乗せた声で応えた。

「言葉には責任が伴うものだ。人を呪わば穴二つと言うが、他者への攻撃とは本来それだけの覚悟を持たねばならん。己自身が墓に入る覚悟をしてこそ、初めて人を呪えるのだよ」

本来の意味と異なる諺の用法は、甘粕流の諧謔か。

「だが、悲しいかな――人は堕落する。どこまでも無責任に、身勝手に、好き勝手な御託を並べ立てる。それが陰口――先の連中がしていたことだ。

おまえはどう思う？当事者の覚悟も、恐怖も、何も知らぬ第三者が匿名の安全性を利用して一方的に攻撃してくるのだ。まったくもって馬鹿馬鹿しいことこの上ないとは思わんか？」

「……」

「そして、そんな蒙昧どもはそれゆえ何の覚悟も自覚も持っておらん。我も人、彼も人――自分たちが身勝手な言葉をぶつけている相手は、まぎれもなく生きている人間だという大前提さえ忘れているのだ。先ほどの三人が良い例だな。殴れば殴り返されるかもしれない――そんな当たり前の道理さえ理解しておらんから、いざおまえが目の前に現れればすごすごと退散する始末だ。そしてこれもまた愚かしいことに、奴らは己の振る

舞いを恥じることすらせんだろう」
喉元過ぎれば熱さを忘れる――人とはそんな悪性を元来有しているから。
だからこそ、その現実を聞かされたカチューシャは腸が煮えくり返る思いでいっぱいだった。
「……卑怯者は、一体どっちよ」
絞り出すように放たれた悲嘆と赫怒の声に、甘粕は首肯した。
「然り。おまえたちは勝ったのだ。王者黒森峰を相手に一歩も引かず、それどころか策に嵌め、正々堂々と戦い抜いた。一体どこに卑怯と罵られる謂れがあろうか。作戦立案は前の隊長殿であったかな。素晴らしい輝きだよ」
そして、沈黙。
甘粕は少し冷めた紅茶に口をつけ、カチューシャは俯いていた。
――半分ほど残った紅茶から立ち上る湯気が小さくなった頃、黙り込んでいたカチューシャが口を開く。
「もしも――」
いつもの上から目線ではなく、似つかわしくない弱い声で。
「――もしも、あの作戦を立てたのが隊長じゃなかったとしたら。本当は別の人が立てた作戦だとしたら。貴方は、どう思うかしら？」

けれど、自分の弱さを見られたくはなかったから。
こんな胡乱な言い回しになってしまった。
甘粕は、そんな彼女をしばし見つめて。
「ふむ。普通の試合ならば手柄の横取りだな。おまえの言葉が真実ならば、プラウダの前隊長は他人の功績をさも自分のもののように吹聴してまわる愚物という評価が相応しいだろう」
「だが、おまえが聞きたいのはこんな一般論などではあるまい。そも、今回に限っては状況が状況だ。それを踏まえて考えれば、彼女の行動の意味は全く違うものになる。
――そして、おまえはそれを知っているのではないか？」
「……ッ」
カチューシャから逃げ場を奪う、詰めの一手を打った。
そう。本当は最初から分かっていた。
不慮の事故とはいえ、相手の戦車を川へと叩き落としてしまったこと。
そしてその時、勝利という栄光を手にするために非情な判断を下したこと。
それらに伴う身勝手な論調から次期戦車道チームを守るため、隊長が汚れ役になったこと。
そんなことは全部、分かっていた。

「……じゃあ、隊長はどうして教えてくれなかったの？ううん、隊長だけじゃない。ノンナも、他の誰も――みんな教えてくれなかった。カチューシャだけ、何も知らずにいた。どうしてよ……ッ」

天上から全てを見透かしているような男の言葉に、カチューシャの声が震える。

自分はそこまで信頼されていないのか。どこまでいっても子ども扱いなのか。

普段ならば絶対に考えもしない負の感情が湧き上がる。

「それこそ、今更だろう」

対照的に、甘粕の声はどこまでも静謐に、そして確かな熱を持って響き渡る。

「そうだな……。カチューシャ。その〝ノンナ〟なる者はおまえにとって、一体なんだ？」

「単なる戦車道の仲間か？それとも学友か？違うだろう。そうでなければ、わざわざ一人だけ名前を出す理由などあるまい」

その言葉に、カチューシャは改めて大切な友人のことを想った。

いつも隣にいて、いつもいつも影ながら支えてくれた。

私（カチューシャ）にとってノンナとは、大切な友人で、頼れる副官で、優しい相棒で――

「――絶対に失くしたくない人。カチューシャにできた、初めての対等な友達。カチューシャが世界で一番大好きな、とても素敵な人よ」

だから、素直にそう答えていた。

その言葉に、甘粕は微笑した。

「ならば、それが答えだ。おまえにとってノンナという友人が唯一無二の存在であるのと同様に、彼女にとってもカチューシャ（おまえ）は決して失いたくない光なのだよ。仲間とは互いに想い合い、助け合い、喜び合うものなのだろう？おまえが抱いているその想い――それが一方的なものであるわけがなかろう。俺にはついぞ持てなかった光だが、だからこそ俺にはその輝きが何より眩しいのだよ」

「……じゃあ、ノンナはカチューシャの考えてる事も分かってて隠し事をしたってこと？カチューシャに、傷ついてほしくないから」

それが答え。それが全て。

全ては大切な光（カチューシャ）を守るため。

カチューシャが顔を上げたのを見て、甘粕は席を立った。

「おまえが迷い、悩んでいる限り周囲の評価は今のそれから変わることは有り得まい。たとえほとぼりが冷めようとも、たとえそれが真実とかけ離れた妄言であろうと、一度染みついた悪評が消えることはない。そしてそれこそ、おまえの仲間が最も恐れ避けようとしている結末に他ならん。

――俺が言えるのはここまでだ。どうやら、迎えが来たようだぞ？」

「え？」
瞬間、ドアベルの音と共に何者かが店内へと駆け込んできた。
「カチューシャ！もう、心配しましたよ？」
少し息を荒げながらカチューシャの手をとったのは、紛れもなく大切な友達。
「ノンナ……？どうして、ここが？それに今日は、訓練のはずじゃ」
「休みました。私も急に体調が悪くなったので」
いつもと変わらない、太陽のような優しい笑顔。
ブリザードと呼ばれる彼女の珍しい見慣れたその表情に、カチューシャもまた破顔した。
「ふふ、ふふふふ――！サボりは永久凍土で穴掘り１０ルーブルよ、ノンナ？」
「では一緒にやりましょう、カチューシャ。貴女と一緒なら、私はどこへでも行きますよ」
ああ、なんだ。
結局全部、最初からお見通しだったんだ。
ならば、私（カチューシャ）がすべきことはなんだ？
どうして隠し事をしたのかと、ノンナを、そして隊長や他の仲間たちを責めることか？

――違う。

本当に大事なことは、仲間の想いに応えること。

みんなが私に、強くあれと、気高くあれと願ってくれた。

ならば隊長として、それに応えるのが私の役目。

「行くわよ、ノンナ」

「はい。……でも、ちゃんとお代は払ってくださいね？」

「その必要はない。俺が持とう。なに、正しい作法を教わった礼だ」

そんな光を祝福するからこそ、甘粕正彦は二人分の代金を置き、静かにその場を去ろうとして――

「そう言えば、貴方は？」

その前に、ノンナが立ちふさがった。珍しく他者を見上げているその瞳は明らかな警戒の念を帯びている。

だがそれを制するようにして、カチューシャが割り込んで手を差し出した。身長差がありすぎてカチューシャはかなり上向きに手が伸びている。

「――ありがとう、マサーシャ！」

その行動と言葉に、ノンナはその鉄面皮を崩して驚愕した。

あのカチューシャが素直に、真っ直ぐに、愛称までつけて礼を述べた。

しかも、これだけの身長差がありながら自分の肩車を使おうともしていない。
それはすなわち、あのカチューシャが目の前の謎の男を対等だと認めている証左に他ならないのだ。
目の前ではカチューシャと〝マサーシャ〟が嬉しそうに握手を交わしている。
「ちょっとノンナ！そんなところに突っ立ってちゃダメじゃない！」
分からない。分からない。
この男は一体何者だ？
……こんなにも素敵なカチューシャの笑顔はそうそう見たことがない。その要因を作ったのが、どうして自分ではないのだ。
『なぜ、貴方なのですか』
半ば独り言のように、カチューシャや目の前の男には伝わらないように、ノンナはロシア語で呟いていた。
『大した理由などない。偶然、彼女に紅茶の作法を教わっただけだ』
そしてそれゆえに、男が平然とロシア語でそう返答してきたとき、今度こそノンナの心臓がどきりと音を立てた。
『俺は何もしておらんさ。彼女は強い。たとえ俺という異物がおらずとも、すぐに太陽のような輝きを取り戻しただろうよ。なぜなら彼女の道には、既におまえという仲間が

いたからだ』
『……ロシア語を』
『古い友人に露西亜（そちら）の者がいてな。……さて、先も言ったがな。俺は何もしておらんよ。彼女が笑えるのは、偏におまえという最高の友がいるからだ。言っていたよ。〝世界で一番大好きな、とても素敵な人〟とな』
「――ッ！」
顔が熱い。今の会話がロシア語で心底よかった。
もし日本語だったら、私も、そしてカチューシャも間違いなく顔から火が出ている。
カチューシャが私たちの間で、日本語で話せと言いながら飛び跳ねている。その姿がとても愛おしくて、とても嬉しくて。
「私はノンナ――カチューシャの友達です。名前を聞いても？」
いつものようにカチューシャを肩車しながら、私はそう聞いていた。
「甘粕正彦。おまえたちの道を心から応援する、ただの旅行者だよ」
彼はそう答え、扉を開けて出ていった。
後を追って店を出たが、その背中はどこにも見えなかった。
「雨、止んでるわね」
カチューシャにつられ、私も空を見上げる。

灰色の雲の切れ間から、暖かい太陽が顔を覗かせていた。
「――ノンナ。もう少しだけ、ゆっくりしていかない？ここの紅茶、結構おいしかったのよ」
すぐ上からの言葉は、太陽の光のように暖かくて心地良い。
このぬくもりを、失くしたくないと思ったから。
もう少しだけ、独占してもいいかと思ったから。
「――はい。どこまでも、お供します」

雨は上がり、太陽が顔を覗かせたプラウダ高校学園艦。
今後の天候は、地吹雪とブリザードが吹き荒れる穏やかなものになるだろう。

три　〝再出発〟

翌日。今日も今日とてプラウダ高校は晴天に恵まれていた。

高緯度を航行するという特性上やや短めの夏休みはすでに終わっており、学園艦も二日後には青森を離れ再び大海へと出ていく予定だ。

そしてこの日も、新隊長カチューシャが率いるプラウダ高校戦車道チームは訓練に励んでいた。

訓練内容は紅白戦。それも文字通り新チームの全員が参加する大規模なものだ。

「ちょっと七号車、遅れてるわよ！隊列を乱さないで！」

「す、すみません！」

斜行陣形の一角がほんの一瞬足並みを乱したのを、カチューシャは強く叱責する。

「気を抜いて索敵をおろそかにして、それで万一奇襲を喰らったらおしまいなのよ。紅白戦だからって……いいえ、紅白戦だからこそ神経を研ぎ澄ませなさい！練習で出来ないことが本番で出来るわけないでしょう。――他の車輌も他人事と思わないこと！分かったら本気でやりなさい、いいわね!?」

「は、はい！」

慌てて隊列に復帰する七号車を確認しながら、カチューシャは小さく息を吐いた。

（思った通り。どうも最近、チームが浮き立っている……）

七号車が目立ったため名前を挙げたが、他の車輌も程度の大小はあれどどこか気の抜けた動きをしている。まだ経験の浅い下級生はともかく、先の全国大会に出場していたメンバーまでもがそうであるという現状に、カチューシャは慨然たる気持ちでいっぱいだった。

（……慢心、増長、自惚れ。全国で優勝したことによる弊害ね。それと、下級生中心で隊長（カチューシャ）に対する拭えない不信感と蔑視。ノンナを敵チームに置けば出てくるとは思ってたけど、ここまで分かりやすいと滑稽よ）

栄光、名誉、称賛――偉業を果たした者が手にするそれは、同時に堕落という下り坂への入り口でもある。

皮肉だが、これは紛れもなく人間という生物が元来有する拭い難い悪性に他ならない。

苦難の果てに得る栄光という美酒はこの上なく甘美であり、だからこそそれを呷（あお）りつづけて破滅する。

そしてその時、手元に残るものなど何もない。

不断の努力は理想だが、そう簡単には実現できないからこそ理想と呼ばれるのだ。

カチューシャやノンナのように日々高みを目指して前進する人間はごく少数で、殆どの人間はどこかで勝手に折り合いをつけて妥協する。

たとえそれが本来は通過点に過ぎない場所であったとしても、当人がそれを限界や到達点と定めた時点でそれより高みには決して上がれない。

「――ふざけないで」

ほら、また少し隊列が乱れた。しかもそのせいで、敵の偵察車に気付くのが一瞬遅れる始末。

焦ったように謝罪と指示を求める通信を入れた仲間に、こんどこそカチューシャの堪忍袋の緒が切れた。

「あんたたち、いい加減にしなさい。やる気がないなら全員今すぐ荷物をまとめて艦を下りればいいわ。今のあんたたちなんか、カチューシャのチームにはいらないんだから」

冷たく、そして烈しいカチューシャの叱責に、チームの誰もが凍り付いた。

「いい？この際だからはっきり言っておくわ。全国で優勝したのは前のチームで、私たちとは別なのよ。あんたたちがつまらないミスを繰り返してる今この間にも、他校の連中は確実に強くなっているわ」

十連覇を阻まれ雪辱に燃えているであろう黒森峰。

初の全国優勝を狙う聖グロリアーナ。
他にもサンダース、継続、その他様々な学校が次大会の優勝という栄光を目指して進んでいる。
「プラウダは優勝校。当然、今までの比じゃない研究と警戒を受けるでしょうね。そうやって本気で向かってくる相手に、あんたたちはそんな情けない様を見せるつもり？」
挑む立場から、挑まれる立場になったことを自覚しろ。
足を止めれば置いていかれるだけだと自覚しろ。
酔いを醒ませ。あんたたちの――いや、私たちの終点は、こんな中途半端な場所では断じてない。
互いに本気で向かい合ってこそ、本当の意味で礼儀を尽くしたと言えるのだ。
「黒森峰は九連覇したのよ？カチューシャたちの九倍よ？たかが一回程度の優勝で有頂天になってどうするの。――そんな様じゃ、まぐれの優勝と言われても仕方がないわ！」
その言葉に、メンバーの間に動揺が走った。なぜならそれは、カチューシャには伝わらないよう副隊長であるノンナを中心に隊内で徹底していたはずの悪評だったからだ。
それを嘲笑うように、カチューシャは堂々と宣言する。
「どうしてそれを、って感じね。カチューシャは隊長よ。誰よりもチームのことを知っ

ているのは当然でしょう。そして、大事なことを言っておくわ。

――ありがとう。そして、余計なお世話よ。このカチューシャを見くびるなッッ!!」

太陽のような優しい声と、それに続いて雷霆の如く響き渡る大喝破。

「悪評、中傷、陰口。そんなものは卑怯者が好き勝手言ってるだけよ。その程度で揺らぐほど、カチューシャは弱くないわ。――そしてそれは、決してカチューシャだけじゃないはずでしょう」

人間は無責任で、身勝手で、自分勝手な生き物だ。

雨の喫茶店で甘粕正彦（マサーシャ）が語った性悪説は紛れもなく真理で、それについては同意しよう。

だが――

「あんたたちは強い。このカチューシャが認めてあげる。これまで精一杯努力してきたこと、それがついに実って嬉しかったこと――カチューシャには全部お見通しよ！そんなあんたたちが、どこの誰とも知れない奴の陰口になんか絶対に負けない。負けるわけがないでしょう。だから、こんなところで止まって、陰口に負けてどうするのよ！」

栄光を手にしたから堕落する？馬鹿なことを。

私の仲間は、そんな惰弱な人間なんかじゃ決してない。

理想を現実にすることができる、立派な人だと信じているから。

今こそ新チームの始動の瞬間。前を向いて、胸を張って歩きだそう。
「前回大会優勝校――その誇りを胸に抱きなさい。あの勝利から持ち帰っていいのはそれだけなの。決して、その栄光に縋っちゃダメよ。
――そして、今日から改めて次の大会目指して頑張るッ！分かったッ!?」
迷える仲間がいるならば、自分が規範となってやればいい。
どうだ見たかと、格好いい背中を見せつけてやろう。
荒れ狂う吹雪だろうが、大雨だろうが暴風だろうが、決して消えない太陽であり続けよう。
そうすれば、みんなも必ず自力で立ち上がってくれる。
「――ついてきなさい！まずはこの紅白戦、絶対勝つわよ！」
そんな、この上なく格好いい言葉に。
朝目覚めて、昨晩の酔いが消えているように。
「――はい！今まで申し訳ありません、カチューシャ隊長！」
「よーし、やってやるわ！」
迷いが消える。慢心が消える。
一糸乱れぬ隊列に戻ったと思えば、ちょうど敵戦車発見の一報が入った。
獰猛な笑みを浮かべ、カチューシャは素早く指示を出す。

「全車横隊に移行！最大火力で突っ込むわよ！」
指揮官の命令に応じ見事な隊列の組み替えを見せるその様子は、例えるならば獲物を狩る狼のそれだ。
「〝勝つ〟のはカチューシャたちよ！準備はいい？」
その言葉に、鋼鉄の狼たちは皆一様に軒昂たる答えを返す。
口角が上がるのを堪えられない。
いいぞいいぞ、こうでなくては。
さあ、楽しんでいこう。
高らかに叫ぼう。これが開戦の号砲だ！
「「「「ｙｐａａａａａａａａａａａａａａａａａ!!」」」」

「――憧憬、標（しるべ）……進むべき正道への希求。それこそがおまえの求道か。おいおい、これはなんとも素晴らしいではないか」
紅白戦の様子を、そしてそこに参加する全ての人間の様子を無人の観客席から睥睨していた甘粕は、カチューシャたちが見せた気概に、そしてまたそこに至った道程に心か

らの喝采と礼賛を送っていた。
カチューシャが示し、彼女の仲間たちが示した勇気。
その原点となったのはカチューシャによる正道であり、その背中を見て仲間たちは奮い立った。
格好良い様を見せることで、仲間の覚醒を促した。
それは奇しくも、自身がかつて憧れた仁義八行の夢（みらい）――その方法として英雄が示した道と非常に似通っていたから。
「祝福しよう。おまえたちの勇気と覚悟に、万歳ッ！」
心からの人間賛歌をここに謳おう。おまえたちは素晴らしい！
彼女たちはこれからも強く美しくあり続けるだろう。そしてその輝きは、彼女が語ったように下らぬ蒙昧共の闇を容易く消し去るのだろう。
彼女がそう信じている。ならば、俺がこれ以上口を出すことは無粋という以外にない。
もはやこの艦で為すべきことはない。いや、俺は最初から不要だったのだ。昨日の一件でそんなことはとっくに分かっていた。
では、部外者は去るとしよう。
だが、その前に――

「――さて、おい。見たいのならば堂々と見たらどうだ?」
物陰に向けて声をかける。そこにいるのは最初から分かっていた。
果たして甘粕の声に応えるように、チューリップハットをかぶり、珍しい弦楽器を抱えた少女が姿を現す。
「……」
服装からはどこの学校かは推察できないが、わざわざなんでもない訓練の日であった今日この場にいるのだ。
少なくとも戦車道に関わっている人間であることはほぼ間違いない。そんな人間が、たった今目の前で繰り広げられた熱戦に何も思わないはずがない。
「俺は甘粕正彦という。よければ、名を聞かせてもらっても?」
「……名前はない。みんなからはミカって呼ばれてるよ」
堂々とした甘粕の声とは対照的に、ミカと名乗った少女の声はどこか飄々とした声で答えた。
ポロロン、と少女が持つ特徴的な弦楽器が風に乗って奏でられる。
風がいっそう強く吹く。飛ばされないように帽子を押さえる少女を、甘粕は静かに見つめていた。

継続高校Ｙｋｓｉ　〝逃避〟

〝勝利〟とは、何だ？
〝栄光〟とは、何だ？
それを得れば、人は本当に幸せになれるのだろうか。
私はそれを――それのみを切実に問うてきた。
無論、そんな漠然とした問いに答えが返ってきたことなど一度もない。そして当然、私の中でも答えは出ない。
ただ、それでも――いいや、だからこそと言うべきか。
私はその疑念を拭い去ることが出来ないし、したくないのだ。
勝利とはとても恐ろしいものだ。人を惹きつけてやまない輝きの内に猛毒の牙を秘めている。
金、栄誉、社会的地位――そういったものはどうしても過剰摂取してしまった途端、逆に所有者を苦しめにかかる。
いわゆる反作用というやつだね。

敗者からの妬みつらみや有名税、人物像の一人歩きにあらぬ期待や噂話。
悪意と、そして何より純粋な善意ゆえにそれは激痛となって勝者を襲う。
勿論、では勝利してはいけないと言っているわけじゃない。そんなことを真剣に言っている人は心底馬鹿だと思う。
人ならば誰しも例外なく勝利という結果を目指す。それは自然で、当たり前の行動原理。
そうすれば間違いなく何かを手に入れることが出来るし、その人の現状も改善されるから。
そう。勝てば、幸せになれる。
――本当に？
そうして、思考は再び回帰する。
私はずっとずっと、繰り返している。
出口の見えない森の中を、彷徨い続けている。
――それはひょっとしたら……いいや、やめよう。
せめて心の中でくらいは、煙に巻くのはなしだ。
それは……逃避。
疲れ果てて、窶(やつ)れ果てて、擦り切れて、その果てにただ自由に、気ままに――風のよ

うに生きることを選んだ。
逃れられない勝利の呪いから少しでも、ほんの少しでも遠くへ。
それが不可能であることを心のどこかで自覚しながら、それでもあの終わりのない地獄から脱け出したかった。
〝勝利〟からは逃げられない。
いつかは分からない、しかし確実に訪れる恐ろしい瞬間――何か小さな切欠で全てが終わるその時まで、私は幻想という竪琴（カンテレ）を奏でるのだ。
――そして、ああ……。
「……年貢の納め時、なのかな」
毎度の如くプラウダの学園艦に忍び込んだ……というと語弊があるかな。今は普通に寄港中だから、大手を振って観光客として入れたわけだしね。
目的は……まあ、これも毎度おなじみの救出作戦。
広いこの学校で日の目を見ることのない色々なものをちょっと借りに来て、そうしたら丁度紅白戦をやっていたから、気になってこっそり覗いていたら――
「――見たいのならば堂々と見たらどうだ？」
――どうして、気づかれたのだろう。
私よりも先に、たった一人観客席で心底楽しそうに試合を観戦していた長身の男性。

一度たりとも試合から目を離していなかったのに、どうして？
本音を言えば逃げ出したかった。
だって、試合を見ていれば嫌でも目に入った。そしてなんとなく分かった。
彼は――化物だ。
私のような只人とは何もかも違う、絶対に分かり合えない傑物（狂人）だ。
そんな人と向き合えば、その熱によって私は灼かれてしまう。
だから逃げようとして、けれど彼の言葉に、どうしてか後ろへと進む足は竦んでしまって――そして、気づけば彼の前に歩み出てしまっていた。
まるで少年のように目を輝かせながら自らの名を名乗った彼が、私に名を問うてきた。
その様子が、忘れたくても忘れられない過去の傷を抉る。
期待――彼は私に期待しているのだ。
あの素晴らしい戦いを見たかよ、何も思わないはずがないだろうどう思う――と。
――よくやったわ。それでこそ■■■の後継よ。
……。
――■■、すごい！私も■■に負けないよう頑張る！
……。

――うちの馬鹿娘が申し訳ありません、■■■■！ほらアンタも頭下げて！今度あんな下らない真似をしたらただじゃおかないわよ!!

「……ッ」

フラッシュバックする光景を必死で抑えつける。

そうだ。私はミカ。

もう■■■も、■■■も、■■■も何も関係ない自由な旅人。

だから、大丈夫。

大丈夫だ。止まない嵐などこの世にない。

「……名前はない。みんなからはミカって呼ばれてるよ」

気を抜けば声が震える。直視すれば足が震える。

だから目をそらして、カンテレを奏でよう。

いつものように飄々と。

一陣の風が吹く。

それに曝されて、帽子が飛ばされそうになった。

慌てて演奏を止めて、改めて深く被りなおす。

よかった、と安堵の息が漏れた。

そんな私を、彼は真っ直ぐ見つめている。

その目がとても恐ろしくて、私は深くかぶった帽子の中に目線を隠した。
「……さて、この場にいるのだ。どこかの高校の戦車道関係者と俺は見ているのだが……おまえは先の試合をどう見た？率直な感想をぜひとも聞かせてくれ」
「……その問いに答えることに、意味があるとは思えないな」
視線を彼から外して、遠くを眺めながらカンテレを弾く。
私はミカ。名無しの旅人。
もう何にも縛られない、自由の身なんだ。
「意味、か」
だから適当にはぐらかしたのだが、そうしたら彼――甘粕正彦は大真面目な様子でそう返してきた。
そう――意味なんてない。
私が真面目に答える義理なんてない。
誰かの期待とか、そんなものに馬鹿正直に向き合っても痛いだけ。
だってそんなことをしても、状況は悪化する一方だったから。
爪弾いたカンテレの音が、その通りだと言ってくれた気がした。
「嘘偽りない本音を語ることに、いったいどうして恥じる必要がある。ましてそれを恐れ、隠すこと――俺に言わせれば、そちらのほうが意味がないと思うがな」

「……初対面の人間相手への言葉とは思えないね」

思わず少し語気を強める。けれど彼はまるで動じた様子がない。

「不躾だったかな。これは失敬。だが、これは紛れもなく世の真理だ。社会とは己と他者で出来ている。ならばその中で己が存在を確立せねばならんだろう。己はここにいると、腹の底から叫ばねばならん」

彼が語るのはどこまでも暴論で、そして同時にこの上ない正論だった。

そして気づいた。彼が見ているのはもっと深い部分。

試合の感想を聞きたいと言ったのも、所詮はそのための助走のようなもの。

「俺の問いに答えるか否かも、本質的にはそこに帰結する。彼女らの勇姿に思うところがあるのだろう?まさか、何も感じぬとつまらん嘘はつくまい。初対面の人間相手ゆえの緊張?そこまでする義理はない?ああ、確かにその通りだよ。だが、そんな言葉を並べ立てて俺を煙に巻いても、他ならぬおまえ自身からは逃げられんぞ?」

曇りのない正論が容赦なく突き刺さる。

彼の理屈は滅茶苦茶だ。大多数の人間は今の私たちを見れば、まず間違いなく私の側に立つだろう。

初対面の人間相手にいきなり迫ってきたかと思ったら、心の内を曝け出せだって?

常識的に考えて礼儀の欠片もない。いつもの私ならさっさとごまかすか、あるいは

はっきりと拒絶の意志を述べていただろう。
だけど、初めて見る規格外に私は身動きがとれない。
彼はきっと、正しいことを、正しいときに、迷うことなく実行できる人。
そしてそれだけにはとどまらず、人間ならば誰でも必ず出来ると心底信じているのだ。
胸を張れ。前を向け。大志を抱け。諦めなければ、夢は叶う。
さあ人々よ、煌めく栄光を目指し羽ばたくのだ。
――ああ、なんて眩しい。
なんて、恐ろしい。
だから反論したくて。
でも、それがとても怖かったから出来なくて。
「――逃避や欺瞞は結構だが、それのみを繰り返していては余りに進歩がなさすぎる。必ずどこかで、戦わねばならない時と場所がある。……おまえは、その時になっても逃げるのか？」
「――ッ!!」
胸を抉る正しい言葉に、弾かれるかのごとく私はその場から逃げ出していた。
走る。走る。一刻も早く、優しいあの場所へ帰りたかった。

「……」

足早に去ってゆく少女の背中を見つめながら、甘粕は珍しく黙り込んでいた。

彼女のことは少々聞いたことがある。当然、その内心に秘めているであろう傷についても同様に。

だが、他者の観点から聞き及んだ内容と実際に会って確かめた内容では、当然差異が生まれてくる。

ゆえにこの場で彼女に出会ったことは甘粕にすれば僥倖で、そして探りを入れた結果見えたのは、決してそう珍しいものでもない全容だった。

逃避。それは甘粕が嫌う人間の弱さであり、言ってしまえば彼女を構成している大部分はそれに見えた。

そして決して遠くない未来、押し寄せる現実に彼女の世界が破綻するときがやってくる。

その時、彼女はどうするだろうか。

逃げるか、諦めるか、それとも迷い続けるか――今の状態が続くならば、待ち受ける結末は悲惨なものになるだろう。

ではどうする？おまえは間違っているぞ情けないと、彼女を再び正道へと引き戻すか？

逃れられぬ宿命を突きつけて、立ち直らねば終わるのみだと尻を蹴り上げるか？

――魔王ならばそうするだろう。だが、今の俺はそうではない。

「おまえならばどうする。柊四四八――」

少なくともあの男ならば、そんな真似だけは絶対にしない。

そして無論、破滅に近づきつつある少女を黙ってみていられるほど俺は無責任な人間ではない。

そして、何よりも。

「その宿命を乗り越えた先にある輝きを、俺は見てみたい」

甘粕正彦は人間を愛している。だが、彼が掲げた人類愛はもう一人の英雄によって打ち砕かれた。

その理想を信じてみたいと思った。

ならば、先に述べた彼女の人物像も、それが全てなどとどうして言い切れるだろうか。

いいやむしろ、安易な逃避を選んだと仮定するならば、彼女の行動には疑問符がつく。

それはすなわち、彼女自身も気づいていない輝きが眠っているということで――

「それを呼び覚ます。ああ、こうして悪役になるのも久々だな」

上手くいく保証などどこにも存在しないが、気になったならばつい手を出してしまうのがこの男の拭い難い悪癖である。

ゆえに、彼は動き出す。

そして――――

「久方ぶりだな。ここがおまえの選んだ死に場所か？」

外洋を航行していた継続高校の学園艦。

訓練を終えて整備倉庫に向かっていたＢＴ―４２の前に現れた甘粕は、車内から顔を覗かせた途端小さな声を上げて固まったミカに、そんな爆弾を投下していた。

Ｋａｋｓｉ　〝不名誉な栄光〟

静かだ、とそんなことを考えながらミッコは周囲をきょろきょろと見渡した。
耳に届くのはＢＴ―４２が放つ駆動音と、時折吹いてくる風の音のみ。
いつもならば森の中から聞こえてきて当然の鳥や獣の鳴き声がしない。
魚の撥ねる音がしない。
まるで、森に生きる全てが死んでしまったようだと。
まるで――何かとても恐ろしい怪物がいるようだと、私の直感がそんな非現実的な警鐘を鳴らしている。
そして、その元凶など――
「――ちょっと。いきなり出てきて何訳の分かんないこと言ってるわけ？」
目の前に立っている、この男しか有り得ない。
たった一人の人間を、生き物たちは恐れて逃げた。この静寂は、きっとそんな信じられない理由から生まれた非現実の結界。
そう。この男がただそこに在るというだけで、世界は驚くべき変化を見せている。
……常識的に考えれば有り得ないが、きっとそれこそが真実なのだとミッコは確信し

ていた。
だから何かをかばうように――いいや、文字通り大切な人をかばうため。
同じく異常を察したアキとアイコンタクトを交わして一緒に戦車を降り、男の前に立った。
「ミカがあんなになるのなんか初めて見たよ。……あんた、ミカに一体何したの？」
「ミッコの言う通りです。……ここまで取り乱すミカは見たことがない。それにそもそも、貴方は一体誰ですか？」
思えばプラウダから帰ってきたその時から、ミカの様子がどこかおかしかった。
まず変だと感じたのは、いつもならば持って帰ってくる戦利品がなかったこと。
そして、なんとなくではあるが雰囲気が変わっていたこと。
どうしたのかと聞いてもいつものように言葉を濁されて具体的なことは分からなかったが、何かまずいことが彼女に起きたのではないかと、そんな漠然とした不安を抱えていた。
そして見てのとおり、悪い予想は当たっていた。
背後にいるであろうミカを肩越しに見やれば、普段の掴みどころのない態度は影も形もなく肩を抱いて小さく震えている。
ミッコとアキは男の言葉の意味など分からない。だけどそれが、ミカの根幹に関わる

何かを強く揺さぶるものなのは理解できた。――それがミカにとって、きっと何よりも辛く苦しいことだということも。

だから、それが許せない。

そんな勇気を、しかし男は知らぬとばかりに踏み越える。

「――退(の)けよ」

「――ッ!?」

「ひっ……!?」

ただ一言。そこに込められた尋常ならざる熱量と、絶対零度の冷徹さ。

相反しながら決して矛盾しないそれらが、物理的な圧力を伴っているかのように二人の身に容赦なく叩きつけられる。

ごく普通の少女である二人が耐えられる代物では到底ない。

「俺は彼女と話をしに来たのだ。部外者は引っ込んでいるがいい」

そう告げるだけ告げて、甘粕は座り込んだ二人の間をすり抜けるようにして戦車へと――呆然とするミカのもとへと向かってゆく。

顔を上げたミッコは見た。喜悦一色に染まった男の顔を。

笑っている。嗤っている。心底愉快だと言わんばかりに。

（……何だってんだよ、畜生ッ……!!）

何も分からず、何も出来ず、二人は事の顛末を見つめるしかなかった。

「さて。再びこうして相見えたわけだが……存外悪くない場所だな、おまえの逃避先も」

世間話をするかのような口調で、甘粕は語りかける。

「改めて自己紹介をしよう。日本戦車道連盟副理事、甘粕正彦。おまえの未来に新たな光を齎さんと願う者だ」

その言葉に闇はない。真実の誠意と礼儀を以て、甘粕正彦は怯える少女の前に立っている。

「……そんなに偉いあなたが、こんな場所までわざわざ何の用だい？」

その熱に、ミカは応えることが出来ない。肌身に感じるのは悪意ではなく、正真正銘の誠意や期待。

どこまでも清廉で王道。人とは斯くあるべしという理想像のようだと感じた。

それに比べて自分のなんと情けないことだろうか。

相手の目を見ることすら恐ろしいから目を逸らす。

彼の言葉を聞きたくないと、頭の中で猥雑な思考が巡っている。

早く終わってくれと、ただひたすらに祈っている。

「そんなに己を卑下するなよ。俺はおまえの実力と才気を見込んでいるからこそ、ここまで足を運んだのだ。今の高校戦車道の世界で、おまえに匹敵する者などそうはおるまい」

それすらも見越しているのか、あるいは知らずか。

この人の言葉に宿っているのは本気の期待。おまえは大した人物であると、素晴らしいと心底からそう思っている。

アキとミッコが困惑した様子でこちらを見ている。普通に考えればそれも仕方のないことだろう。

どんな大悪党かと思っていたら、そいつの口から出てきたのは闇も曇りも一切ない心からの称賛と期待。

一般論で語れば喜ぶべきもので、恥じる必要などない。まして怯える必要などさらに輪をかけて皆無。

だけど、それは違うのだ。

期待、称賛、栄光に名誉――それらがどれだけ痛いものか、二人は知らない。

それでいいと思っていた。あんな苦しい世界を、どうしてわざわざ知る必要がある？

この場所で、ただ楽しく戦車道を出来ていればそれでよかった。
なのに――
「どうして、こうなるんだ」
〝勝利〟からは逃げられない。
どこまでいっても呪いのようにつきまとい、私を苛んで止むことがない。
そうやって私は、大切なものを失ってゆく。
まるで脱出不能の蟻地獄。
そして、そんな私の嘆きを彼は見逃さない。どこまでもどこまでも、私を追いつめてくる。
「勝利とはそういうものだろう。それを目指すがゆえに傷つき、それを得たがゆえに痛みを伴う。――もっとも、俺の考えで言えばそんなものは所詮抜作どもの戯言に過ぎん。
敗者からの妬みつらみ？馬鹿らしい。そんな連中の言葉など、所詮何の熱も魂も宿らぬ空虚な負け惜しみだろう。心を強く持つがいい。己は勝者であると、満天下に高らかに示すがいい。そうすれば、勝者の道が歪むことなど決してない」
これ以上ないほど真っ直ぐで、雄々しい正論。
それは確かに理想だが、それを実現できる立派な人間が一体どれだけいるという？

「そんなの――」

怒りが恐怖を忘却させる。理想（ユメ）をまるで人間ならば踏破できて当たり前のように語るこの男がどうしようもなく憎らしい。

戦車を降りる。ようやく真正面から向き合い、初めてはっきりと彼の顔を見た。

笑っている。愉快だ素晴らしいと、そんな歓喜と称賛一色に染まった喜悦を以て、彼は私という敵対者を歓迎していた。

蒼穹のように澄みきった男の瞳が私を映す。その眼光ごと気迫で押し返そうと震える魂を燃焼させた。

「――そんなの、無理に決まってるだろう！」

……そう。そんなことは不可能だ。少なくともまともな精神を持っていては、無限に続く地獄に耐えられる道理などない。

「思い通りにならないことに囲まれて、心を日々削られて、それでも真っ直ぐ前を向いて進めだって？確かにそれは理想だろうさ素晴らしいよ。だけどそんな辛く険しい道を好き好んで歩めるほど、私は強い人間じゃない……っ！」

自分が普遍的な人間の精神を体現しているなどと、そんな自惚れは言わない。

だけど、人間ならばそうあるべきと高すぎる理想を語る彼が間違っていると言わなければならない。

「……分からんな」

そんな精一杯の反駁を、彼はやはり変わらぬ表情で受け止めて、一転静かな声色でそう言った。

「おまえならば逃避を選ぶと思っていたよ。逃げ場のない理論で崖の端まで追い込んでも、崖の下へと逃げるとな。……だが、おまえが選んだのは反論。ああ分からんな、あの時逃げたおまえが、どうして今は立ち向かう?」

その言葉に、私の思考が一瞬停止した。

あの時?

私にとってのあの時とは、紛れもなく■■の家でのことで。

「それならば最初から逃げる必要などなかっただろう。……ああ全く、これでは例の娘も悔やみきれんな」

「――――」

真っ白になった思考のまま、気づけば彼の頬をはたいていた。

「――そう。その目だよ」

だというのに、彼は気にした様子もなく言葉を紡いだ。

「おまえは俺を見た時に、まず逃走という選択をとろうとしたな。だがそれは仲間二人が戦車を降りてしまったことで破綻した。そうして逃げ場がなくなったと見るや、今度

はいきなり反論と、そして今の攻撃だ」

「ああ、勿論煽るような真似をした俺が悪いとも。だがそれにしても、おまえの方向転換は急すぎる。逃げの算段も現状への悲嘆もかなぐり捨てて、最も攻撃的な選択に至ったその要因は一体なんだ？」

……。

「これ以上どこにも逃げられぬと悟ったから？否。それが出来る人間ならば、そもそも最初から逃げることなど選ぶまいよ。人の堕落には際限がない。一度道を外れれば、後は坂を転げ落ちるが如く破滅へと一直線。それこそが人の持つ拭いがたい宿痾であり、だからこそおまえの選択は不可解だ」

怠惰というものはどうしても甘美である。現実から逃避し偽りの快楽に身を任せることは楽で、この上ないほど幸福に破滅する。

だからこそ、かつてこの男はそれを無くそうとした。あらゆる人間から逃げ場を奪い、さすれば必ず立ち向かってくれると信じたがゆえに。

そう。誰よりも人間を見てきた甘粕正彦ですら認めたのだ。

人は、踏み外した道から己の意思のみを動力に帰還することは難しいと。

「それを指して自由に、好きなことをやっているとでも？それこそまさかだろう。決して終わらない正論と期待の連鎖――おまえはそれを苦痛に思い、あの場所を捨てたのだ

から」

土壇場で逃避を選ぶような人間であるならば有り得ないと、そんな矛盾を突きつける。

であれば、それはおそらく矛盾ではない。そもそもの前提が間違っているのではないかという問いだということに、ミカは気づいた。

「ゆえに問おう――おまえは一体何がしたいのだ？」

だからこそ甘粕正彦は言葉を投げかける。

おまえの歩む道とは一体何だと。それさえ分からぬようでは碌な結末にならないと。

「勝利か？敗北か？あるいは逃走か？

逃げるのならば荷物は幾つだ？何処を目指していつまでだ？――それを確と自覚するがいい。でなければおまえは何も得られず、そして何も守れないまま変わらない。

そして、俺はそのためにここに来たのだ」

今がその時だと伝えるために。

尻を蹴り上げて分からせるために。

そのために自分はやってきたのだと静かに語る。

「私は――」

ミカの言葉を遮り、甘粕は言葉を続ける。

「ゆえに、おまえに道を示そう。我々日本戦車道連盟が、現在日本国内におけるプロリーグの設立と国際大会の誘致に向けて動いているのは知っているな？俺はそれに向け、国際強化選手を選抜せねばならんのだが――」

既に数メートルに過ぎない距離をさらに詰める。

「――――」

そして一瞬視線を交わし、そのまますれ違って――

「――俺はおまえを推薦するつもりだ。継続高校の隊長殿。いやそれとも、■■■■と呼んだ方が良いかな？」

忘れられぬ過去とともに、最高に不名誉な栄光を叩き付けた。

Kolme 〝傷跡〟

「――――」
息が詰まる。
喉が渇く。
突きつけられた最高に最悪な未来に対して、しかし私は何の反応も出来なかった。
反論や反駁をするか？――無理だ。
ならば逃避か？――出来ない。
いっそ彼の提案を受け入れるか？――嫌だ。
真っ白になった頭に浮かぶのはそんなマイナスの感情と現状からの逃避ばかり。
何一つこの場を乗り切る案は浮かばず、ただただ黙り込んでいた。
このままでは駄目だと分かっていても、私は下を向くばかり。
昔と何一つ変わらない自分の弱さに、いよいよ涙が零れた。
「――ごめんね」
謝罪の言葉は一体誰に向けてのものか、当の自分でさえ分からない。
「ごめんね……ごめんね……っ」

壊れたカセットテープのように、何度も何度も嗚咽が漏れた。
「ごめんね。ごめんね。ごめんね、ごめんね、ごめんね……っ!!」
何度も、何度も――何度でも。
どうしようもない現実という不条理を前にして、決して特別な存在ではない私が出来ることなど何もないのだ。
――いや、違う。
特別に生まれてしまった普通の人間だからこそ、私はこんなにも惨めで情けない。
「……？」
ふと、両手に暖かい感覚。
目を開けて、顔を上げて、何だろうと見てみた視線の先には――
「――アキ、ミッコ」
――全てを捨てて逃げたこの場所で見つけた、大切な二人の笑顔があった。
「ちょっと待ってて」
ミッコが背後で佇む彼にはっきりとした口調でそう言い、アキが私の手を引いてキューポラを開けた。
「――大丈夫だよ、ミカ」
手を引かれるまま慣れ親しんだ車内へ入る。一番最後にミッコが入ってキューポラ

に腰をかければ、そこは紛れもなく私たちの世界。いつもと少し配置は違うけれど、私の大切な場所が戻ってきた。
「はい、これ」
置きっぱなしになっていたカンテレをアキが拾ってくれた。
私はそれを受け取り、胸に抱く。
「――大切なものでしょ。忘れちゃダメだよ?」
その言葉が、何故かどうしようもなく胸に響いた。

まるで子供のように誰かに許しを請うミカを、これ以上見ていられなかった。
ああ、だってそうだろう。
涙を流し、肩を震わせながら俯いて――そんなの、とても不自然じゃないか。
私が知っているミカは、いつだって静かに笑っていた。
あたしが見てきたミカは、いつだって楽しそうだった。
――それはひょっとしたら、私がまだ彼女を全然理解できていないだけかもしれない。

――それはひょっとしたら、あたしがまだ彼女の一部分しか知らないだけかもしれない。

けれど、そんな一面――ミカがこの場所で見せてくれた笑顔は紛れもなく本物だった。

自分が知っているのは彼女の一部分だけかもしれない。

部外者であるという彼の言葉も、間違ってはいないのかもしれない。

でも――

「それを、大切だと思うから」

「失くしたくないと思うから」

――ミカは友達だから。

そんな彼女が泣いている。理由など分からないけれど、そんなものはどうでもいい。

ただ、全然似合っていないと伝えたかった。

だから立ち上がろう。目の前のこの人はとても恐ろしいけど、そんなことはどうだっていい。

やるべきことは変わらない。

そうしてみれば、隣で全く同じタイミングで立ち上がる姿が見えた。

「行こう、アキ」

「うん」
短い会話を交わし、そして歩き出す。
今度は、何故か止められなかった。
「――ミカ」
アキが呼びかけるが、ミカは俯いたまま答えない。
だから二人は、そっとその手を握った。
「――アキ、ミッコ」
ようやく上がったその顔は、やっぱり全然似合っていなかった。
だから一刻も早くもとに戻ってほしいと、ＢＴの中に彼女を誘った。
車内に置いたままになっていたカンテレを手渡せば、まるで縋るようにそれを抱きしめている。
いつもならば絶対に有り得ない。少なくとも、ミカがこのカンテレを持っていないのを見た記憶などない。
「――ミカ」
カンテレを拾ってきたアキが、そのままミカに寄り添うようにして隣に座りながら口を開いた。
「私は、ミカに何があったのかは知らない。どうして苦しんでいるのかも分からない。

――でも、だからこそそれが許せない。そんな似合わない顔をしてほしくないと、そう思うんだ」

自分が今、何をすべきかすらも分からない。それでも、大切な友達に寄り添ってあげることくらいは出来るし、そうすればきっと涙を止めてあげることくらいは出来ると信じている。

「ミカは一人じゃない。あたしがいて、アキがいる。全部全部一人で背負い込んでたら、今みたいに自分のことさえ分からなくなっちゃうよ」

自分たちはアキの言った通り、ミカがどうしてこんなにも泣いているのか分からないし、知らない。

「あたしもアキも、ミカのことをまだ全然知らない。だけど……ううん、だからこそ力になれる」

不完全であることは、即ちそこに可能性があるということ。

何も知らないし分からない端役だからこそ、その関わりの中に見えてくるものがある。そしてそれはおそらく、ミカにとっても自分たちにとっても大切なもの。

「自分と向き合うには、自分を知らない人と関わること。だから、ミカ。どうして泣いているのか教えて。

そうすれば見失った道も、隠れた本音も、きっと見つかるよ」

全部全部曝け出せなんてことは言わない。
ただ自分たちにも、ミカの痛みを背負わせてほしい。
そんな言葉に――
「……ありがとう、二人とも」
ようやっと、私は少しではあるが笑うことが出来た。
ああ、私はなんと恵まれているのだろう。
こんなにも素敵な友達がいる。支えてくれる仲間がいる。
「君たちは、私にとってどんな宝石よりも勝る――最高にきれいな宝石だよ」
それが本当に嬉しくて、だから私も決心がついた。
「ねえ、二人とも――〝勝利〟って、何だと思う？」
答えはない。当たり前だ。そんなに簡単に見つかるような答えならば、そもそも私はここまで迷わない。
それでも、私はただ聞いてもらえるだけで嬉しかった。
自分の弱さを人に見せることは辛くて、恥ずかしくて、恐ろしいものだ。
だから私は、傷を誰にも見せたことは無かった。つきまとう過去が恐ろしかった。本当の自分を知られるのが恐ろしかった。
そうすることで自分を守っていたけれど、そうすることで自分を傷つけていた。

隠し事はいつか必ずばれるものだ。
いつかは分からない、しかし必ず訪れる破滅の時。それに怯えて、けれど何も出来なかった。
だから、今こうして己を曝け出そうと話していること自体初めての経験で、これがどういう結果を齎すのかは分からない。
「――今から話すのは……そんな袋小路に迷い込んでしまった、旅人を気取った少女のお話だ」
己の傷を抉ることになる。きっと痛いし、苦しいだろう。
けれど、今の私は一人じゃない。
だから、と踏み込んでゆく。奥へ、奥へと。
「その子は、とある戦車道の名家に生まれた。一人目の娘だったから、生まれたその瞬間からその子は大きな期待を寄せられていたんだ。……家の跡取りとして、ね」
それを不幸と捉えるか、逆に幸福と捉えるかは人によって変わるだろう。
生まれた瞬間からレールの敷かれた人生とは、逆に言えばその上を進む限り安泰であることの裏返しなのだから。
「幸せだったか、と聞かれたらなら……そうだね。その子はきっと困った顔をして黙り込んでしまうと思う。ただ一つ確かなのは、その子はそんな家に生まれたからこそ戦車

道というものに触れることが出来たんだ。
——そして、心からそれが好きになった。楽しかったんだ。何にも縛られず戦車に乗って、仲間と笑いあって、対戦相手と互いの健闘を称えあって。少なくともその時に限れば、幸せだったんだ」
どこか遠い所を見ているような目で、ミカは訥々と言葉を続けた。
「だけど、そんな幸せな時間は長くは続かなかった。大きくなるにつれて、その子を取り巻く戦車道は変わっていった。……簡潔に言えば、跡取りとしての責任がいよいよのしかかってきたんだ。日々の訓練は厳しくなって、何をやっても後継という肩書が先行するようになった。……この時点で、その子が好きになった戦車道は殆ど残っていなかった」
勝つためにはあらゆる手段が正当化された。
昨日まで笑いあっていた仲間が、突然壁を作ったような態度になった。
「全ては期待から。後継者ならば、あなたならばと……望んでもいないのに勝手にそんなことばかり言われて、果たさなければならない使命とか、責務とか、そんな重荷だけが増えていく。……知っているかい、二人とも。
有名になるとか、尊敬されるとか——そういう栄光というのは、同時に痛みも伴うんだ。時に敗北よりも辛く、苦しい痛みをね」

実力を発揮すればするほどに。努力すればするほどに。

現状を変えようとどれだけ頑張っても、逆にさらなる痛みが襲ってくる。

「そして、不幸なことにその子は〝勝てる〟側の人間だったらしい。その子自身はこれっぽっちも欲しいなんて思わないのに、望まぬ勝利を重ね続けた。厳しくなった訓練にも必死で食らいつき、いつも身をすり減らして勝ちを掴んだ。――これで最後だと自分を励まして、現状を変えようと勝利を願って……けれど、勝利は一度たりとも状況を変えることはなかった。

むしろその逆――全く同じような事態が、さらなる難易度でやってくる。次の相手、次の課題、次の訓練、次の次の次の――それこそが、勝者の背負うべき義務であると言わんばかりに」

それに耐えられるだけの精神を持っていればよかった。

あるいはいっそ、何の変哲もないごく普通の只人として生まれたならばよかった。

「それでも、その子がなんとか壊れずにいたのは……その子の妹の存在が大きかった。いつも後ろをついてきて、真っ直ぐな目で言うんだ。自分も姉のようになりたい、姉に負けない立派な戦車乗りになりたいってね。……それは確かに期待という重荷だったけれど、何故か痛くなかったんだ。

――だから、その子は妹が目指すに相応しい格好いい姉であろうと決めた。そして同

時に、妹を決して自分のような苦しい目には遭わせたくないとも。だから、伝えたんだ。〝戦車道には、人生の大切なすべてのことが詰まっている〟、とね」

黙って話を聞いていたアキとミツコが僅かに目を見開く。

ミカが一度、深く息を吐いた。

「まだ小さな妹には……いや、当の本人でさえその意味はよく分かっていなかったかもしれない。けれど、きっと二人ともその根底にある信念だけは分かっていた。

戦車道は戦争とは違う。勝つことはあくまでもその理念を実現するための通過点の一つに過ぎない。当時のその子がそんなところまで考えていたかは分からないけれど、それでもその子にとってその言葉は精一杯の反抗だった。抗えない激流の中で流木にしがみつくように、その子自身がその言葉と妹に縋っていたんだ」

どれだけ足掻いても現状が変わらないなら、せめてその中で自分だけは見失わないように。

そうすればこの蟻地獄の中でも耐えられると、そう思ったから。

「だけど、そうやって一つの試練を乗り越えた先に待っていたのは更なる試練。ちょうどその頃、妹が初めて大会に出場することが決まったんだ。その子の家が主催するもので、妹たちと同じ世代の子たちが出場する、どちらかと言えば親善試合と言った方が適切かな。勝ち負けよりも戦車道という競技の裾野を広げようとしたみたいだけど、そこ

に待っていたのは目を背けたくなる現実と、そしてこれからの末路の先触れとも言える事故だった」

見たくないものから目を逸らすように、ミカは開いたキューポラから覗く青空を見上げた。

しばらくの沈黙が車内に満ちる。

「……この前の全国大会決勝、覚えてるかい？」

再び口を開いたミカは、一見無関係に見えるそんな問いを投げた。

アキとミツコも、もちろんそれについては知っている。

首肯した二人を一瞥し、ミカは再び視線を空に向けた。

「風の噂によれば、今黒森峰と、そして西住流では彼女の行動を糾弾していると聞く。十連覇を逃す羽目になったその戦犯としてね。……連中の頭の中では、勝つためなら死人が数人出ることすら許容されるようだ。それと全く同じことが、あの時起こった。内々に処理されて表沙汰にはならなかったけど、表沙汰にならないほうがおかしいんだ。――どこの世界に、死人を許容する武道があるんだい？」

武道でもスポーツでも、その目的は健全な心身の育成にこそある。その中で死人が出ることも、ましてそれを隠蔽したり許容したりすることなど言語道断だろう。

だが、よりにもよってそれが起きた。

「戦車道は安全を期しているけれど、それは絶対じゃない。……運悪く、その子の妹の対戦相手の一輌に火災が起きてね。燃えているその車内に、乗員が残ったままになってしまったんだ。まだ子供ばかりで、そんな突然の事態に誰も動けなかった。救助が来るまでには時間が必要で、その間燃えている車輌が無事である保証なんかどこにもない。

――そんな時、その子の妹が動いた。その当時から戦車道に関わっていたのが役に立ったんだろう、すぐさま救助に行ったんだ。ちょうど、黒森峰の副隊長みたいにね。我が身も顧みず必死に、そして冷静に対処したおかげで死人は出なかった。軽い火傷で済んだけれど、言い換えればあの時妹が助けに行かなかったら……どうなっていたか分からない。かくして試合は無事に終わり、その子も妹の行動を誇らしく、そして嬉しく思った」

柔らかい笑みを浮かべていたミカだったが、すぐにその表情に影が宿る。

「――でも、話はこれだけじゃ終わらなかった。試合が終わって少し経ったある日、火傷を負った子の親が家に来たのをその子は見た。火傷がまだ完治していない娘を連れて、家元であるその子の母親に会いに来たんだ。詳しい事情とか、事後処理のことを聞きに来たのかと、その子はこっそり様子を窺うことにした。……でも、聞こえてきた会話の内容は全然違ったんだ。

――〝うちの馬鹿娘が申し訳ありません〟だって。……信じられるかい？怪我をし

た娘を馬鹿呼ばわりして、事態の対応力がどうこうと説教をして、強引に頭を下げさせていたんだよ。家元も家元で、口では謝罪の必要はないと言いながらこの事件を隠蔽した！なんだそれは、ふざけるなっ！」

声を荒げたミカに、二人が一瞬体を震わせた。

今まで見てきた彼女からは想像も出来ない、怒りと悲しみとやりきれなさが滅茶苦茶に混ざり合った声。

荒い息を整えながら、ミカが自らの胸に抱えたカンテレに目を落とした。

「――後になって、その子が戦車道を辞めたと聞いた。そしてその時悟ったんだ。……これが、戦車道の未来なんだって」

勝つためには犠牲も厭わない。

勝つためには手段を選ばない。

通過点から到達点へ。勝利のみを至上とした血みどろの競技。

それこそが戦車道という嗜みが辿る末路だと思った。

「さっきの彼が持ってきたプロリーグもその一環だ。競技として確立された戦車道では、戦車は単なる道具へと成り下がる。誰もが勝つために欠点を潰し、戦いは高度に理論化されて、強さのみが正義になる。そうして戦車は選ばれた一部の人間の所有物になって、弱い者はそれをただ見上げるだけになる。――私は、それが嫌だった」

単なる道具や手段となってしまえば、そこに楽しみなど最早見出せない。いいやむしろ、それによって生活が左右されるという重圧から、戦車のことを嫌いになってしまうかもしれない。

そんな可能性の未来を見てしまったから。

「耐えられなかったんだ。そんな辛い未来を見ることが。そして何よりも、私自身がそれを推し進めなければならない立場にあったことが。……だから、逃げたんだ。勝手にやってろ、ってね」

「継続に来たのは、まだ私の好きな戦車道が残っていると思ったからだ。もちろん、名門校に行けば過去の私を知っている人がいるかもしれないというのも理由の一つだけどね。

傷を抉られたくないから、私は旅人を気取った。自分の弱さや罪と向き合うのが怖いから、名前を捨てた」

それこそが名無しの真実。誰にも傷跡を見せないために。忘れ去りたい過去から少しでも離れるために。

「けれど、逃げ続けることなんか出来やしない。私が世の全てを忘れようとしても、世間は私のことを忘れてはくれない。……どこまでいっても、過去という鎖が私を捕まえて離さない。本当の意味で自由になることなんか、真実出来っこないんだよ。ちょうど

今、あの人（甘粕）が来たようにね」

積み重ねた勝利ゆえ、私の心はこんなにも痛い。

「私の言っていることが、結局は弱者の論理だってことくらい分かっているさ。どんな武道でもスポーツでも、その根底にある理念を守り続けることなんか不可能だ。有名になればなるほどに、人気が出れば出るほどに、そこには多くの色が集まってくる。純粋な単色のままあり続けることは出来ないと、分かっているんだ」

利害、名声、策謀に権益。他ならぬその世界を愛する人間やその将来を憂う人間によって原初の荘厳はかき消されてゆく。

子供のように純粋に楽しむことが出来なくなって、誰もが必死に競技と化したそれをしなければならなくなる。

逆説的に言えば、そうしない限りその世界は衰退するのが自然な流れなのだ。

理想や理念とはあくまでも目標に過ぎないのであって、それを至高としてしまえばそもそも武道や競技として成り立たない。

例えば、大抵の学生スポーツの目的は教育とされている。

勝ち負けではなく、そのスポーツを通して礼儀や礼節といったものを学ぶ――誰しも一度くらいは耳にしたことがあるだろう。

では、それを額面通り受け取ってしまえばどうなる？勝利には何の価値もなく、そこ

に見出すものによって価値が決められるとは、一体どんなものか？

極論、勝負に勝ったにもかかわらず少々礼儀に欠けていた。理念に反している――などと言われて泥を塗られるような世界が生まれるだろう。

そんな世界で、一体誰が馬鹿正直に勝利を目指して努力するだろうか。いいやそもそも、そんな狂った世界には普通の感性を持っている人間ならば近寄ろうとさえしないのではないか。

「〝勝利〟は確かに素晴らしいものだよ。その価値が貶められるようなことは、それこそ絶対にあってはならない。だから人はそれを求めて、そう簡単には届かないからこそ希う。その輝（ヒカリ）きの前に、当初の理念が半ばお題目になってゆくのはどんな場所でも起きて当然なんだ」

それこそが正道。それこそが王道。――それこそが、摂理。

「でも、それじゃあその流れについていけない人はどうすればいい？所詮お題目に過ぎないと言われる理想（ユメ）をこそ大切だと思うのは間違いなのか？そうまでして勝利を得ても、結局辛いだけじゃないか。

……だから、私はずっと迷っているんだ」

〝勝利〟とは何なのか。

〝栄光〟とは何なのか。

それを得れば、人は本当に幸せになれるのか。

「……継続を指して、あの人は死に場所と言った。それは私が、変わりゆく世界に耐えかねて緩やかに死んでゆくことを選んだから。私の好きな理想は幻想にすぎず、その先に未来はない――言いたいのは、多分そんな感じだろうさ。だから、とても現実的でかつ輝かしい話を持ってきた。……それを受け入れたとき、どれだけ私が痛い思いをするのか知りもせずに」

〝勝利〟とは素晴らしいもの。

〝栄光〟とは誇るべきもの。

それを得るために研鑽を積み、努力してライバルたちとしのぎを削る。その果てがどんな結末であろうと、それこそが人間の輝きであり幸福である。

真っ直ぐ前を向いて進み続けることが出来る人間は、きっとこんな風に考えているのだろう。

けれど、そんな正論で全ての人間が納得するわけもない。

少なくとも私は、そんな真っ当な意見は大嫌いだ。

「……私は、どうするべきなのかな」

思考は再び回帰する。

出口の見えない森の中を、彷徨い続けている。

けれど、その森には火がついていて。

その場に留まっていれば破滅すると分かっているのに、私は出口を見つけることが出来ないのだ。